
三兄弟の事件簿

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三兄弟の事件簿

【Nコード】

N1044D

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

高橋空は、二歳のときに今の両親に引き取られた。自分が三つ子だと知ったとき。彼は兄弟を探す決意をする。そんな中、空は学校で起きた怪事件の犯人に疑われてしまう！果たして犯人は？兄弟の行方は？ 学校を舞台にしたライトノベルミステリー。 完結

ブローグ

蝉がいつせいに鳴き出した。山の中腹に位置するこの墓地に、その鳴き声が響き渡る。生ぬるい風が墓地を通り過ぎた。

墓地の間の道を、ゆつくりと歩いていった少年が、通過していった風に眉を顰めた。

暑い。箒と塵取りを握っている手が汗ばんでいる。汗が額や背中を流れる感触が気持ち悪い。見上げると日は中天より少し西にある。午後二時。日中では一番暑くなる時間帯だ。暑さに自然と目線が下がる。足下には小さな自分の影があった。

ふと前を歩く同じ年の弟が、速度を落としたような気がして、少年は顔を上げる。少年の弟は手にしたメモ用紙と、墓石に刻まれた文字を見比べながら歩いている。そのためなかなか前に進まない。少年は前を歩く弟にまだ見つからないのかと、声をかけようとした。だがそれより早く、弟が立ち止まり、こちらを振り返った。

「なあ、ここちゃうか？」

言って目線で墓を示した。そんな弟からメモを受けとって、少年は墓石に刻まれた名を確認する。

「ここだな。先に掃除始めようか」

弟にそう言って、少年は手にしていた塵取りを地面に置く。弟は少年に頷き返し、墓に供えられていた、枯れた花を抜いて塵取りの中に入れた。持ってきた花を変わりに活ける。

流れてくる汗を何度も拭いながら、二人は手早く掃除を終えた。箒とゴミの入った塵取りをひとまず脇に置いて、二人は墓と向き合った。

「ここに眠ってるって、変な気分やな……」

「うん……」

急に静かになったと感じて、すぐにその理由を思いつく。蝉がいつせいに鳴き止んだのだ。

二人は同時に墓の前にしゃがみ込むと手を合わせた。目を瞑ると途端に周りの音が大きく聞えてくるような気がする。しばらくして目を開けると、隣の弟に視線を向けた。

弟は立ち上がった。それにつられるように立ち上がった少年とともに、先ほど来た道の向こうを見る。目を細めて見る先に、墓石が立ち並ぶ以外人の姿はない。しばらくそうして、二人は黙って立っていた。その沈黙を破ったのは少年だった。一度口を開き、だが躊躇うように口を閉ざす。また風が吹いた。弟と良く似た、薄茶色の髪が揺れた。

「なあ。アイツなんで、飛び降りたんだろう」

「はあ？」

急な問いに、意味がつかめなかったらしい弟が訝しげな声を上げた。だがすぐに察しがついたように、はっと目を上げた。

「ああ、アイツのことか」

ここにはいない二人の弟のことを言いたかったらしいと、弟は気づいたようだ。少年は、頷いた。

「そう。アイツが校舎の屋上から飛び降りた時、俺、マジで自分が死んだような気がした。本気で怖かったんだ。アイツは怖くなかったのかな。死ぬこと……」

あの事件が起こったあと、この話を少年と弟は互いに避けていた。どうして今、少年はこの話をしだしたのだろうか。だが、弟はそんな考えを追い払い、少年の独り言のような問いに答えた。

「どうやる。もう、麻痺してたんかもな。怖いって感覚も悲しいって気持ちも」

「それならそうとってくれたら良かったんだ。辛かったら辛い、悲しかったら悲しいって、溜め込むからあんな事になるんだ。俺たちは、たった三人きりの兄弟なのに」

「……そうやな」

弟の同意の声を最後に二人は黙り込んだ。

視線はずっと誰もいない細い道に向けながら。

第一章 写真

高橋空たかはしそらがその写真を見つけたのは、去年の夏だった。その写真は両親の部屋にある小さな机の、引き出しの奥に入っていた。父に頼まれて、老眼鏡を取りに来た時の事である。写真には小さな赤ん坊が三人並んで写っている。寝転んでいるのを上から撮ったようだ。裏を反して見ると鉛筆でこう書かれていた。

『三つ子ちゃん零歳冬』

写真に書かれた言葉に空は驚いた。もう一度写真を表にかえして、空は写真に写る赤ん坊を見る。

皆眠っている。

あどけない顔はどれも似ている。その赤ん坊の内、一番左端で眠る赤ん坊が自分なのではないかと空は思った。心臓が早鐘を打ち始めた。自分が赤ん坊の頃の写真は、この家にはない。空がこの高橋家に二歳で養子に貰われてきたからだ。家には二歳以降の写真ならたくさんあるが、それ以前のものはないと思っていた。

その為、今手にしている写真に写った赤ん坊が、空本人なのかどうかは分からない。自分が三つ子だったという話しも、聞いたことはなかった。

呆然とその写真を見つめる空の背後に、一向に戻ってこない空に痺れを切らしたのだろう。一階で待っていたはずの、父が近づいてきた。

「おや。空その写真……」

驚いて空は後ろを振り返った。

「ゴメン父さん。勝手に……」

謝ろうとした空は、言葉の途中で父に止められた。

「いや。いいんだよ。かわいいだろう。一番左が空だよ」

「やっぱりこれ俺だったんだ」

妙な気分だった。自分の赤ん坊の頃の写真なんて、見ることはな

いと思つていたのだから。

「父さん。裏に書いてあるのって……、俺に兄弟いたの？ 三つ子って書いてあるけど」

尋ねた空に、父は優しい笑みを見せた。

「ああ。そうらしいね。父さんは会ったことないけれど、お前には血の繋がった兄弟が二人いるんだそうだ。それぞれ別の家に引き取られていったそうだよ」

「……なんでもっと早く教えてくれなかったんだよ」

「いや、その写真も空が小学生になったら渡してやろうと思つていたんだよ。なくしたと思つていたのに。ここに仕舞いこんでいたんだな。空には悪いことしたなあ」

すっかりしよげてしまった父に空は慌てて笑顔を見せる。

「何いつてんだよ、父さんはまだまだ若いつて。俺がこの本屋継ぐまでは現役でバリバリ働いてもらわなきゃならないんだからな」

空の家は一階の大部分が店舗になっており、父の前の代から本屋を営んでいる。空はこの本屋の跡継ぎだ。

「ちよつと、いつまで油売つてんの。お父さん、早く店番変わって下さいよ。空もそろそろ塾に行く時間でしょう。高校受験のために塾行きたいって言ったの、空だからね」

そう階下から母に叫ばれて、空と父は大きな声で返事をする。父は老眼鏡を、空は写真を手に階下へと下りてりていった。

そしてあの時手に入れた写真が今も空の手の中にあつた。

めでたく希望の高校に入学して早一月。五月の暖かな日差しが、一年二組の教室にも穏やかに降りそそいでいる。

昼休み。校庭でサッカーをしようという友人たちの誘いに断りを入れ、空は一人教室にいた。

少し考えたいことがあつたのだ。持ち歩いているため、だいぶよ

れよれになつてしまった自分と兄弟達の赤ん坊の頃の写真を、空は自分の席で見つめていた。

写真を見つけたとき、空は密かに思っていた事があった。高校に合格したら兄弟を捜そう。

だから偏差値の高いこの高校の受験勉強もがんばってこれたし、その頑張りのおかげで合格出来たとも思う。だが実際高校生になつてみると何かと忙しく、なかなか兄弟捜索に乗り出せない。何かからすれば良いのか、それが分からないのが現状だった。そのため、空は一度一人になつて考えてみたかったのだ。

小さい頃から可愛いといわれ続けている顔を、空は思いつきり顰めて写真に見入った。

「おおーい。高橋。何見てんねん」

声と同時に後ろからひょいと空は持っていた写真を奪われる。

慌てて振り向いた先に、クラスメートの紫藤海しどうかいがいた。中学までは関西に住んでいたという彼は、高校に入って出来た初めての友達だ。その海が今、してやったりといった感じの笑みを浮かべている。サッカーに行っていたはずの海が何故ここにいるのかということよりも、空は奪われた写真が気になった。

「おい、紫藤。勝手に盗るなよ」

「いいやん。ちよつとくらい」

海は爽やかに笑つて空の後ろの席に座ると、写真に目を落とす。別に見られて困る物でもないのに、空はそれを止めようとは思わなかった。逆にいっしょになつて写真を覗き込む。

「かわいいだろ。左端が俺……どうかした？ 紫藤」

赤ん坊の自分を自慢しようとしたが、なぜか写真を見て固まった紫藤に、空は訝しむ。海は空の問いに、随分間をあけてから答えた。

「……なんで、お前がこれ持つてんねん」
何でとは変な疑問だ。さっき空は左端が俺だときっぱり言つたではないか。

「だって、これ俺だって。自分の写真持つてて何が悪いんだよ」

「ちやうねん、そうじゃなくて、コレ、この写真……俺も持ってる……」

そう言っただけ海は内ポケットから携帯電話を取り出してなにやら操作した後、画面を空に見せた。その画面には空の持っているのと同じ写真が写っていたのだ。驚く空に、海が追い討ちをかける。

「な？　俺と一緒にやる。ちなみに真ん中が俺」

「……」

「……」

互いに顔を見合わせ、混乱する頭を整理しようとする。先に海が口を開いた。

「左端が高橋やったっけ」

「そう。で、真ん中がお前ってことは？」

空の問いに、また無言になる。そうなると校庭の騒ぎや教室の中でおしゃべりしている女子の声が耳につく。

「この写真の裏、三つ子ちゃん零歳冬って書いてあるんだよ」

「……俺、実はもらわれっ子やねん。紫藤の家に貰われたのは二歳の時」

さりとてそう言っただけ、反応を待つように海は空を見る。空は混乱しながらも慌てて口を開いた。

「おっ、俺も。高橋の家に貰われたの二歳の時……」

「俺たちって実は兄弟？」

異口同音に二人はそう言っただけ、またもや黙り込む。余りにあつさり見つかりすぎて拍子抜けというか。だがもしかしたら、とんだ勘違いで、間違いだったなんてことも。などと頭の中はいまだ混乱をきたしている。

だが良く見ると空と海の外見には共通点が多い。空は染めていないのに明るい色の髪をしている。髪を染めている人が多い昨今では余り目立つ物でもないの、特に気にしなかったが、海も空と良く似た明るい髪色だ。空は瞳の色も少し薄い。コレも生まれつきである。海の目も良く見ると空と似た色をしていた。

互いに見詰め合っていた時、第三者の声が空と海の思考をとめた。
「高橋、紫藤。こんな所にいたのか」

その声に真つ先に反応したのは空である。

「いちゃ悪いのかよ。春名」

空の視線の先には秀麗な顔に縁なし眼鏡をかけた少年が立っていた。クラスメートの春名光^{はるな こう}である。クラスの委員長でもある春名と空はなぜかそりが合わず、顔を合わせると口げんかが始まるのだった。大抵空から突っかかっていくのだが、今日は珍しく春名の方から声がかかった。

「まあまあ、それより何や。俺たちに用か？ 珍しいな」

早くも陰悪になりつつある雰囲気止めたのは海だ。いつもこの二人の喧嘩の仲裁に入っている。

「お前ら二人のどっちか、教室の鍵もってないか？ 教室の鍵がまだ帰ってきてないって担任に言われて……」

「それでなんで俺たちのとこ来るんだよ」

相変わらず空は、きつい口調で春名の言葉を遮る。だが春名は気にした様子もなく、ポーカークフェイスで答えた。

「他の奴らにはもう全員聞いた。あとはお前ら二人だけ」

どこか偉そうに春名はそう言った。そう言われると、他に言うこともなく、空は首を横に振る。

「俺は知らない。朝はあつたんだろ」

「ああ、じゃなかったら今頃締め出しくらってるだろう」

もつともなことを言われて、空はムツとした。そんな空の表情に気づいたのだろう。海は慌てたように口を開く。

「俺も知らんで、だれか他のクラスの奴が間違えて持ってたんちゃうか」

「……それならすぐに気づくはずだろう。放課後探すしかないか」

最後の方は独り言の様に呟いて、春名は空たちから離れようとした。だが、その動きを途中で止めて、二人の間にある机の上の写真に目を止めた。

「その写真……」

春名のいつもの無表情が少し驚きに崩れたような気がした。まさか、コイツまで俺の兄弟だった、なんてことないよな。こいつ超金持ちらしいし。もらわれっことは考えにくい。

まさかとは思ったが、空は春名もまた明るい茶色の髪をしていることに気づいた。彼の性格からして、おしゃれの為に髪を染めたりはしないのではないかと思う。

「写真持ってきたらダメだとか言うんじゃないだろうな」

内心の焦りを悟られまいと、空は春名を軽く睨む。

「いや……。かわいいなと思って」

思っても見なかった言葉をさらっとはいいて、今度こそ春名は踵を返して教室を出て行った。

後に残された空と海は、教室を出て行く春名の背を呆然と見つめる。

「俺、春名が笑ったところ始めてみたかも」

「俺も……」

二人が呆然と固まったのは、春名の言葉のせいではなく、その言葉を呟いたときに見せた春名の笑顔のせいだった。空と海は、否クラスメイト達も見ることがないのではないだろうか。春名光の笑顔など。

その笑顔が妙に印象的で、空と海は昼休憩終了のチャイムが鳴るまで、ずっと固まったままだった。

午後の授業が終わると、急に眠気が覚めるのは何故だろう。空はそんなどうでもいい事を考えながら、ゴミ収集所に引きずる様にし、持ってきたゴミ袋を置いた。意味もなく手を叩く。

後は教室に戻って鞆を取ってこなければならぬ。教室は四階で、さっき下りてきた階段をまた上らなければならぬのかと思うと少し憂鬱だ。それに海を待たせてある。人が自分を待っていると思うと妙に焦ってしまう。

靴を履き替えて、下りてくる人の方が多い階段を上る。この階段を四階まで上りきって角を右に曲がればすぐに教室が見える。

だが空はその曲がり角の手前で足を止めた。話し声が耳に入ったのだ。

「ごめんなさい、春名君。私のせいで……」

この声は聞き覚えがある。クラスメートの朝倉有紀だ。クラスの副委員長でもある彼女が何故春名なんかに謝る必要があるのだろうか。

「いや。朝の鍵開け、君に頼んだ僕も悪かったし」

春名の答えで何となく察しはついた。昼休憩の時、春名が探していた鍵のことが原因らしい。おおかた鍵をなくしたのは朝倉だったのだろう。

言っていることは優しいのだが、春名の声は冷たい。表情は見なくても分かる。春名お得意のポーカーフェイスだ。

そう考えてふと今日の昼休憩の時に見た春名の笑顔が頭に浮かぶ。笑った顔は結構いけてたのに。などと、空は思ってしまった。そして思ってしまった自分が妙に腹立たしい。

「でも……私やっぱり先生に謝ってくるわ。だって私が鍵なくしたのに、春名君が怒られるなんて」

こんな会話を廊下でされたら、通りづらいではないか。海が待っているのに。教室はもう目と鼻の先だが、内容が内容だけに、この二人が立ち話している横を通るのは躊躇われる。春名はどうやら朝倉を庇っていたらしい。空が抱く春名のイメージとは合わない気がする。空は内心首を傾げる。だが、またもや空のイメージからは想像も出来ないような言葉が春名の口から漏れた。

「別に。もう怒られてきたんだからいいよ。先生だってもう気にしてない。それに朝倉、バレエのレッスンあるはずだったよな。急がなくていいのか」

「あ、うん。でも良く覚えてたね。バレエの話」
「記憶力がいいから」

さらっとそんなことを言って、春名がこちらに向かつてくる気配がする。どうしよう、どこか隠れる場所。きよろきよろと辺りを見回すが、廊下にそうそう隠れる場所などあるわけもなく、空は曲がってきた春名に見つかった。

目が合って、春名が微かにムツとしたような表情を作る。

あ、なんかコイツ怒ってるかも。そう思った瞬間腕をつかまれて階段まで引きずられていった。

「何すんだよ。離せ」

「言われなくても離す」

そう言って力強く握られていた腕を開放された。空はじんとしびれた腕をさすりながら恨めしげに春名を見る。春名はそんな空を微かに睨み返し、口を開いた。

「黙ってるよ」

凄みがあつて怖い。そう空が感じるほどの目つきと声音で、春名は言った。空は逸らしたい視線を必死の思いで合わせたまま、とばける。

「何のことだよ」

「分かってるんだよ。さっきの話し全部聞いてただろう。ずっと気配があつたからな。あんなところで話してた僕らも悪かったけど、立ち聞きもいい趣味じゃない。せつかく穏便に事を運んだんだ。だれかれ構わず話すなよ」

「わ、分かってるよ。そんなこと。俺だって言っていていいことと悪いことの区別ぐらいつく」

そう言って睨み返してやったら、春名は何かをはかるように眼鏡の奥からじつと空を見返す。そして春名の方が先に口を開いた。

「……分かった、信じる。でも、もし喋ってみる。ただじゃおかないからな」

何でコイツこんなに怖いのだ。表情はいつもと変わらないポーカ―フェイスなのに、なんとういか、雰囲気怖い。

空は気おされて激しく頭を上下させた。それを見て満足したのか、

春名は空を残したまま階段を下りていく。だが途中で足を止めると、振り向いた。まだ何かあるのか。そう思っで見つめると、春名が言った。

「教室の中で野次馬してた奴にも言っといってくれ、さっきの」
言うだけ言々と春名はさっさと階段を下りて行ってしまった。

教室の中で野次馬していた奴って？ そう考えて思い当たった。空を待っている人物。それは絶対、紫藤海に違いない。

空は慌てて教室に戻る途中、見てしまった。教室の前の廊下にいる朝倉が、胸の前で祈るように手を組んだまま放心している姿を。

第二章 騒がれし過去

彼は思った。ああ、またこの夢だと。

幼い頃の自分を彼は外から見ている。

幼い頃の自分。彼は自分が嫌いだった。小さく、臆病で、ただ弱いだけの存在。

今小さな彼がいる場所。初めて連れて行かれた親戚の集まりの中。他の子ども達と一緒に遊んできなさいと親に送り出された広い庭の片隅。小さな彼は、彼より大きな子ども達に囲まれ、怯えていた。彼は人と接することが苦手だった。喘息もちで、激しい運動も出来ずに家で過ごすことが多かった自分。近所の子ども達とも遊ぶ機会がなかったせいで、同年代の子ども達とどう接したらいいのか分からないのだ。

それに今彼を囲んでいる子ども達には、彼を歓迎するムードなど一切ない。小さな彼を、侮蔑を込めた目で睨んでいた。

『お前、孤児なんだってな』

コジ？ コジって何。この頃の彼は孤児と言う言葉を知らなかった。

『おじ様とおば様はなんだってお前みたいなスジョウの知れない子を引き取ったのかって、お母さん達が言ってたぞ』

年嵩の少年がそう言った。他の子ども達が同意する。

『病氣持ちで、たいした利用価値もなさそうなのにつてさ』

『どうせ叔父様たちも、すぐに飽きて捨てるさ。こんなの』

嫌な笑いが彼の周囲でいくつも起こる。だが、彼の頭の中にはこれしかなかった。

『ぼ、ぼくはお父さんとお母さんの子じゃないの』

口に出して聞いたら、頭を打たれた。

『当たり前だ。お前みたいな奴が俺たち一族の人間な訳がないじゃないか。気持ち悪い。そのうち、おじ様たちも目を覚ましてお前を

どっかに捨てに行くだろう』

それから彼はしばらく殴られ続けることになる。顔や腕は目に付くからと、服で隠れる場所を何度も。でも、このとき彼は殴られる痛みよりも、実の親だと思っていた両親が本当の親ではなかったと言っことの方がショックで、心が痛かった。殴られながらずっと捨てられたくないと思っていた。

怖かった。一人は嫌だった。優しいお父さんとお母さんに捨てられるくらいなら、死んだ方がマシだと思った。

そこで、彼は目が覚めた。薄暗い室内に彼の呼吸音が大きく響く。乱れた呼吸。久しぶりの悪夢。何故今頃こんな夢を見なければならぬのか。彼に分かるはずもなかった。夢なのに、余りにもリアルだった。最初は遠くから眺めていたはずが、いつの間にか小さい頃の自分の中に、入りこんでいた。

夢なのだから仕方ないが、夢であるからこそもつといい夢を見たかった。

現実はこのなにも、容赦ないのだから……。

朝の登校時間は好きだ。特に春は良い。暖かな空気はどこか生き生きとして、たくさんの香りを運んでくる風が心地良い。

高橋空は一人上機嫌で、通学路を歩いていた。そんな空の肩を叩いて、紫藤海が空の横に並んだ。

「おっす。高橋」

「はよっ。紫藤」

挨拶を交わす声が、どこか弾んでいる。それもそのはず。空は今朝、両親からある事を聞きだすことに成功したのだ。

「紫藤、聞いてきたぞ。俺たちがいた施設の住所と電話番号」

昨日の帰り、空と海は自分達が本当に兄弟なのか確かめようと話

していた。互いに知っていたのは、自分達が今の親に引き取られる前にいた施設の名前だった。彼らは同じ施設にいたのだ。そこで空は昨日の夜、親に施設の電話番号と住所を聞いてきたのだ。

「おお。すごいやん。えらい。さすが高橋」

「そんな褒めんなよ」

大仰に誉めそやす海に、空はまんざらでもない顔をしている。

「じゃあ、今度行ってみいひんか？　ここ」

「ああ。そうしようぜ」

歩きながら、空と海は先方に電話して、都合がいい日を聞いておいた方がいいだろうと話し合う。そんな会話が途切れたのは、海が春名を見つけたからだだった。

「あ、あれ、春名やん」

「本当だ。珍しい。こんな時間にここ歩いてるなんて」

春名はクラス委員長で、大抵朝一番に登校して教室の鍵を開けている。昨日はどうやら違ったらしいが。

「なあ、アイツ何で朝倉を庇ったんだと思う」

春名を見たせいで、昨日の情景が思い起こされて、空は海に尋ねる。昨日海は空が思った通り、春名と朝倉のやり取りを教室の中から覗いていたらしい。

「あれやろ。朝倉がなくなっちゃって事になったら、色々言う奴も出てくるし。何かにつけて目立つ奴やん朝倉。春名が好きやって公言してはばからへんし、春名のシンパから結構目の敵にされてるって知ってたか？　春名は多分知ってたんやろうな。そう言う事情考えてああいう行動とったんやろ、たぶん。俺結構アイツ見直したわ」

「え？　そうだったんだ。知らなかった。でも、朝倉なんであんな奴がいいんだろ。昨日アイツ滅茶苦茶怖かったぞ」

「ああ、お前脅されたんやったな」

海は数メートル先を歩く春名の背を見ながら、笑いを含んだ声で言った。

「でも、アイツがモテるの昨日ちょっと分かった気がしたわ。春名

と話し終わった後、朝倉の奴ばけーっとなつて、乙女モード全開つて感じやったもんなあ」

その言葉に空は昨日少し目にした朝倉の姿を思い出す。確かに朝倉は、海が言っているように、胸の前で手を組み、惚けていた。

「……俺、今までアイツのこと何か嫌な奴だと思つてたけど、ちょっと仲良くしてみようかな」

その言葉に海は驚きの声を上げた。

「え？ お前入学式の日春名と喧嘩してから、絶対アイツとは仲ようならへんって断言しとったやん」

「だって、アイツと一緒にいたら俺もモテるかもしれないだろ」

「……春名も可哀相やな」

「あ？ 何か言つた」

「いや……」

よっしゃ、絶対に友達になつてやると勢い込む空を、海は呆れて見つめる。だが、まあ、仲良きことは美しきかなつて、誰かも言つとつたし、これはコレでいいかも知れへんな。と、海は思うのだった。特別親しい友人を持たない春名ことは、前から気になつてもいたし。これはこれで良いきっかけになるのかもしれない。

「じゃ、さつそく声かけへんか？」

海の提案に空は快諾する。

「おっしゃ、おーい春名」

耳を塞ぎなくなるほどの大声で、空が春名の背に向つて声をかける。驚いた顔で振り向いた春名に、空と海は駆け寄る。

「おはよう。春名」

にこにこ笑いかけた空に、春名は訝しげな顔を向ける。

「何なんだ？ 一体」

「はあ？ 春名。お前おはようつて言つたら普通おはようつて返すだろ」

常識だろ常識と空は言う。それに対し口を開こうとする春名より先に、海が口を開いた。

「まあまあ。それより春名。今日はどうしたんや。やけに遅いやんか」

口げんかに発展しそうだった会話の方向を変えようとそう言ったのだが、春名には通じなかったようだ。相変わらずの無表情で、春名はこう答えた。

「別に良いだろ。遅刻じゃない」

「ああ、まあそうやけど……」

「おい、春名。なんでそういう言い方しか出来ないんだよ。人がせっかくフレンドリーに接しようと思ったのに」

「……何だそれは。別にそんなの頼んでないだろ」

空と春名の会話を一步後ろで歩きながら聞いていた海は、溜息を吐きたくなった。

結局口げんかが始まるんや。こいつらは……。

教室まで続いた空と春名の口論は、教室のドアを開いた瞬間に途切れた。途切れたのは、教室の中から発せられた嬌声にも似た歓声のせいだ。歓声を上げたのはクラスメートの女子たちだ。女子たちは教室の端に固まって、こちらを見ている。何かと三人は教室の前で足を止めた。

そこへ、副委員長の朝倉が小走りに近寄ってきた。手には何か雑誌のような物を持っている。

「春名君、コレ春名君だよ、ねっ」

そう言って、朝倉は開いた雑誌を春名の目の前に突きつけた。春名は近づきすぎて焦点の合わなくなった雑誌を受け取ると、見える位置まで下げた。それを空と海が左右から覗き込む。

その雑誌はスポーツ雑誌のようだった。雑誌には去年の冬のオリンピック特集が組まれていて、そこに写っているのは確かに春名に良く似ている。

空は写真に写っている、フィギアスケートの選手と春名を交互に見る。顔立ちには似ているが、雑誌に載っている人物とは随分印象が

違う。雑誌に載っている人物が、眼鏡をかけていないからだろうか。いや、それだけではない。纏う雰囲気が違うのだ。今空の隣にいる春名のようなトゲトゲしさが、雑誌に載っている人物にはない。そんなことを思っただけで春名を見ると、彼は渋面を作っていた。

「おお、ほんまやつ。ていうか朝倉。思いつき名前書いてあるやん。本人に確かめんでもさ」

海は春名が持つ雑誌の一部を指差した。確かに名前が大きく出ている。

「そんなのわかんないじゃない。一応確認しなくちゃでしょ」

「確かに雰囲気は違うけど、顔は一緒だし、名前書いてあったら明らかに本人じゃん」

空がそう言うのと、朝倉に睨まれた。結構怖い。空はさっと目を逸らした。

そんな空の横で一人黙って雑誌を見つめていた春名は、一つ溜息を吐くと口を開いた。

「確かに僕だよ。それが何か」

そう言った瞬間、クラスメートからまたもや歓声上がる。あつという間に三人はクラスメート達に囲まれた。

クラスメート達が我先にと質問を始める。春名と一緒にいたせいで騒ぎの中心に身をおく空の耳には、クラスメートの声の大半は聞き取れなかった。

春名はそんな声を聞いているのかいないのか。無表情で、どの質問にも答える様子はない。

一向に口を開かない春名に、周りに集まったクラスメート達の口も重くなったようだ。だんだんと質問の声が小さくなっていく。いつの間にか、静まった声にあわせるように、春名が言った。

「わるいけど、もうスケートはやめたんだ。僕はスケートの話をするつもりは一切ない」

きっぱりと言われた言葉に、クラスメート達から不満の声が上がった。だがその声も春名は無視する。しばらく食い下がっていたク

ラスメートたちも、一向に答える様子のない春名から、落胆の表情で離れ始めた。春名はその中に混じっていた朝倉に声をかける。

「朝倉。聞きたいんだけど」

「何？ 春名君」

問い返した朝倉に、春名はまだ手にしていた雑誌を示しながら言った。

「この雑誌、朝倉が持ってきたのか」

「違うわ。友達に貰ったのよ」

「……コレ、僕に出来ないかな」

「え？ どうして」

「欲しいんだよ。それだけ」

「えっ」

朝倉が驚いたように声を上げた。

まだ横で春名と朝倉の会話を聞いていた空も驚く。先程、春名がスケートの話はしたくないと言った時、春名はどこか苦しそうに見えた。きっとスケートをしていた頃の事を思い出したくないのだろうと、空は思ったのだ。だが、春名はその頃のことを思い起こさせる雑誌を、欲しいという。どうにも空には解せなかった。

「でも、もらったものだし……」

春名は渋る朝倉に目を合わせた。朝倉見つめたまま口を開く。

「ダメかな。欲しいんだよ、どうしても」

空の目にはつきりと分かるほどに、朝倉の顔が朱に染まった。おちたな、と空は思った。

案の定朝倉は首を縦に振る。

「……いいわ。そんなに欲しいならあげる。スツゴク惜しいけど」前半は春名に、後半は独り言のように朝倉は呟いた。

春名は朝倉にありがとうと言うと、自分の席には行かず、教室の後ろへ向かった。

何をするつもりだろうと空が見ている前で、春名は教室隅に置いてあるゴミ箱に、持っていた雑誌を捨てた。

朝倉が息を飲む音を耳で聞いた瞬間。空はキレた。

「おまえ、何やってんだよ」

そう怒鳴っていた。一瞬教室の空気が凍りつく。まずったかなと思っただが、一度口に出してしまった声を消すことは出来ない。

「もらった物を本人の前で捨てるなんて最低な行為だろ。謝れよ朝倉に」

怒鳴ったままの勢いでそう言うと、春名の冷めた瞳と目が合った。「何故？ 僕が貰ったものをどうしようと、僕の勝手だろう。違うか」

「本気で言ってるのか。それ」

睨み付けて言ってやったのと、担任教師が教室の扉を開いたのがほぼ同時だった。

担任教師は教室の異様な雰囲気気づいたのか、一度立ち止まり教室中を見回して口を開く。

「なんだ、何かあったのか」

「別に、何でもありません」

すぐさまそう答えたのは春名だ。担任は溜息を吐くと、生徒達に席に着くように促した。空は席に着く前に一度春名を睨んだが、春名はそしらぬ顔で空の視線を無視した。空の言葉など、何も気にしていないかのように。

放課後になった。終礼を終えるとすぐに、春名光^{はるなみつ}は教室を出た。余り長く教室に居たくなかった。教室は居心地が悪い。

朝、高橋と喧嘩のような騒ぎになったからではない。朝倉に自分の過去を騒がれたからでもない。教室に限らず、春名にとって居心地のいい場所などどこにもない。自宅にもどこにも、心安らげる場所は、もうどこにもありはしない。

ゆっくりと階下へ下りると、春名は靴箱へ向かう。玄関の周りに

は帰宅する生徒以外にも、今からクラブ活動へ向かうと一目で分かる生徒達もいる。

自分の靴を床へ下した時、不意に後ろから声をかけられた。

「あの、春名君」

春名が振り向いた先に、クラスメートの女子が立っていた。背が低く、おとなしい女生徒だ。余り他人に興味のない春名だが、彼女の名前は覚えていた。飯田倫子だ。同じクラス委員の朝倉とともに仲が良いので覚えていた。彼女は委員会があるとき、いつも必ず朝倉を待っている。その飯田が一人でいるのは珍しい。そう思いながら春名は口を開く。

「何？ 急いでるんだけど」

特に急ぐ用事はなかったが、春名はそう冷たく言った。そんな春名に、飯田は怯えたように目を泳がせる。だが、春名の前から逃げ出すようなことはせず、決心したかのように春名と目を合わせた。

「あの、一つだけ、聞きたい事があるの」

か細い声でそう言われ、春名は次の言葉を待った。

「春名君。今スケートやってないんだよね。それはどうして？ どうしてやめたの」

一瞬胸に氷の刃が突き刺さったような気がした。春名は無意識に胸元のシャツを、片手で握りしめる。だが一瞬の動揺は、すぐに冷たい波にさらわれたように静まった。

「そんなこと聞いてどうするの」

逆に聞き返されるとは思わなかったのか、飯田は言葉を探すように口元へ手を当てる。

「……私、あなたのファンだったの。だから、聞いてみたくて。別に騒ぐつもりはないし、誰かに話すつもりもないから。本当よ」

春名は溜息を吐いた。彼女の言葉で分かったのだ。雑誌を持ってきたのは十中八苦彼女だと。朝倉を使って、春名が本当に雑誌の中の春名と同一人物かどうか、確認したのだ。

別におかしくもないのに唇の端が上がり、口元だけが笑いの表情

を作る。

壊してしまいたかった。彼女の中の自分の像を。彼女の中にある
フィギアスケーターの春名光はるみなみつという人物を。

「嫌になっただ」

唐突にそう言った。

「え？ どういうこと」

驚いた様に聞き返した飯田に、春名は続けた。

「嫌いなんだよ、スケート。だからやめたんだ。それだけ。……も
ういいだろう」

そう言うとき春名は靴を履き替え、その場に立ち尽くしている飯田
を置いて外へ向かう。

飯田は春名の答えに何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。
これで、彼女の中の自分の像は壊れたのだろうか。分からない。
分からないが、彼女を傷つけたのは確かだ。春名が答えを返し
た瞬間、彼女の顔が確かに歪んだから。

そんなことをしてどうすると、自分の中で問う声がする。

しかし春名はその声を、心の奥底へ押し込んだ。

第三章 赤い教室

見上げると綺麗な青空で、見える範囲に雲はない。清々しい春の陽気に、高橋空は心躍らせ登校した。下駄箱で靴を履き替え、職員室の前を通った時である。クラス委員長の春名光の後姿を発見した。そのせいで昨日の怒りが戻ってくる。せっかく良い気分だったのに台無しだ。

「おいっ、春名」

空は春名を指差すと、大声をあげた。その声で春名は後ろを振り向き、空に目をとめたようである。空は春名に駆け寄って、開口一番こう言った。

「お前、よくもノコノコ俺の前に姿を現したな。どういう神経してんだよ」

近くにいた生徒達が何事かと空と春名を見比べる。だが、空は興奮していて気づかない。春名は疲れた様に溜息を吐いた。

「どういう神経って……。学校なんだからいて当たり前だろ。お前こそ、なんでそんなに朝からテンション高いんだ」

そうかえされると思っていなかった空は、一瞬言葉に詰まった。犬のように低く唸る。

二人は一緒に階段を上りながら、言い争いを続けた。

教室のある四階まで続いた二人の言い争いは、教室の方から走ってきた副委員長の朝倉によって止められた。

「あ、春名君。大変、大変なのよ」

走ってきた勢いをとめきれず、突っ込んできた朝倉は、その勢いのまま春名の腕を掴んだ。

「大変なの。大変なのよ」

それしか言わない朝倉に、春名が聞いた。

「何が大変なんだ？ それと……。手、痛いんだけど」

春名の言葉に、朝倉は自分がかんりの力で春名の腕を掴んでいる

ことに気づいたらしい。驚いた顔をして頬を染める。だが気を取り直したように顔を上げ、口を開いた。

「ごめんなさい。それより、大変なの。教室が真っ赤なの」

「教室が真っ赤？ 何だそれ。どういうことだよ」

今まで黙っていた空が朝倉に聞く。朝倉はその声で、初めて空が春名の横にいたことに気づいたらしい。

「あら、高橋いたの……あ、紫藤も」

「おーす。おはよう」

空はその声に振り返る。紫藤海がこちらに近づいてきた。

「何や、朝倉。朝から春名にアプローチか」

ニヤニヤ笑いながら言われた言葉に、朝倉は顔を顰めた。朝倉は海の言葉を見無視して、春名を促す。

「とにかく来て。あんたたちも」

そう言った朝倉は教室に向って走り出す。空たちは顔を見合わせたが、すぐに後を追った。

教室の前にはクラスメート達はもちろん、他のクラスの生徒までが、教室の入り口付近に集まっている。皆教室の中を覗き込んでいるが、中に入る様子はない。

「何だよ。どうしたんだよ」

空は仲の良いクラスメートの久保を見つけ、声をかけた。

だが久保は無言で空の背を押すと、教室の中が見える位置まで押しやった。教室の入り口まで来た空は、まずいつもとは違う臭いがかいで顔を顰めた。臭い。だが嗅いだ事のある臭いだ。

そして横の人に押されながらも一步一步踏み出した空が見たのは、朝倉の言葉通りの光景だった。

「真っ赤だ……」

空はそう呟いた。床も、椅子も、机も、赤くなっている。壁の一部や白かったカーテンも、その被害を受けていた。まるで大量の血が飛び散ったようだ。

一体誰がこんな事……。

「酷いな……」

いつの間にか横にいた春名が呟く。空は春名を見た。春名は眼鏡の奥の瞳を細め、教室を凝視している。空ももう一度、視線を教室に戻した。

一瞬本当に血かと思ったが、よく考えればそんなわけがない。血なら乾けばもっと赤黒くなるだろう。それに教室の床の殆どが、赤くなっているのだ。こんな大量の血をばらまけるはずがない。それこそ大量殺戮でも犯さなければ無理だろう。

教室にぶちまけられた色は鮮やかな赤い色。そして、この鼻を突くような臭いには覚えがあった。

「コレはアレやな。ペンキやな。酷い臭いや」

春名とは逆隣から、関西弁が聞こえた。空はそちらに顔を向け、話しかけた。

「誰がこんなこと……」

「おいお前ら。そこで何をしている」

背後から聞いた声に口をつぐんで、空は振り返る。担任の黒田が、こちらに向かつて来る姿が見えた。空たちを押し分け、黒田は教室の中を見て息を飲んだ。黒田は不機嫌な顔を、近くにいた春名に向ける。

「春名。コレはどういうことだ」

「分かりません」

黒田の怒気のある問いに、春名はそっけなく答えた。それに怒りをつのらせたのか、黒田は顔を紅潮させる。

「この教室の有様は何だ。え？ 春名」

半ば怒鳴る様に言った黒田に、春名は恐れる風もなく簡潔に答えた。

「僕には分かりません。さっき教室に着いたばかりなので」

黒田はフンと鼻を鳴らす。

「春名。確か一昨日教室の鍵をなくしたんだったな。そのせいじゃないのか？ コレは」

春名は黙って担任教師を見返す。

「何故黙っている。もしかして鍵をなくしたと言っていたのは嘘で、本当はお前がやったんじゃないだろうな」

余りの言われように、返す言葉を失ったのだろうか。春名は何も言わない。そんな春名を押しつけるようにして、空は黒田にくっつかかった。

「先生！ そんな訳ないじゃないですか。春名は俺たちと一緒にさつき教室に着いたばかりだし、昨日は俺たちより早く帰ってるんですよ。そもそも、春名がこんなことするわけないじゃないですか。クラス委員長なのに」

大声を張り上げた空の横から、海も教師に言う。

「そうですよ先生。とりあえず今やらなあかんのは犯人捜しじゃなくて、この教室をどうにかすることじゃないですか」

空と海の言葉に、黒田は押し黙った。

その時、廊下の向こうから新たな声が教師を呼んだ。

「黒田先生。山下先生が呼んでます」

「ああ、坂木」

空たちの視線を浴びながら、空たちと同じ制服に身を包んだ長身の少年がこちらに近づいてくる。

空はその人物を知らなかったが、その人物が三年生であることは分かった。制服のネクタイが、三年生の学年色である緑色をしていたからだ。ちなみに二年生は赤、空たち一年生は青色のネクタイである。

長身の少年は黒田の前まで来ると、穏やかな笑みを浮かべた。

「山下先生から伝言です。今から緊急の職員会議を開くから、すぐに職員室に戻るようにとのことです。この教室は使えないので生徒は視聴覚室で自習させるように言われました。僕が教室の鍵預かってきましたから、皆を連れて行きますよ」

「ああ。悪いな坂木。後頼む」

そう言って黒田は空たちを見向きもせず、そそくさと職員室へ向

かった。

空は傍らにいる海の制服の裾を掴んで、引っ張った。

「なあ。あの人誰？」

小声で言った空に、海は呆れたように小声で返した。

「はあ？ 坂木先輩やろ、生徒会長の。入学式の時前出て喋ったやん」

「そうだった？」

空は顔を坂木の方へ向け、首を捻った。入学式の間中、眠くてあまり内容は覚えていないのだ。坂木のことを記憶に無いのも仕方がないだろう。

その坂木は黒田が廊下を曲がって行ったのを確認したあと、教室のドアへ向かった。

中を覗くだけかと思ったら、そのまま教室の中に入ってしまふ。

誰かがあつと声を上げたが、坂木は気にした様子も無く、教室のほぼ中央の位置まで机を避けながら歩いていった。

教室中にぶちまけられた赤いペンキはもう完全に乾いているらしく、坂木の履いた上履きに赤い後を残すことは無かった。

立ち止まった坂木は一度ぐるりと教室中を見回したが、ふと何かに気づいた様に二歩ほど歩き、空たちが見ている戸口を背にしゃがみ込んだ。何かを見つけたようだ。

坂木が立ち上がって戸口を振り返った。

「これ、この教室の鍵だよな」

「え？ でも鍵は私が職員室へ返しました」

坂木の声に答えたのは朝倉である。空のすぐ後ろから声が聞こえたので、空は朝倉を前に出すように、脇へ下がる。

「でも朝倉。それは予備の鍵だろう」

そう言ったのは春名で、朝倉ははっとした顔になる。

「そうか。じゃあアレが……」

「失くしたはずの鍵ってわけか……」

何故教室の中にカギが落ちていたのだろう。空は不思議に思った。

昨日の時点であんなところに鍵など落ちていなかった。それに春名は鍵を探して、クラスメート全員に鍵の所在を聞いていた。鍵がなくなっていたことはクラスメート全員が知っている事になる。鍵が教室のほぼ中央に落ちていれば、誰か一人くらいは気づいていたはずだ。

坂木はゆつくりとした足取りで、戸口まで戻って来た。そこで初めて気づいた様に、春名を見る。

「あれ、春名。お前のクラスだったのか」

「はい。坂木先輩」

春名は相変わらずの無表情で頷いた。どうやら春名と坂木は面識があるらしい。

「これ、このクラスの鍵だよな」

春名は坂木に鍵を差し出され、受け取った。空はそれを横から覗き見る。

「本当だ。うちのクラスの鍵だ」

春名ではなく空がそう漏らした。春名の手の平に置かれた鍵にはプレートが付いており、そのプレートにはマジックで一年二組と書かれていた。空の予想に反して、鍵には何処にも赤いペンキがついた様子は無い。薄汚れてはいるが、それは前からだ。

「さつき失くしたって言ってたな。その鍵」

坂木が言い、春名が頷く。

「はいー昨日。でも教室は全部見て回ったのに、なんであんなところに落ちていたんだろう」

春名の言葉に、空も考える。だが、坂木があっさりと可能性を口にした。

「それは、教室をこんなにした犯人が鍵をここに落としていったか、もしくは置いていったんだろ。何のためか分からないけど」

「でも……」

春名はそう呟いて、一旦何かを考えるそぶりを見せた。その後、近くで様子を窺っていた朝倉を見る。

「朝倉。教室の鍵は閉まっていたんだね」

「ええ。朝教室の前まで来たら、何人かがここでたむろしていたの。聞いたら鍵が閉まっていた教室に入れないって言うから、私が予備の鍵を取りに行ったのよ」

この学校では、教室の鍵を職員室から取り出せるのはクラスの委員長と副委員長だけだ。春名は考え深げに顎に手をあて、口を開く。「本当にカギは閉まっていた？」

春名のしつこい問いに、朝倉は素直に頷く。

「一度全部確かめたわ。窓も後ろのドアも。鍵を取りに行く前に」
「そう」

それだけ言うと春名はまた黙った。周りでは野次馬たちがざわついている。空は春名が何を考えているか気になった。話しかけようとしたが、予鈴のチャイムの音に阻まれた。

「さあ、予鈴も鳴ったしとりあえず皆視聴覚室へ行こう。僕が遅刻になっちゃうよ。プリントが教室に置いてあるから。それを仕上げる様について先生からのお達しだ。復習プリントだから教科書無くても大丈夫だろう」

そんな坂木の言葉に、クラスメートの数人からえーと言う声が漏れる。勉強しなくてよいと思っていたようだが、それは甘い。

クラスメート達がそろそろと、坂木の後ろについて歩き出した。

しかし春名は教室に目を向けたまま動かない。それに気づいた空が立ち止まって春名を呼んだ。

「おい、春名。何やってんだ。早く来いよ」

「ああ、鍵閉めていくから」

「鍵？」

空は春名の方へ戻る。春名はその間に、ドアを閉じた。先程坂木から手渡された鍵を、鍵穴に入れる。なんの抵抗も無く音を立てて鍵は閉まった。

「閉まったな……」

春名がそう呟いたのに、空は眉を寄せる。

「何言ってんだ。当たり前だろう」

ほらさっさと行くぞと春名の背中を押しながら、空は内心首を傾げた。春名は一体何を考えているのだろうかと……。

空が春名に抱いていた怒りは、この出来事ですっかり消え失せてしまっていた。空がそのことに気づいたのは、もう随分たってからのことだった。

第四章 疑惑

その当時、とても大きく見えたスケートリンク場に、彼は両親に連れられてやってきた。親戚の家に行き、自分が両親の本当の子でないを知って以来、彼はずっと塞ぎ込んだままだった。そんな彼を心配して、両親は気晴らしになればと、家の近所にあるスケートリンクへ彼をつれて来た。

まだ時間が早かったせいか、リンクの中にいたのは少女一人だけだった。その少女は妖精を彷彿とさせるような衣装に身を包み、リンクの中を軽やかに滑っていた。

その姿を目にした彼はしばらく口も聞けずに、その少女を見つめていた。リンクの中で滑る少女は優雅で、見ているものを惹きつける。度々ジャンプをして見せる姿は、まるで本物の妖精がはしゃいでいるように見えた。

『すごいな、きれいだな』

小さな彼を抱き上げていた父が、瞬きも忘れるほど見入っている彼にそう声をかけた。彼は頭をめぐらせ、父を仰ぎ見た。

『あのお姉ちゃんヨウセイさんの？』

目を輝かせて聞く彼に、父は苦笑いを返す。逡巡の後、父はこう言った。

『いいや。あの子は妖精さんじゃないよ。あの子はフィギアスケートの選手なんだ』

『フィギアスケートってなに？』

彼の問いに、父はリンクで滑る少女を指差す。

『アレのことだよ。そうだ、興味があるならやってみないか？』

父がいいことを思いついたと言うように、声を上げる。だがそれを、傍らで黙って聞いていた母が止めた。

『何言ってるんですか、あなた。この子は喘息持ちなんですよ。出来るわけじゃないじゃないですか』

諫めるように言う母に対し、父はおおらかに笑う。

『なに、大丈夫さ。この子にやる気があるなら、病気にだって負けやしないさ。それに喘息の発作が起こるのは精神的部分が大きいと医者も言っていただろう』

『でも……』

まだ洩る母を置いて、父は抱いていた彼をおろし、目線を合わせるようにしゃがんだ。

『どうだい、やってみるかい』

彼は父の言葉に、首を大きく縦に振って答えた。

『僕やってみたい。やらせて、お父さん』

これが自分の、最初で最後のわがままだったのかもしれない。

彼はそう考えた。小さな自分とまだ若い両親の近くに彼は立っていた。コレは夢だ。初めて自分がフィギアスケートに出会った頃の夢。あの時父が言ったとおり、フィギアスケートにのめり込むうちに、喘息の発作は自然と出なくなった。

だが彼にとって一番嬉しかったのは、フィギアスケートの試合にいつも両親そろって応援に来てくれることだった。どんなに小さな試合でも、忙しい仕事の合間を縫って、彼の両親は見に来てくれた。そして大会に勝つと両親は惜しめない賞賛を与えてくれるのだ。

彼は次第にこう思う様になっていた。自分がスケートを続け、名を上げていく限り、両親は自分を見捨てはしない。自分が価値のある人間でいる限りは、親戚連中も何も言わない。両親が自分を引き取ってよかったと思わせるような人間で、居続けなければならないと。彼は堅く心に誓ったのだ。

それなのに……。自分は両親を失望させた。何の価値も無い人間に成り下がった。両親はいつも辛そうに自分を見る。彼は心密かに怯えていた。いつ、両親が自分を捨てるのだろうか。

不意に辺りが暗くなる。暗闇の中に立つ自分。コレは今の自分の心の中なのだろうか。彼はそう思うのだった。

教室中に赤いペンキがぶちまけられてから五日がたった。翌日の土曜日には教室のペンキを落とす作業が業者によって行われ、休日明けの月曜日には教室はいつもと同じ姿を取り戻していた。

五日間で分かったことといえば、ばら撒かれたペンキが隣の空き教室に置いてあったものだったということくらいである。そのペンキは、数日前に演劇部の舞台セット用に購入されたものだったらしい。犯人はそのペンキを、空たちの教室にばら撒いたのだ。

教室の後ろには小さなロッカーがついていて、殆どの生徒が机の中ではなくロッカーに持ち物を入れていた。それが幸いし、個人の持ち物にはさほど被害が及ばずにすんでいた。だが中にはその被害にあったものもいたわけで、その中に高橋空の名もあった。

「あーム力つく。何だってこんな目にあうんだ」

空は大きめの体操服に身を包んでいる。先ほどまで六時間目の体育の授業を受けていたのだ。たまたまあの日、体操服の入った袋を机の横にかけていたため体操服が被害にあった。もうその体操服は使い物にならない。注文している体操服が届くまでと、学校から借りた体操服は、小柄な空のサイズより一回り大きいものだった。

気を抜くとずり落ちてくる体操服を早く脱ぎたくて、空は体育の授業が終わると走って更衣室に来た。更衣室の中はいつも汗臭い。さっさと着替えて出るに限る。

「まあ、災難やったけど。お前が教室に忘れんかったら、こんな目にあわなかったんちゃうか？ 半分は自業自得やん」

からかう様に隣に立った海が言う。さっさと着替え終わった空は、着替え始めたばかりの海を見て唸る。

「うう。でも、あんなことになるなんて思わねーじゃん。普通」

「まあ。そうやな、一番悪いんは教室をあんなにした犯人やし。犯人誰かもまだ分からへんし」

「そうだよ、警察に届ければよかったんだよ。そしたらさっさと犯

人捕まえてくれたかもしれないのにさ」

「まあ、アレやる。多分犯人は生徒やし、大事おおじこにしたら来年の受験人数にも響くかもしれへん。学校は保守的やもんな」

「……あー。犯人わかんねーままうやむやになるんだろつな。悔しすぎ」

空は乱暴に頭を搔く。着替えを終えた海は話を逸らそうとしたのか、別の事を口にする。

「そつえば、またさぼつとつたな。春名」

その言葉に空も頷く。空も気づいていた。春名がいつも体育の授業に姿を見せないことに。

たまに姿を見せても最初のストレッチだけして、その後はいつの間にか姿を消すのだ。クラスでもそれは話題になっていて、こんな噂もあるくらいだ。『春名は不治の病で、運動は出来ない』とか、『授業をサボっても何も言われないのは、親が大金持ちで、学校に多額の寄付をしている為だ』とかそういった内容で、どれも真実味は薄い。

本人に確かめるのが一番手っ取り早いのだが、それを聞く雰囲気は春名には無く、誰も真実は知らなかった。

二人は連れ立って更衣室を後にして、教室までの階段を上がる。今日はもう授業は無く、後は終礼をして終わりだ。

教室のドアを開けると、予想通り春名は教卓前の自分の席に座っていた。教室にはまだ春名しかいない。空と海は走って更衣室まで行ったので、教室まで戻るのも一番早かったらしい。

「春名。またサボっただろう。体育」

空が大声を出した。春名は戸口に立つ空たちを振り向く。

「……お前らに迷惑はかけてない」

「誰もそんなこと言ってねえだろ。お前入学してから一回もきちんと授業受けてないじゃないか、単位取れなかったら留年だろ」

「……心配してくれてるのか」

意地悪な顔をして、春名が聞いた。空は頭に血が上るのを自覚す

る。

「だ、だ、誰がお前なんか心配するかー」

怒鳴った後に、廊下からざわざわと多数の人が近づいてくる気配を感じた。空は口を閉ざす。着替え終えたクラスメート達が戻ってきたようだ。空と海はそれぞれ自分の席に座ることにした。

終礼も終わり、掃除タイムに突入した教室では箒を片手にした空が、イライラと床を掃いていた。終礼前に春名と言い争いしたことがまだ尾を引いているのだ。人が心配してやったのに、言いたいことと言いやがって、結局体育をサボる理由も聞けずじまいだったじゃないか。と、空はさらにイライラをつのらせる。

そして空はふと、掃いて集めたゴミが結構溜まったことに気づいた。気分を変える様に、塵取りを持っている女生徒に声をかけた。

「飯田。こっちも頼む」

「あ、うん」

空に呼ばれて飯田は廊下で集めたゴミをゴミ箱に捨てると、空の近くまで寄って来た。小柄な空よりもっと小柄な飯田は、大人しい少女だ。空が彼女の名前をフルネームで覚えられたのは、つい最近だった。

飯田はゴミの前にしゃがみ込むと、ゴミを入れやすい位置に塵取りを持ってくる。その中に空はゴミを入れた。

一通り塵取りにゴミを入れた後、立ち上がった飯田に、空は声をかける。

「ありがとう、飯田」

「え？ ああ、どう致しまして」

最初なぜ礼を言われたのか分からなかったようだが、飯田はにっこりと笑ってそう言った。

なかなか可愛い笑顔だ。

ゴミをゴミ箱へ入れて、机を元の位置まで並べ終えた後。空たち掃除当番の五人は、ゴミの入った袋をだれが収集所へ持っていくか

を決めるジャンケンに、挑もうとしていた。

五人で円になり、全員で声を合わせる。

「じゃーんけーんほいっ」

出された手は空からパーが五つ続き、最後の一人がグーを出していた。空はふと気づく。

あれ、なんで腕が六本あるんだ？

空が浮かんだ疑問に答えを出す前に、一人グーを出した人物が声を上げた。

「あー、負けてもうた。で、これ何のジャンケンやったん？」

悪びれもせず、そう言ったのは、無理やり割り込んでジャンケンに参加した紫藤海であった。空は頭を抱えなくなった。

「あー、紫藤。お前っていい奴だな。じゃ、お先」

掃除当番の一人である久保がにかつと笑って海の肩を叩くと、鞆を手に教室を出て行く。

「へ？ 何やねん、俺なんか良い事した」

「そりゃとつても。紫藤君ありがとう」

「じゃあ、後よろしく」

などと口々に掃除当番のクラスメート達が帰っていく。後に残ったのは空と飯田と、ぽかんとした海だけだ。

「なあ、何やねん。皆そそくさと教室出ていったけど……」

「あの、紫藤君。言いにくいんだけど……」

「お前がジャンケンに負けたから、ゴミを持っていくことになったんだよ。お前が」

「へ？ あれゴミ捨て決めるジャンケンやったんか」

今更なに言っただと、空は驚いている海に言いたくなった。

「ええー、皆酷いわ。俺なんやはめられた気分」

「はめられたんじゃない。自分からはまっただろ。自業自得だからな」

「ひどいわー。うち。知らんかってんもん」

よよよ、と海は傍らにあった机に泣き崩れるまねをした。

それを見て、空と飯田は顔を見合わせて笑う。しばらく笑った後、飯田が言った。

「でも、紫藤君掃除当番じゃないし。ゴミ袋、私持っておりようか」
飯田が海を見上げるようにそう申し出てくれた。
だがそれを断ったのは海ではなく空だった。

「ああ、いいって。あれ結構重いから。それにさっきも言ったとおり、こいつの自業自得だから」
「でも」

なおも言いつのろうとした飯田だったが、今度は海がその声を遮った。

「ああ、ホンマにええって。俺が悪いんやし、ちゃんと持ってくわ」

「あ、いた。リンコちゃん。早く帰ろうよ」

教室の扉の方からそう声がかかって、三人が目をやると、そこにはクラス副委員長の朝倉が立っていた。明るい朝倉と大人しい飯田はなぜか仲がいい。

「あ、うん。待ってて」

飯田はそう言うと、海にゴメンねと謝った。飯田は机の上に置いていた鞆を取ると、待っていた朝倉のもとへ駆け寄った。ドア出る前に一度振り向いて、空を見る。

「バイバイ。高橋君」

そう言って手を振ると、飯田は教室を出て行った。空はその背に向かつて手を振り返す。その横で、海が羨ましそうな声を上げた。
「なんでバイバイ紫藤君はないんや。不公平やわ。いいなあ高橋。モテモテで」

「なっ、バカ言ってるじゃねーよ。手を振らただけじゃねーか」
「でもー。高橋君限定やったやん」

「そ、それはそうだけど。でも深い意味はないと思うぞ」

照れて赤くなった空に、海は人の悪い笑みを見せた。

「照れんでもええやん。可愛いなあ。高橋君」

「いつも君つけて呼んでねえ癖に、気持ち悪い事すんな」

「いやーん。高橋君の怒りんぼ」

またもやなよと身体を動かす海は、すっかり空の反応を楽しんでいる。空はそれが分かってわざとらしく溜息を吐くと、口を縛ったゴミ袋を手にした。それを海につきつける。

「さっさと持てよ。早く帰るぞ。今日は家で電話かけるんだから」

「ああ、そやった。早よ持ってくか」

空と海は明日訪ねる予定の施設に、空の家で電話をかける約束をしていた。

二人がかりでゴミ袋をごみ収集所に持っていくと、そのまま校門へ向かう。その時、近くから声がかけられた。

「お、紫藤と高橋じゃん」

「久保。何？ 部活じゃねーの」

先程まで一緒に掃除をしていたクラスメートの久保は、手に菜っ葉の入ったダンボールを抱えている。

「部活だよ。俺生物部だろ。コレはウサギの餌なんだ」

空は納得した。収集所に行く手前の角を曲がると飼育室があり、そこにはウサギと鶏、そしてなぜかヤギが飼われている。久保はその飼育をしている生物部の部員だった。

「可愛いぜー、ウサギ。なんなら見に来る？」

「あ、えっと、遠慮しとく。俺、小動物って苦手なんだ」

嬉しげに誘ってくれた久保に悪いとは思いながら、空はそう言っただけで断った。だが久保ばかりか、海までが意外そうな顔をする。

「ええ？ 高橋って小動物系だからてつきり好きだと思ってたんだけど」

そう久保が言えば、海もその言葉に頷く。

「おお、俺も思ってた。あれか、同属嫌悪ってやつかいな」

「なにが同属嫌悪だ、失礼な。どうせ俺は背が低いし、童顔だよ」

「あはは、拗ねんなやー高橋。誰もそこまで言っへんやん」

「そういう所が何か小動物系なんだよね。小さい犬が吠えてる感じっていうの？」

「だから誰が子犬だつつつの。ホントお前ら失礼だよ」

空はぷいっと顔を背け、さっさと踵を返して校門の方へ向かう。

「あ、じゃあ、久保また明日」

「おう」

後ろでそんな会話が交わされていたが、空は無視して黙々と校門を目指した。

空の機嫌が直ったのは、家についてからだった。空は一階から自分の部屋へ電話の子機を持ってきた。緑園の電話番号が書かれたメモを持って、子機のボタンを押す。

夕日の光が、西向きの窓から部屋へ入ってくる。二階のこの部屋から、夕日が良く見えた。海は西向きの窓に添えるように置かれたベッドの上に座って、夕日を眺めていた。空がかかったと声を出したので、そちらを見る。

空が繋がったと声を出さずに唇だけ動かしした。

「緑園ですか？ 高橋と申しますが……」

空は普段とは違い、やけに丁寧な口調で用件を告げる。何回か受け答えをした後、空は溜息と一緒に電話を切った。

「なんやって？ 緑園の人」

空と海がいた施設は緑園という名前だった。空は施設の職員としての会話を簡潔に口にした。

「明日は忙しいから、土曜だったら来ていいってさ」

「なんや、延びてもうたな。まあ、しゃあないけど」

海がっかりした様にそうもろす。空も気持ちは同じだった。何だか拍子抜けしたような気分でもある。緊張感が解けて一気に腹がすいてきた。

「あーなんか腹へった。紫藤。夕飯食つてくだろっ？ 母さんが張り切ってるんだ。可愛い男の子が来たって」

「可愛いっていうのはちょっとあれやけど、迷惑や無かったらご馳走になるのかな」

「迷惑じゃねえよ。俺言っちゃったんだよね。もしかしたら紫藤が俺の本当の兄弟かも知れないって、だから余計張り切ってるみたいなんだ。息子がもう一人増えたみたいでうれしいらしいぞ」

「……そりゃ、こんなところで、ぐうたらしてられへんな。手伝いにいつて来るわ」

海はそう言っただけで立ち上がった。それに付られ空も立ち上がる。たまには母さんの手伝いをするのも悪くないと、そう思っていた。

時間はさかのぼる。

空がまだ教室で掃除をしている頃。春名光は図書室へ向かって歩いていた。今日は委員会があり、春名はそれに出席しなければならなかったのである。副委員長である朝倉はバレエの稽古がある為、欠席することになっていた。

図書室へ行く途中。春名は体育教師の高田に声をかけられた。

「おい、春名。コレ高橋に渡しといてくれんか」

「え？ これ……生徒手帳ですか」

「ああ。更衣室に落ちていたんだ。お前同じクラスだろう。渡しといてくれ」

「はい……」

春名が生徒手帳を受け取ると、そのまま高田はその場を去っていった。春名が授業に出ないことに、何か言う様子もない。

春名は手の平サイズの生徒手帳の間に、何かが挟まっていることに気づく。足を止めて生徒手帳を開いた。

「これ……」

挟まっていたのは、四つに折られた写真だった。この間空たちが見ていた写真だ。赤ん坊が三人写った写真。

春名はしばらく、折り目のついてしまったよれよれの写真を眺めたあと、最初になっていたように四つ折りにし、生徒手帳に挟んだ。それをブレザーのポケットに入れると、春名は図書室へ向かう足を速めた。

図書室へ入ると、既に数名が席に着いていた。春名が何処へ座ろうかと辺りを見回した時、近くに人の気配を感じた。誰かが春名の肩に腕を回してくる。

「よう、春名。どうだ、何か分かったか」

耳に口を近づける様に春名に囁いてきたのは、生徒会長の坂木だった。春名は少し顔を顰めて、肩に回った坂木の腕を外させる。

「何のことですか？ 坂木先輩」

「何のことって、春名。隠さなくてもいいだろう。お前、この間の教室であつた悪戯のこと調べてるよな」

腕を外された坂木は、苦笑いを浮かべながらそんなことを言う。綺麗な顔立ちをした坂木は爽やかな雰囲気纏っており、女生徒はもちろんのこと、男子生徒や教師にも絶大な人気を誇る。成績も優秀で、スポーツも万能とくればなおさらだ。

春名は彼を学校に入学する前から知っていた。親戚筋のパーティーで顔をあわせ、何度か話したことがあるのだ。誰に対しても穏やかな対応をする坂木は、春名の従兄弟たちと仲がよかった。その従兄弟達がいくら春名を邪険に扱っても、春名に対する態度を変えることはない。そんな坂木がわざわざ事件のことを口にするとは思わなかった。

春名は眼鏡を中指で押し上げて、相手をじっと見詰めた。

「調べてませんよ。疑われてはいますけど。鍵をなくしたのは僕って事になってますから」

「疑われてるから、調べてるんだと思ったけど。あの日教室の前で何か言いかけてやめただろう。何か気づいたことがあるんじゃないのか」

「気のせいじゃないですか」

春名は気の無い声でそう言ったが、坂木は執拗に聞いてきた。その目は妙に真剣だ。

「そんなことないだろう。僕が鍵は犯人が置いていったんじゃないかって言った時、お前、でもとかなんとか、何か言いかけてただろう」

う」

春名は少し考える様にしてから、口を開いた。

「それは、おかしいと思ったから……」

「何がおかしいんだ？」

坂木が少し不思議そうに聞く。春名は続けた。

「朝倉たちが来た時、教室の鍵はかかっていたいました。密室状態の教室の真ん中に、犯人はどうやって鍵を置いたのでしょうか」

「……鍵は二つあるだろう。鍵を教室に置いて、犯人は予備の鍵で教室のドアを閉めたんじゃないか」

「そうですね。でも予備の鍵は用務員さんが持っていたはずなんです。その鍵で、最後教室の鍵を閉めたのは用務員さんですから。犯人が用務員さんから鍵を盗めたとは考えにくいんです」

「なんだ、用務員に話を聞いたのか」

「やっぱり調べてたんじゃないかといわれて、春名は肩を竦めてから話を戻した。

「……犯人は用務員さんが鍵をかけた六時半以降に来て、拾った鍵を使って教室の中に入った」

「まあ、そうだろうな」

「でも、その後どうやって密室をつくったのか……。それがあの時は解らなかつたんです。最初、先輩が拾った鍵が偽物なんじゃないかと疑いました。犯人が本物に似た鍵をプレートにつけて教室に置き、本物の鍵で教室のドアの鍵を閉めた……」

「なる程、密室が完成するな」

坂木が納得したように頷いたが、春名は首を横に振った。

「そう思って確かめてみましたが、ちゃんとあの鍵で教室のドアの鍵は閉まりました。偽物でないとしたら犯人が用意した合鍵で閉めた可能性が高いと思っただんです。でも疑問が残りました。あの鍵にどうしてペンキがついていないのか。鍵に赤いペンキが全くついていないのは、おかしいんです。ペンキが乾くのを待って、犯人が鍵を教室に置いたとは考えられません。僕が犯人なら見つかるのを

恐れてさつさとその場を後にしますね」

「それは……確かにそうだな」

「それにしても、先輩はなんでそんなこと気にするんですか」

春名の問いに、坂木は顔を顰めてこう言った。

「実はあのペンキ、うちの部で使う予定だったんだよ。それなのに全部はあだろ。腹がたつじやないか」

「あれ？ 先輩、演劇部ですか」

「いや。生物部の部長」

坂木の返事に春名は少し怪訝そうな顔をした。ペンキは確か、演劇部で使うことになっていたと聞いたのだが。考えたところで分かるわけもないので、坂木に尋ねてみる。すぐに答えが返って来た。

「動物小屋の色がはげてきたから塗りなおそうと思って、演劇部の奴らに頼んでたんだよ。一緒に買って来てくれって。まさか赤色のペンキを買って来るとは思わなかったけど」

「色指定しなかったんですか」

「ああ。適当になって頼んだからな。あーあ。春名が調べてるなら、犯人教えてもらおうと思ったんだけど。まだ謎ってわけか」

「それは……どうでしょうね」

春名がそう呟いた。

その呟きは、坂木の耳に届くことはなかった。

第五章 第二の事件

彼は賞賛の中にいた。たった今演技が終了し、彼は大きく息を弾ませながらも優雅に礼をする。

拍手が一層大きくなった。

改心の出来だったと自分でも思う。昨日の演技は二度もジャンプに失敗し、良い点は取れなかったが、今日のフリーの演技ではそれを挽回することが出来たようだ。メダル圏内は外れていたが、十位以内には入れたかもしれないと、彼は思った。

客席から投げられる花束やぬいぐるみをいくつか拾うと、彼はリンクの外へ行き、コーチと抱き合った。

コーチとは彼が小学生の頃からの付き合いだ。このオリンピックの舞台に立つ為に、幾度と無く厳しい態度を取ってきたコーチも、今は満面の笑みを浮かべている。

採点を待つ間、コーチと小声で交わした会話を今でも良く憶えている。

『ノンちゃんが家でテレビを見ているはずだ。手を振ってやってくれ』

ノンちゃんとは彼のコーチの一人娘で、離婚した妻に引き取られているはずだ。彼はコーチに言われるまま、声には出さず『ノンちゃん』と口を動かして、手を振った。

コーチは妻と別れてからも、娘とはよく会っていた。事あることに娘の話題になるのはコーチの悪い癖だ。彼が東京から北海道へ行くことになった時、コーチは大好きな娘が渋るのも聞かず、自分についてきてくれた。そのおかげで今の自分があるのだと彼は思っていた。オリンピックの最年少選手として出場した彼の順位は7位入賞となったが、コーチはこう言って励ましてくれた。まだ十五歳だ。これからいくらでもものびる。四年後は必ずメダルを持って帰ろう。そう彼に言ってくれた。

その時のコーチの笑顔を、彼は今でもはつきりと思い出せる。思い出すたびに、彼は胸が痛くなる。もう見ることの出来ない、コーチの笑顔……。

そのコーチの笑顔が遺影に変わった。いつの間にか彼は古い寺の前に立っていた。そこにはお焼香をする為の長い列が出来ている。小雨が音も立てず降り続く。

彼は急に寒気を感じて身を縮めた。先程まで寺の前に列をつくる喪服姿の人々を眺めていた。その目線が下がり、いつの間にか彼は車椅子の上にあった。彼は思った。そうだ。葬式の日。自分は車椅子でこの場所へ来たのだ。

また夢を見ているのだろうか、彼は思った。最近何故こんな夢ばかり見るのだろうか。

そんな疑問を感じながら、彼はこの次に起こることを考えていた。彼の後ろでは父が車椅子を押している。その横で母が、自分に傘をさしかけてくれていた。それでも、小雨は彼の手に当たり体温を奪っていく。悴んだ指が痛かった。

『待ってください』

寺を後にする彼らに声をかけたのは、自分と同じ年頃の少女だった。紺色の制服のスカートが、彼の前で揺れてとまった。彼は俯いていた為、彼女の顔は見えなかった。少女は彼らの前で頭を下げたようだ。

『寒い中、父の為にありがとうございました』

その言葉で、彼女が亡くなったコーチの娘だという事が分かった。コーチがノンちゃんと呼んで可愛がっていた、コーチ自慢の娘。彼女が今、自分の前にいる。何だか変な気分だった。こんな場所であれば、彼も素直に会えたことを喜べただろう。

今がコーチの葬式でさえなければ……。

コーチが生きてさえいれば……。

『私、あなたに伝えたい事があったの』

彼女は彼にそう告げた。だが彼は顔を上げなかった。上げられない

かったのだ。コーチの死に、自分が深く関わっていたから。

『お父さんが亡くなる前にこう言ったの、自分が死んでも、必ず二人の夢を実現させてくれって。お父さん……、実の娘が目の前にいるのに、あなたのことだけ言って死んじゃった……。でも、それもお父さんらしいと思って、私それだけ、どうしても伝えたかったの』

二人の夢……。もう一度オリンピックへ出場し、今度こそ金色に輝くメダルを取ろう。そう言っていたコーチの顔が頭に浮かんで消えた。

彼はすうつと息を吸い込むと少しだけ視線を上げて彼女に言った。

『約束するよ。二人の夢は必ず実現させる』

小さな声だったが、彼女はちゃんと聞き取ってくれたようだ。彼の目に映る彼女の口元が、笑みを形作った。だが彼女の頬に涙の後を見つけて、彼はまた視線を下げる。

『早くケガを治して、また、前みたいに滑って。お父さんが大好きだったあなたの演技を、また私に見せてね』

そう言っただけで彼女は去って行った。このとき彼は知らなかったのだ、自分がもう二度とスケートが出来ない体になっていたことを……

木曜日の朝は曇り空だった。天気で気分が左右されるなんてことはありえないと豪語する高橋空は、開け放った教室のドアの前で、思い切り顔を顰めた。

教室の空気が異様に重いのだ。教室にはクラスの半分以上の人数しかいなかった。だがその中で、いち早く空の存在に気づいたクラスメートの女子たちが、あからさまに顔を顰めて何か小声で囁きあっている。

感じ悪いなと空が思った時、女子の一人が教室の端の一番後ろの席で、机に突っ伏している男子生徒の元へ足早にかけていく。その男子生徒の周りには数人のクラスメートが立っており、いつもとは

違う冷やかな視線を空に浴びせた。確かあの席は久保の席だったはずだ。空はそんなことを考えながら、ただならぬ空気の教室へ入ることも出来ずに、入り口の前でつつ立っていた。

「おおい、なにやってんねん。はよ入れや」

後ろから空に声をかけてきたのは、どう考えても紫藤海に他ならない。

「紫藤」

振り向いた空の顔に、紫藤は顔を顰める。

「なんや、何かあったんか」

よほど悲壮な顔でもしていたのか、空の表情を見ただけで、何かを察してくれたらしい。だが、説明しようにも、空も何が何だが分からないのだ。

ガタン、と教室の端で音がした。見ると、机に突っ伏していたはずの久保が顔を上げてこちらを睨んでいる。どうしたというのだろう。つい昨日まで親しく話していた久保が、怒りを露に空を睨んでくるのだ。

「なんだよ、どうしたんだよ。久保。皆も」

だが空の問いに答える者は無く、久保は机を避けながら一心不乱に空の前まで来ると、空の胸倉をいきなり掴んだ。

「お、おい、久保。いきなりなにするんや」

驚きの声を上げる海には目もくれず、久保は空に怒鳴った。

「なんで、あんなことしやがったんだ。ええ？　なんであんな惨いことが出来るんだよ」

そう言って久保は胸倉を掴んだまま、空を揺さぶり机に向かって突き飛ばす。

空はその勢いのまま、机にぶつかり尻餅をつく。けたたましい音を立てて机も一緒になって転がった。女生徒の悲鳴が起こる。

空には何がどうなっているのか全く検討がつかなかった。ただ果然と、荒い息を繰り返している久保を見上げた。

「何か言うことはないのかよ」

もう一度怒鳴る久保に、空も怒鳴り返した。

「あるわけねーだろ、何が何だか分かんねえのに、何を言えっというんだよ」

急に怒りが込み上げてきた。何故学校へ来て早々、突き飛ばされなきゃならないんだ。何も悪いことなどしてないのに。こんな理不尽な事はない。

「しらばっくれやがって、お前がやったのは分かってるんだよ」

久保が苦々しげに吐き捨てた。空はそんな久保を見つめ、眉を顰める。何が起こったというのだろう。久保の話は脈絡が無くて、こっちはさっぱり分からない。

空たちの近くで啞然としていた海が、我に返った様に久保の肩に手を置いた。

「お、おい、久保。一体何があつたんや」

「何があつたかだつて？ そんなのコイツに聞けよ」

「俺は何も知らねえつつつてるだろ」

空を示す久保に、空が吠えるように言つて久保を睨む。

「なあ、そんなピリピリせんとさ、ちよつと落ち着いて話してくれや。こっちは何がなにやら分からへんねん」

力を込めて久保の肩を握りながら、海がそう久保に訴える。久保はそんな海に目を向け、苦しそうに顔を歪めた。

「こ、こいつが、トロ吉やカメ子を殺しやがつたんだ」

殺したとは穏やかではない。指をさされた空は訝しい表情を作る。海は眉間に皺をよせ、久保に聞いた。

「トロ吉とカメ子って誰のことや」

だが久保は、空を見る目に力を込めたかと思うと、未だに立ち上がっていないかった空に殴りかかろうとした。それは誰の目にも明らかで、慌てて海はそれを止めにかかる。だが他のクラスメート達は、誰一人として海に手を貸そうとはしなかった。

なんやねん、一体。海はわけがわからないまでも、何とか久保の腕を引く。だが、もちろん久保は抵抗する。久保が腕を振るい、海

もまた久保に突き飛ばされてしまった。

派手な音を立てて机にぶつかった海を見て、空の堪忍袋の緒が切れた。

「てつめー。何すんだよ」

怒鳴って立ち上がると、久保に掴みかかる。またもや女生徒から幾つかの悲鳴が漏れた。

「おい、やめろや」

慌てて起き上がって止めに入ろうとした海より早く、二人の間に割って入った人物がいた。

春名だ。ノンフレームの眼鏡をかけた顔に珍しく、不機嫌そうな表情が浮かんでいる。

「何やってるんだ。お前らは」

二人を引き剥がして、二人をきつい目で睨んだ。それだけで、空はびくりとして戦意を消失してしまう。それは久保も同様だったらしく、両の腕を下ろし、うなだれてしまった。だが久保はすぐさまキツと顔を上げ、空に指を突きつけた。

「こいつが悪いんだよ。こいつが。こいつがカメ子やトロ吉たちを殺したんだ。殺したんだよ……」

そう言った久保の目から、涙が溢れてきた。立っていられないというように、久保は膝を抱えて座り込んでしまう。

そんな久保を見下ろし、春名は呟く。

「カメ子とトロ吉って確か……」

その呟きが聞えたらしい。久保がそうだと、嗚咽の合間に口を開く。春名は先を続けた。

「学校で飼ってるウサギの名前だったな」

空はこんな時ではあるが、思わずつつこみたくなった。なんでウサギの名前がカメなんだ。

「ウサギが殺されたのか？」

もう、久保は話せないと見てとったのだろう。春名は成り行きを教室の隅で眺めていたクラスメートに声をかける。クラスメートの

一人、久保と仲がいい三宅が頷いて口を開く。

「そうなんだ。オレも久保に教えてもらったんだけど、久保が朝ウサギの餌をやり、飼育小屋へ行ったら、ウサギが無残に殺されていたらしいんだ。この間の教室みたいに、ウサギ小屋が殺されたウサギの血で赤黒く染まっていたらしい」

空はその情景を思い浮かべて、背筋を寒くさせる。だが、それと自分と何の関係があるのか。

「ちょっと待て、何でそれが俺のせいになってるんだよ。ウサギ小屋なんて行ってないぞ、俺」

空はそう怒鳴っていた。クラス中の視線が空に集まる。辺りは騒然となった。ふと気づくと教室の入り口付近にも野次馬がいる。

「でも、久保が見つけたんだよ。ウサギ小屋の中にお前の生徒手帳が落ちていたのを」

三宅の声に空は戸口向けていた視線を逸らし、三宅に顔を向ける。
「生徒手帳なあ？ 生徒手帳ならずとポケットに……あれ」

空は生徒手帳を探すべくポケットに手をつ突っ込んだが、目的の物は何処にも無い。

「うそ、無い。何で……」

空の慌てた声に、久保が泣きはらした目を向ける。

「お前が落としたんだよ。カメ子たちを殺した時にな」

「だから俺じゃねーって言うてるだろう」

「お前が言ってたんじゃないか。小動物が嫌いだって、だからって殺さなくても」

「違う、嫌いじゃなくて、苦手だって言ったんだよ。それにいくら嫌いだからって、なんで俺がウサギを殺さなきゃならないんだよ」
「だからそれは小動物が嫌いだから」

「だから嫌いって言ったんじゃないかって、苦手って言ったんだよ」
会話がループしている。そのことに気づいた空は、久保に反論した後黙り込んだ。

いつの間にかなくなっていた生徒手帳のせいで、厄介なことに巻

き込まれてしまった。そもそもいつ生徒手帳がなくなったのだろう。まさか生徒手帳が歩いてウサギ小屋に行ったわけでもあるまいし。

「生徒手帳なら僕が持ってた」

空と久保を交互に見ながら、そう言ったのは春名だった。空と久保、そしてことの成り行きを見ていたクラスメートや野次馬達が、いつせいに春名に注目する。

「何だつて？」

「だから、高橋の生徒手帳だったら昨日の放課後まで僕が持ってたんだよ」

「な、何でだよ」

生徒手帳を落とした憶えがない空には思ってもいない言葉だった。皆が注目する中、春名は堂々と言葉を続ける。

「委員会に行く途中で、高田先生に会って渡されたんだよ。高橋は更衣室に生徒手帳を落としていたんだ」

「ええ？ 俺全然気づいてなかった」

「お前慌てとつたもんなあ。あん時」

海がそう茶化すように言う。空は頭を掻いた。確かにあの時は大きすぎる体操服を早く脱ぎたくて、急いでいたけど。まさか生徒手帳を落としていたなんて。しかもそれに気づかなかったなんて、自分の注意力散漫さに腹が立つ。気づいていれば、こんな言いがかりを受けずにすんだはずだ。しかも生徒手帳には、大切にしていた写真が挟んであったのに。

「だったら、何で春名が持っているはずの生徒手帳が、ウサギ小屋にあつたんだ」

春名の言葉に驚いて、すっかり涙の止まった久保がそう言った。

「それは分からない。委員会が終わって気がついたら、生徒手帳が無くなっていたんだ」

「無くなつてた？ 本当はお前が殺したんじゃないのか」

凄む久保に春名は恐れた様子もなく告げた。

「いや、僕はやってないよ。どういう経緯で高橋の生徒手帳がウサ

ギ小屋にあつたのかは分からないけど、犯人は高橋ではないと思う」
淡々と告げる春名に、久保はまたもや涙の浮かび上がった目を眇めた。

「じゃあ、一体犯人は誰なんだよ。カメ子、トロ吉……」
久保の悲しみにくれる声が教室に響いた。

その時校内放送が流れ、久保の鳴き声を一時消した。

『一年二組高橋。一年二組の高橋。至急校長室へ来なさい』

学年主任の声だ。空はつい縋るように近くにいた春名に目を向ける。春名はその視線を受けたからかは分からないが、空にこう言った。

「僕も一緒に行くよ。どうせ、ウサギ殺しのことを聞かれるんだろう。きつと先生達も高橋がやったんだって思ってる」

「俺はやつてない」

思わず怒鳴った空に、春名は表情一つ動かさずに頷く。

「ああ、分かつてる。弁明する為にも、僕の証言が必要だろう」

春名の言葉に、空もようやく納得する。春名は空を助けようとしてくれているのだ。先ほども、クラスの皆に宣言するようにあんなこと言う必要はなかったのだ。黙っていれば、空の生徒手帳を春名が持っていたことなんて誰にも知られずにすんだ。自分が不利になるのを承知で、春名は皆に聞えるように言ったのだろう。

「ありがとう、春名」

教室を出て少ししたところで、空はそう口を開いた。少し後ろを歩いていた春名にも声は届いたのだろう。後ろから声が聞こえた。

「別に。僕が高橋の生徒手帳を持っていたのは、高田先生が知っているし遅かれ早かれ、僕にも疑惑は向くよ。その前の教室の事件も僕は疑われているみたいだし」

「え？ そうなのか。なんで」

驚いて空は春名と並んで歩くべく、足を止めて春名が追いつくのを待つ。

「僕が力ギをなくしたと言ったから」

「それで何で春名が犯人になるんだよ」

「鍵をなくしたのは嘘で、鍵を持っていた僕が、夜に教室に忍び込んでペンキをぶちまけた」

「何で春名がそんなことしなきゃなんないんだよ」

「……鬱憤晴らし？」

「何？ お前なんか鬱憤たまってるの」

少し背の高い春名の顔を覗きこむようにすると、春名は顔を顰める。

「別に、先生達がそう思ってるだけだよ」

「なんで先生がそう思うんだ」

「うるさい」

春名がそう凄んだので、空は黙った。朝礼が始まることを告げる本礼が校舎に響く。おかげで、廊下や階段に人はいない。一階まで下り、職員室の奥にある校長室の前に着いた。

「行くぞ」

春名がドアをノックすると、ドアの向こうから入出を許可する短い返事が聞えた。

「じゃ、話してもらって校長室であつた事」

放課後。空と春名は掃除も終わり、人気の無くなった教室いた。

海が二人に、校長室での話を聞きたいとせがみ、一人のけものなんて寂しいわと駄々をこねたのだ。海は一度言い出すと聞かず、空も春名も仕方なく海に校長室でのことを話し始めた。

校長室では担任の黒田と学年主任が壁際に控えており、重厚なデスクの前には校長が一人静かに座っていた。

担任の黒田は、春名まで一緒にいたことに驚きすぐに教室へ帰るように言ったが、春名はそれを拒否した。春名は空が呼ばれた理由

に、自分が関係していると主張した。

空はそれをはらはらと見ていたが、春名は動じた風も無く、退出する気配も見せない。校長は諦めて話しを進めることにしたらしい。空に生徒手帳を見せ、君のだねと確かめた。

手渡された生徒手帳は所々に赤黒いしみがついている。これはもしかしたら殺されたウサギの血かもしれない。そう思うと空は生徒手帳を放り出したくなった。だが生徒手帳に挟んでいた写真のことが気がかりで、空はそつと生徒手帳を開く。生徒手帳の見開きのページは学生証になっており、そこには確かに空の顔写真がついていたが、挟んでいた写真はなかった。

空が確かに自分の物だと答える。黒田が何か言いたそうな顔になったが、春名がそれを制するように教室で話したことを教師達に告げた。すぐに体育教師の高田が呼ばれ、春名の言葉を裏付けた。

空はあらかじめ話終わると、急に眉を寄せ声をあげた。

「でも、校長たち春名のことを疑わしいみたいに言い出すんだぜ。俺頭来て怒鳴っちゃったよ」

空はその時の事を思い出して、机をドンつと拳で叩いた。

「なんて怒鳴ったんや」

海が好奇心にかられた目を空に向ける。

「春名が犯人な訳ねえだろ。頭固いな。犯人だったらわざわざ自分が不利になる発言するわけねえだろって」

「ふむふむ。さすが高橋。男らしいやん」

「何が男らしいだ。校長達の印象を悪くするような発言して」

褒めるようなことを言った海に、春名が眼鏡の奥から鋭い目を向ける。空はそんな春名に反発する。

「何だよ、悪いかよ。頭にきたんだからしょうがないだろ」

その言葉に春名は苦笑を漏らした。

「見た目と違って本当に短気だな。高橋は」

春名が表情を崩すのは珍しい。空は一瞬返答に詰まったが、春名

の言葉に引つかかりを覚える。

「お、おう。……って見た目と違ってってどういう意味だよ」

「そら、言葉のまんまとちゃうか。おまえぱつと見、なんやぬいぐるみたいに可愛い印象やもん」

ぬいぐるみときたか。空は大いにむくれた。自分の容姿が可愛いと人に思われるのは知っている。背も低いし、男にしては大きな目をしているし。少し前まではよく少女に間違われた。だからといって空はその事実を容認しているわけではない。カッコいい男になりたいと日々思っている。そのため空は、人に可愛いと言われるのが頗る嫌なのだ。

「誰がぬいぐるみだ。人をオモチャにしやがって。俺は可愛いって言われるのが一番嫌いだ」

「そんなん知ってるわ」

海はそうあっさりと言った。空はだったら言うなと唇を尖らせる。そんな様子も人からみたら可愛く見えるのだということに、空は気づいていなかった。

「はいはい、話しが違う方向へ向かってるやん。あかで空。話し逸らしたら」

そう言って、海はにやりと笑う。その笑顔の意味が分からず空は内心首を傾げたが、春名は海的笑顔の意味が分かったようだ。

少し引きつったような声で、春名は海に向かって言った。

「……今の、洒落のつもりか？」

「へ？ 何のことだよ」

空が春名の言葉に、声をあげる。だが、海は大きく頷いた。

「おう。思いつきりシャレやん。なんや高橋分からへんかったんか」
「だから、いつシャレなんて言ったんだよ」

短気な空が少し怒鳴るように言つと、海は情けないと言つように首を横に振る。

「だからやな。もう一回いうで、あかで空、話し逸らしたら。ここ、分る？ 名前の空と逸らしたらの逸らとをかけたんや」

ふふふ、と笑う海に空は声をあげた。

「わっかんねーよ。そんなの」

「低レベル」

空の反論の後すぐに、春名がそうコメントを出した。海は二人の言葉に、がつくりとうなだれてしまう。

「ガーン。低レベルって言われてもうた。あかん。関西人がこんなことでは、あかんわ」

海はあかんあかと繰り返し返している。空と春名は顔を見合わせた。

「どうしよう。紫藤が壊れた」

「いつものことだろう」

春名が容赦ない言葉を吐くと、すかさず海がつっこみを入れる。

「何でやねん。俺はいつも壊れてへんわ」

「まあまあ、本当に話しがずれてるから」

「そやな。で、どうするんや？　これから」

あつさりと空の言葉に同意した海が、春名に話を向ける。

「そうだな……どうしようかな」

顎に手を当てて考えるように目を伏せた春名の横で、空が声を上げた。

「調べようぜ、俺たちで。絶対犯人捕まえよう」

「どうやって」

意気揚々と言い切った空に対し、春名の反応は冷たい。だが空は気にした様子も無く、不敵な笑顔を作った。そして春名の肩に手を置く。

「それを考えるのはお前の仕事。お前頭良いんだから、簡単だろう。よっしゃ。やるぞ」

そう言った空の目は燃えている。これは本気で事件を調べる気だ。春名と海は顔を見合わせて、溜息を吐いた。

ウサギの小屋に空の生徒手帳が落ちていたのは、明らかに事実だ。何者かが空に罪を着せようとしたということだろう。そして、その手帳を持っていた春名も疑われている。この状況では空の言うとお

り、自分達で疑いを晴らす以外、道はないのかもしれない。た。

第六章 うさぎと空

翌日。クラスメートの白い目を意識しながらも、空は淡々と四時間目の授業まで終えた。

昼休みに入り、にぎやかな食事タイムが始まる。仲の良い友人同士で、机をあわせて弁当を食べ始めた女子たちを尻目に、空は溜息を吐いた。いつも一緒に食事をしていた久保達とは今朝から一言も口を聞いていなかった。久保達は今も空を見ないように連れ立って教室を出て行った。

「高橋。今日弁当か？」

空が鞆から弁当を取り出したとき、海が声をかけてくれた。

「あれ？ 紫藤は行かなかったのか。久保たちと」

隣に立った海を見上げて聞くと、海は首を縦に振る。

「ああ、まあな。それより今日俺弁当ないねん。パン買いに行くからついて来てや」

お願いと付け加えられて、空はしょうがないなと弁当を持って立ち上がる。だが内心少しほっとしていた。一人で弁当を食べるのは寂しすぎる。ただでさえ友人達に無視されて、気分がへこんでいるのだ。空は先を歩く海の後ろについて歩き始めた。だが教室を出る時にふと気になって足を止めた。教卓の前にまだ春名がいたのだ。

空はドアの縁に手をかけて、身乗り出すように春名に声をかけた。

「春名。一緒に飯食おうぜ」

つい一人でいる春名を見ていられなくて声をかけたのだ。だが、どうせ春名は断るだろうと、空は思った。いつも空が春名を気にかけると、春名は余計なお世話だというような態度を取る。しかし予想に反して、春名は頷くと空の方へやってきた。

「あれ、一緒に来るの？」

つい驚いてそう聞いてしまった空に、春名は眉を寄せる。

「お前が誘ったんだろう」

「ああ、でも、いつもだったら断るじゃないか」

「まあな」

そこまで言って春名は声を落とした。

「調べるって言ってただろう。ウサギ殺し」

そこで、空は納得した。春名はその話をしたかったのかと。

「高橋、春名。早よ来いや。俺パン買いにいかねえ。早よ行かな売り切れてまうやん」

教室のドアの横で立ち止まって話をしていた空たちに、廊下で待っていた海が痺れを切らしたように声をかけた。

空たちは今にも走り出しそうな勢いの海に追いつくべく歩き出した。

今日は本当に暖かい。青空に輝く太陽がとてもまぶしい。緩やかに吹く風には少しまだ冷たさが残っているが、日が経つにつれこの風も熱を持っていくのだろう。

教室を出た空たち三人は、購買部に寄ってパンを買った後、裏庭に出ていた。

春名が人目に付きにくい場所が良いと言ったためだ。校舎の壁に背をつけるようにして三人並んで座り、裏庭に設けられた花壇を見ながら食事をする。花壇にはオレンジ色の花がたくさん咲いている。この花の名前を空は知っていた。マリーゴールドだ。小学生の時、この花をペン代わりにして絵を描く授業があったなと思い出していた。

「まず、何から調べるんや？」

紙パックのジュースを飲んだ後に、口を開いたのは海だった。言った後、海は三つめのパンを袋から取り出し、口をつける。空はからになった弁当箱を包みながら、言った。

「順番にいったら教室の事件からだよな」

当たり前のことを言っただけだったが、空の言葉を聞いた春名

が驚いた様に口を開く。

「教室の事件まで調べるつもりか」

「え？ 何でだよ。あたりまえじゃん」

「でも、あれは疑われてへんやん」

口を出した海に空は首を振る。

「春名が疑われてる」

春名を見て言うと、春名は眼鏡の奥の目を見張る。海は始めて聞いたというように、驚きの声を上げた。

「ええ、そうなん？ 俺聞いてへんかった」

「俺も、コイツから聞いたんだけど。先生達の態度から言ってもそんな感じだった」

空は親指を春名に向けて言いながら、昨日校長室にいた教師達の態度を、思い出していた。特に担任の黒田はあからさまに空や春名を犯人扱いしていた。

「へえ、だったらそっちも調べなあかな」

納得した様に頷いた海に、空も頷く。だが、春名は慌てたように声を上げた。

「何でだよ。別にいいよ、そっちは」

「よくない！ あれのせいで俺、体操服ダメにされたんだぜ。おかげであんなみっともない格好で体育しなきゃならないんだからな。」

犯人見つけて、とっちめてやらなきゃ」

拳を握り締めて力説した空に、海が脱力した声を出す。

「……春名のためやなくて、そっちかいな」

その言葉を聞いた空はきょとんとして、海と苦笑している春名を交互に見る。

「違う、両方だよ。一石二鳥だろ」

「……一石二鳥ね。でもまず優先させるべきは、ウサギの方だろう」
春名が言うと、空が何でと首を傾げる。

「教室の事件で僕を疑っているのは教師達だけだ。でも証拠がないけど、ウサギの事件ではお前の生徒手帳っていう立派な証拠がある。」

まあ、僕の証言のせいで、うやむやになっているけどな。それが無かったら確実にお前は無実の罪を着せられてた」

空はその言葉を聞いて顔を引きつらせる。

「まあ、確かに今から調べるんやったら、ウサギ小屋の方から調べる方が楽かもな。昨日のことやし、証拠になるもんがまだ残ってるかもしれへん」

海の言葉に、空は手について立ち上がる。掌を叩いて手についた砂を払うと、春名と海を振りかえった。

「よし。飯も食い終わつたし、聞き込み調査に行こうぜ」

空の言葉に不敵に笑った海は、ゴミの入った袋を手のひらで丸めると、空を見上げた。

「よっしゃ、それやったら久保には俺が聞くわ。お前と春名は飯田にでも頼んでウサギ小屋に入れてもらえや」

「ええ？ 俺ウサギ小屋はちよつと……」

さっきまで威勢の良かった空の声が急に小さくなる。

「ウサギが殺された小屋が怖いのか」

からかう口調の春名を、空は睨んで否定した。

「誰が怖いっていうんだよ。失礼な奴だな。別に怖いわけじゃないよ」

「じゃあ、決まりだな」

あっさりそう言われて、空は二の句が告げなかった。

「ところで、なんで飯田なんだ？」

隣をゆっくりと歩く春名に、空は歩調を合わせながら聞いた。空たちは今、教室へ向かっていた。海に言われて、飯田を探しているのだ。別行動の海は久保たちがいるはずの、食堂へ向かっていた。

「飯田も生物部だろう。確か……」

「そうなのか？ 紫藤の奴なんでそんなこと知ってたんだろっ」

「さあな」

四階に上がって、教室へ向かうために角を曲がった時、ちょうど

教室を出てくる飯田と目があつた。朝倉も一緒だ。

「あ、春名君」

この間春名にされた仕打ちを覚えていないのか、朝倉の春名を呼ぶ声は甘い。語尾にハートマークでもついていそうだ。

「私達これから、ウサギ小屋見に行くんだけど、一緒にいかない」

朝倉は春名に駆け寄つてくると、笑顔で春名を見上げて言った。

空は思わず、春名を見る。こちらから頼む必要が無くなった。朝倉の横に來た飯田は、顔をしかめて、朝倉の袖を引く。

「ちよつと、有紀ちゃん」

「いいでしょ、リンコちゃん。春名君誘つても。春名君なら何か分かるかもしれないし」

朝倉が、飯田を振り返る。飯田は硬い表情のまま、春名に目を向ける。春名はにこりともせず、飯田を見返した。そんな春名と飯田をなんとなく不審に思いながら、空は飯田に言った。

「なあ、飯田。俺も見てみたいんだけど。ダメかな。俺が疑われている飯田も知っているだろう。無実を証明する為にも見てみたいんだ、頼むよ」

そう言つて空は飯田の前で手を合わせる。飯田は掴んでいた朝倉の袖を離すと、溜息を吐いて頷いた。

「いいわ。行きましょう」

先ほど上つてきた階段をまた下り、四人は靴を履き替えウサギ小屋に向かう。昼休憩は残り二十分を切つていた。校門の脇を通り過ぎ、新校舎とテニスコートの間にある道を進む。

しばらくして飼育小屋を囲っている背の低いフェンスが見えた。

フェンスの扉には鍵がかかっていたが、鍵は飯田が持っていた。

「生物部は皆持つてるの？ 鍵」

空が聞くと飯田は鍵をあけながら首を横に振つた。普段から大人しい飯田だが、やはりウサギが殺されたことがショックだったのだろう。顔色が悪く、いつも会話の端々に見せる柔らかな笑顔が今は無い。

「鍵は三つあって、部長と、週番の人が持つことになっているの」
「週番？」

「ええ、ウサギと鶏の係りとヤギの係りで分かれているの。私はヤギの係りだからウサギ小屋の鍵は持っていないの」

「じゃあ、中は見られない？」

空の問いに飯田はまた首を振る。肩に垂らした髪が揺れた。

「小屋の中は外からでも十分見えるわ。それに今鍵は壊れているから、中に入りたいなら入る事も出来る」

そう言った飯田を先頭に、飼育小屋のスペースへと入っていく。そのスペースには長年風雨に耐えてきたせいか、変色した飼育小屋があり、その小屋の前は結構な広さの空き地になっている。たまに動物達を小屋から出し、ここで運動させるのだという。小屋の周りがフェンスで囲まれているのはそのためらしい。

空は一通り辺りを眺めたあと、小屋に目を向けた。小屋の中はコンクリートの壁で三つに仕切られている。正面にはコンクリートの壁はなく、フェンスで仕切られていた。飯田の言った通り、中に入るまでも無く、外から中の様子が良く見える。

小屋の一番右端にヤギが一匹入っており、その隣には鶏が数羽動き回っている。そして一番左端が、ウサギ小屋だったのだろ。中にウサギはいなかったが、小屋の床が赤黒く染まっている。春名と朝倉はその小屋の前まで近づいていった。それを空と飯田は後ろで見守る。

「ひどいな」

春名が呟くように言った声が聞こえた。朝倉が頷いた。

「六匹いたウサギが全滅だなんて……とっても可愛かったのよ。ウサギ」

涙ぐむような声が朝倉の口から漏れた。しばらく無言だった。誰も何も言わない。学校中にウサギ小屋の事件は知れているはずなのに、周りには野次馬はいない。皆余り関心が無いのだろうか。それとも休憩時間が残り少ないからなのか。そんなことを空が考えてい

た時だった。春名が振り返り、飯田に聞いた。

「飯田、君は見たのか？ ウサギが殺されているところ」

飯田は頷いて、春名たちの方へ歩み寄る。空はそれを見送った。

「見たわ。週番だったから。昨日の朝、久保君と一緒にここに来て見つけたのよ。ウサギの死体」

飯田はウサギ小屋を仕切るフェンスに手をかけ、握り締める。そんな飯田を悲しげに朝倉が見る。

「リンコちゃん……」

「高橋の生徒手帳はどこに落ちていた？」

春名の声に飯田はフェンスから手を離し、指で小屋の真ん中辺りを指し示した。

「あの辺り。見つけたときはビックリしたわ。高橋君の生徒手帳が、こんなところにあるなんてって」

そう言って飯田は空を振り返る。つられて朝倉と春名も振り返った。

「高橋、お前もこっち来いよ。見ないと何のために来たのか分からないだろう」

空は顔を顰めた。だが、少しでも中を確認した方がいいだろうと判断し、足を小屋の方へ向ける。本当はこんな所、近づきたくないのだが。

空はゆっくりと小屋に近づき、朝倉と春名の間に立った。

その瞬間。

「ハ、ハックション。ハ、ハ、ハックション」

空は大きなクシャミを立て続けに繰り返し始めた。コレでは見るどころではない。

「だ、ダメだ……、ハックシュ。やっぱ、無理」

「……高橋。お前、もしかして動物アレルギーなのか」

空は二三度首を縦に振りながら、クシャミを繰り返す。

春名は呆れたように溜息を吐くと、空の腕を掴んで歩き出した。

空はその動きにあわせて後ろ向きに歩くことになる。何度か転びそ

うになりながら、空は春名に連れられ、小屋を囲うフェンスの入り口をくぐった。そこからしばらく歩いてようやく立ち止まる。

「お、おい。ちょっと何で……っクシュ」

「アレルギーがあるなら先にそう言っとけ」

春名に睨まれて、空はうなだれる。

「……悪い」

「でも、コレで分かったな、久保。コイツが犯人じゃないって」

春名は空ではなく、その背後にそう呼びかけた。驚いて振り返った先に、海と、海に腕を掴まれやってきたらしい久保がいた。久保は空を見つめたまま何も言わない。

「あんな状態じゃ、ウサギを殺すなんて無理だ。見てたんだろう。」

久保。コイツがクシャミを繰り返しているところ」

春名にそう言われ、久保は俯けていた顔をあげた。今日一度も合わなかった目を合わせて、久保は空に言う。

「……そうだな。あんな状態じゃ、無理だ」

「ホンマにな。ここまで聞えてたで、高橋の大きなクシャミ」

「アレルギーなんだ、しょうがないだろ」

「でも、コレで分かったわ。高橋が小動物苦手って言うた意味」

空は海の言葉に頷いた。やっとクシャミも収まってきた。

「見る分にはいいんだけど、半径一メートル以内に来るとクシャミが止まらなくてさ。触ったら蕁麻疹も出る。あーなんか痒くなってきた」

そう言って、空は制服の上から腕を搔く。

「……だったら、始からそう言えばよかったんじゃない？ そうすれば高橋、犯人から除外されてたでしょ」

もっともな言葉は、飯田と共に歩いてきた朝倉から発せられたものだ。

空はその言葉に、一瞬動きを止めた。そう言われれば、そうかもしれない。全く考え付かなかったが。

「ほんまやな」

海が同意の言葉を示した時、久保は海につかまれていた腕を振って、海から逃れると、地面に膝をつく。そして土下座の格好をした。「悪かった高橋。疑ったりして。この通り」

それに慌てたのは空だ。空は久保に走り寄ると片膝をつき、久保の肩に手を添えた。

「やめろよ。あんな所に生徒手帳が落ちてたら、誰だって俺が犯人だと思うよ。お前は悪くないって。な、だから顔上げろよ」

久保はゆっくりと顔を上げる。空が笑顔を向けると、久保も弱々しい笑顔を作る。

すると、隣で手を叩く音が聞えてきた。見上げると、海がなぜか拍手していた。

「おお。友情復活やな」

その言葉に苦笑して、空は久保に手を貸しながら立ち上がる。コレで万事解決とは行かなくても、少なくとも自分の疑いは晴れた。幾分ほっとした空だが、立ち上がった久保が放った言葉に愕然とした。

「高橋が犯人じゃないとしたら、一番怪しいのは高橋の生徒手帳を持っていた春名だな」

久保が睨む先にある春名の顔は、至って冷静だ。春名の頷きにあわせて、眼鏡が太陽の光を反射して光る。

「そうだな。そう言うことになるな」

まるで人事の様に春名はそう口にする。久保の言葉に真つ先に反論したのは、朝倉だった。

「ちよつと久保。変なこと言わないでよ。春名君が、そんなことするわけ無いでしょ」

だが、そんな朝倉に久保は冷笑を返した。

「でも、考えても見ろよ。コイツ、体育の授業サボってても教師に何も言われないんだぜ。教室の事件だって疑われているのに、学校側はなにも春名に処分を下してない。今回の事件だって、トロ吉やカメ子が殺されたっていうのに、先生達は犯人を捜そうともしない。

警察にも通報しなかったんだ。俺達がどれだけ言ってもな！先生達はお前に気を使って、何もしないんじゃないのか。おまえはいつも特別扱いされてるからな」

久保の言葉に、誰も何も言わなかった。

ただ無言で全員の目が春名に向いた。

第七章 動き出した犯人

その日も雨が降っていた。

コーチの葬式から早くも数日が経過していた。事故後、ようやく自力で起き上がれるようになった彼は、半身を枕に預け、窓の外を見ていた。風に煽られた雨が窓にあたる。窓に張り付いていた雨粒をまきこみながら、つたいおちていく。

無言で窓を見ていた彼の耳に、ノックの音が届いた。

彼は窓から目を離し、ドアを見る。返事を待たずに、ドアが開いた。開いたドアから病室へ入ってきたのは、彼の主治医の女医と両親だった。

『あら、起きていたの』

母親が笑顔で聞いた。だがその表情はどこか硬い。無理に笑顔を作っているのが、彼にはよく分かった。

女医が彼のベッドの脇で、足を止めた。彼を見下ろし、口を開く。
『今からあなたにお話があるのよ。聞いてくれるかしら』

女医の声は柔らかく病室に響いた。両親は彼に近づくのを恐れるかのように、ベッドから離れた場所で、彼と女医を見つめていた。彼はこの時、何となく女医が何を言おうとしているのか、分かっていた。

……そう。分かっていたのだ。

彼は頷きもせず、女医を見上げた。女医の顔が少しぼやけて見えるのは、事故の後遺症で視力が落ちたせいだ。

『あなたの足のことなんだけど』

女医はそういいながら、彼の足に視線を送る。彼も自分の足を見た。骨が折れた足はギブスで固められている。

『……治らないんですか』

彼が小さな声で聞いた。女医ははじかれたように彼を見て、首を横に振った。

『いいえ、治るわ。日常生活に支障が出ない程度には』

それを聞いて彼は目を伏せた。女医の言葉は、彼にとって死の宣告と同等の意味を持っていた。それでも彼は少しの希望を胸に、この言葉を口にした。

『じゃあ、スケートは？』

彼はしっかりと顔をあげ、女医の顔を見た。相変わらずばやけて見える顔が、悲しそうに歪んだのが分かった。しばらく女医は赤く塗った唇を開いたり閉じたりしていたが、意を決したように声を出した。

『あなたには、もう……』

女医の言葉は、彼の母親の悲痛な叫びによって遮られた。

『やめて。お願い、もうやめて。これ以上この子を苦しめないで』

彼は絶望を胸に母を見た。

泣き崩れた母を父が支える。

彼は無意識に胸を手で押さえた。母の言葉が物語っていた。彼にはもう、スケートをする事が出来ないのだと……。

『……この子には、スケートしかないのに』

鳴き声の中、そう呟くように漏れた、母の言葉。

ああ、ダメだ。

自分はもう何の価値も無い子どもになり下がってしまった。

両親は失望したのだ。

自分は両親の自慢の息子で、居続けなければならなかったのに……

不意に胸が苦しくなった。呼吸が激しくなり、彼は目を開けた。

最近いつも繰り返し、あの時の夢を見る。そして決まって発作を起こすのだ。

子どもの頃治ったはずの喘息は、事故後再発した。

彼はげえげえと胸を上下させ、ベッドの傍らに置いてある棚に手

を伸ばした。小さな棚の上に置いてあった目覚まし時計に手が当た
る。音を立てて目覚まし時計が床に転がった。

彼は目覚まし時計の置いてあった、棚の引き出しを開け、手で中
を探る。

携帯用吸入器を手にし、荒い息がひっきりなしに出る口元に当て
た。音を立てて、吸入薬を吸い込む。

暗い室内に、しばらく吸入器の音が響いた。

朝が来た。

カーテン越しに明るい光が入ってくる。彼はベッドから起き上が
り、二階にある自室を出た。夜明け前におきた発作は随分前におさ
まっていた。最近夜明け前に必ずと言っていいほど発作がおき、彼
は寝不足の日々を送っていた。

彼は部屋を出て、階段の横を通り過ぎ、一つ目のドアを開けた。
そこは脱衣所で、鏡がついた洗面台がある。そこに彼の歯ブラシが
置いてあった。彼は歯を磨き終わると顔を洗う。彼の疲れたような
顔が、鏡に映っていた。その顔が少しぼやけて見えるのは、彼が眼
鏡をかけていないからだ。

部屋に戻り、制服に着替えると階下へ下りた。眼鏡をかけていな
いため視界はぼやけているが、慣れた家ではさほど不自由さを感じ
ない。階段をゆっくりと下りきると、ダイニングルームに入った。
広いダイニングの真ん中には白い大きなテーブルが置かれている。
庭に通じる大きなガラスドアから、朝の光がさんと室内に入っ
ていた。彼はドアを閉めた後、一度驚いた様子を覗いた。

「母さん。いたの……」

ダイニングテーブルの前に座ってコーヒーを飲んでいた女性が、
その声に顔を上げる。カップをテーブルの上に置いた。

彼女の前の席には、トーストの乗った皿と、サラダ。そしてオレ
ンジジュースの入ったコップが置いてある。それら全てにラップが
かけられていた。

「おはよう、光。いたのとはご挨拶ね」

母はいつも彼が起きる前に、仕事へ行っている。その母がいたことに驚いて出た言葉を、母親は聞きとがめたらしい。

「ごめん母さん。ビックリしたんだよ。どうしたの。仕事は休み？」

「そう、やっとひと段落したから二連休貰えることになったの。あら、光。あなた顔色悪いわね。また発作が起きたんじゃないの？」

近づいてきた息子を見て、母が顔を顰めた。色白の顔に無理やり笑顔を作り、春名光は言った。

「大丈夫だよ」

「大丈夫って顔じゃないわ。今日は学校お休みした方がいいんじゃない。病院へ行きましょう」

眉を寄せてそう言った母の前の席に着くと、光は首を横に振った。「だから、大丈夫だって。病院には放課後行くから」

「ああ、今日は検診の日だったわね。今日は第三土曜日だから……学校は昼までね」

母親の言葉に光は頷いた。光の通う清秀高校は私立校で、各週休二日制をとっている。公立の高校へ行けば休みだった土曜日も、毎週第一、第三土曜日は授業があった。

「それ、早く食べてしまいなさい。お母さん車で送ってあげるわ」

母親はそう言って席を立った。服を着替えにいくのだろうか、それとも化粧をしていくのだろうか。そんなことを考えながら、光はコップに被されたラップを取って、オレンジジュースに口をつけた。本当は食欲などない。

しかし、母親がいる。

朝食は残せないかと、光は思った。

良く晴れた空には、雲ひとつない。高橋空は紫藤海と並んで歩きながら、学校へ向かっていた。あと少しで校門の前に着くという所

で、空たちを追い越した車が校門の脇に止まった。

車のドアが開き、春名が下りてくる。運転席の人間と何か話した後、ドアを閉めて走り去る車を見送った。

校門へ歩みを進めようとした春名は、こちらに気づいたようだ。

空は春名によつと手を上げて見せた。

「重役出勤やん。春名」

「まあな」

海がいうと、春名は眼鏡を中指で押し上げてから頷いた。三人は並んで校門を通り抜ける。

「今の車、運転してたのつてもしかして、お抱え運転手とか？」

空が興味を覚えてそう聞いたのは、春名にまつわる噂の一つを思い出したからだ。春名は物凄い金持ちの家のボンボンらしい、という噂だ。

だが、空の予想を裏切る返事が春名からなされた。

「まさか、母親だよ」

「なんだ、運転手いないのか」

小声でそう言うのと、春名が返事を返した。

「いるぞ、運転手。父親のだけど」

当たり前のことのようにそう言われ、空は海と顔を見合わせた。

「やっぱ、コイツんち金持ちや」

「ああ、金持ちだな」

先程よりも小声で言ったので、春名には聞えなかったらしい。

教室に入った瞬間、教室中が静まり返った。また何かあったのかと、空は訝った。その時、無言で海に袖を引かれ、空は海を見る。

海は黒板の方を指で示した。

「なんじゃこりゃー」

黒板を見た瞬間、空はそう叫んでいた。耳を劈くような叫び声に、教室中の視線が空に集中した。だが、空はそんな視線に気づかず、黒板を凝視した。

『死ね』

『もう学校にくな』

『地獄へ落ちろ』

そんな悪口雑言が、黒板全体を埋め尽くすほどに書き込まれている。そして、その言葉に囲まれるように、一人の人物の名が黒板の中央に書かれていた。

春名光と。

「誰だよ！ こんなことした奴は」

空がもう一度そう怒鳴った。だが、誰も名乗り出る者はいない。

空は、無意識に舌打ちして、クラスメート達を睨みつけると黒板消しを手にし、黒板に書かれた文字を消し始めた。海も一緒になって黒板に書かれた文字を消す。しばらく無言で手を動かしていた空は、不意に手を止めた。

「何だ？」

空は首を傾げた。空が気になったのは、黒板に書かれた悪口の中の一つだ。

『人殺し』

変な悪口だな。ウサギ殺しを疑っているからって普通人殺しなんて書くか？ その文字は一番春名の名前に近い位置に、春名の名前とほぼ同じ大きさで書かれていた。

「人殺しか……」

不意に後ろから声が聞こえ、驚いて空は振り向いた。

「びっ、びっくりした。急に背後に立つなよ、春名」

「……」

春名は空の声が耳に入っていないかのように、黒板に見入っている。春名が見ているのは人殺しと書かれた部分だ。空はその部分を黒板消しで素早く消すと、春名を見て言った。

「気にすんなよ。春名」

「……ああ。大丈夫。こういうの慣れてるから」

空は春名の答えに、内心首を傾げた。慣れてるってどういう意味だろう。

そう思つて、質問をしようとしたが、担任教師が鳴り始めたチャイムと共に教室に入ってきた為に、聞くことは出来なかった。黒板の文字は、ちょうど消し終わつた所だつた。

四時間目は体育の授業だ。空は今日こそ、春名を体育の授業に出させようと決意して春名の席に目をやつた。春名は立ち上がつて、教室のドアに向かつて歩こうとしていた。その後ろから、クラスメートの男子が四、五人近づいていく。何をするつもりかと見ていると、男子の一人が春名の肩に思い切りぶつかった。誰がどう見てもわざとだ。春名は踏ん張りがきかなかつたのか、机に縋りつく様に倒れた。

「うわ、こけてやんの。かつこわりい」

わざとぶつかった男子が言つた。久保と仲が良い、三宅だ。三宅の横にいた久保は春名を見て、ニヤニヤと笑っている。その周りからも笑い声が上がつた。

「お前ら。何やってんだよ」

つい、そう怒鳴ると、久保たちの冷たい目が空に向いた。

「別に、ちよつとぶつかっただけじゃん。それをコイツが大げさにこけたんだよ」

三宅がそう言つと、久保も頷く。

「そうそう。いっつも体育サボつてる理由つて、超運痴だからだつたりして」

またもや久保の周囲から笑いが起こる。

「何言つとんねん、コイツ元オリンピック選手やぞ。運痴な訳ないやんか。春名がちよつと頭ええからつて。妬んで、嫌がらせするなんて、みつともないで」

その声に久保たちは振り向いた。入り口に近いところにいた海が、珍しく怒つた顔をしている。

「別に妬んでなんかねーよ。悪いことやった人間が、のうのうと俺たちと一緒に授業受けてることが、我慢ならねーだけ」

三宅が海を睨んだ。海も睨み返す。

「それは、ウサギが殺されたこと言ってるんか」

「それだけじゃねえよ。教室の事件だって、コイツがやったって話しだろう」

「誰が、そんな根も葉もないこと言っただよ」

空が我慢できずに聞くと、久保が答えた。

「噂になってるよ。学校中でな。行こうぜ皆。授業に遅れる」

そう言くと、久保たちは教室を出て行った。後に残った空は春名に駆け寄ると、まだ床に尻餅をついたままだった春名に手を差し出す。さつきからずつと黙ったままだった春名が、顔を上げて空を見た。顔色がやけに悪い。

「大丈夫か。春名」

「いや……ダメかも知れない」

強がる声が返ってくると思っていた空は、どう返事をしていいか分からなくなった。

「どうしたんや」

海も駆け寄ってきて、春名の前にしゃがみこむ。

「顔色悪いで。保健室行くか？」

春名は首を横に振る。空は春名が、久保たちにされた仕打ちで、落ち込んでいるのかと思っていたのだが、どうやら違うようだ。春名の顔色は今や青さを通り越して白といった方がいいたろう。呼吸もだんだんと荒くなっているようだ。肩が大きく上下している。とても苦しそうだ。春名の口から咳がこぼれた。喉からぜいぜいと苦しそうな音が鳴る。

「おまえ、喘息か？」

海が春名に聞いたが、春名は答えることも出来ずに、身体を折り曲げる様にして咳を繰り返している。

コレはかなりやばいかもしれない。空の頭の中で、そんな言葉が

浮かんだ時、海がいきなり立ち上がった。

「高橋。春名の鞆空けて薬ないか探してくれ。俺は保健の先生呼んで来るわ」

言うなり海は走って教室を飛び出した。残された空は、春名の鞆を持ってくると、春名に確認する。

「薬って、どれ」

すると、春名が顔を上げ、震える手で鞆を掴んだ。中から何かを取り出すと、口にくわえる。

プシュっと言う音が静かな教室に響いた。春名は吸入薬を全て吸い終わり、ゆっくりと目を閉じて近くの机に寄りかかる。

しばらくすると呼吸が楽になってきたようだ。空は少しほっとして、出て行っただけ戻って来ない海のことを口にした。

「遅いな、紫藤のやつ。何やってんだ」

「……何か……あつたのかな」

「え？ 大丈夫なのか。喋っても」

「ああ、軽い発作だったから。それに薬吸い込んでから、もう随分たってるし」

「そうか……遅すぎるな。紫藤の奴」

空は改めて、黒板上の壁に取り付けてある時計を見た。もう授業が始まってから十五分近く経っている。

「行ってみようか。保健室」

「お前、動いても平気か」

心配して聞いたのだが、春名は案外しつかりとした調子で頷いた。

「大丈夫。もうじゅうぶん休んだから。でも、一つ頼みがあるんだ」

「何？」

春名から頼みごとをされるなんて始めてかも知れない。空は少しドキドキしながら春名の言葉を待った。

「後ろのロッカーに折りたたみ式の杖が入ってるんだ。それ取ってきてくれないか」

「は？ なんでそんなもん持ってるんだ。っていつか何に使うんだ

よ」

「さつき三宅とぶつかった時に、古傷やられたんだ。今だって痛いんだから、この分じゃ歩けない。いいからさっさと持って来いよ。グダグダ言ってるで」

「だからなんで、そんな偉そうなんだよ。人に物を頼む時にはお願いしますって、下手に出るものだろうが、普通は」

空は春名の古傷のことを深く考える前に、春名の言い様に腹を立ててしまった。そのせいで、古傷とは何の事かと聞きそびれた。

空は春名に取ってきた折りたたみ式の杖を渡して、組み立て終わるのを待つ。そして春名に手を貸して立ち上がらせると、とりあえず保健室へと向かった。

「え？ 階段から落ちたんですか」

「そうなのよ」

保健室を訪ねると海はベッドで眠っていた。

「大丈夫なんですか」

「ええ。頭にたんこぶが出来ているけどね。それより、春名君。あなた顔色悪いわね。四時間目が終わるまでここで横になっていきなさい」

保険医はそう言って、海が眠っている隣のベッドへ春名を促した。空は授業へ出る様に言われ、もう半分以上終わってしまった授業へ出るべく、体育館へ足を向けた。

第八章 春名の見解

終礼が終わると、空は春名と海の荷物を手に、保健室へと急いだ。保健室のドアを開け、中を見ると、保険医の姿はなかった。空は薬品臭い部屋を横切ると、ベッドへ歩み寄る。

仕切りのカーテンを開けると、海と目があった。海は丸椅子に腰掛け、ベッドの上で半身を起こしている春名と、話しをしていたようだ。

「あ、大丈夫なのか。紫藤」

「おう、平気平気」

へらへらと笑ってそう言うが、頭の包帯が痛々しい。春名にも同様に聞くと、春名も大丈夫だと頷いた。その顔色が常に近くまで戻っていることにほっとする。

「お前急ぎすぎて足滑らしたんだろう。間抜けだなあ」

心配した分だけ、少しからかいたくなって、空は海に言った。だがその言葉を聞いた海と春名は、顔を見合わせた。

「何だよ。どうしたんだよ」

不審に思っ て尋ねると、海が口を開いた。

「それがさ、実は俺、足滑らせたわけやないねん」

「は？ どういうことだよ」

「紫藤は、二階と一階をつなぐ階段の上で、背後から誰かに突き落とされたらしい」

空の問いの答えを春名が引き取ってそう答えた。空は首を傾げる。

「なんで。誰がそんなこと」

「さあな。でもあの時ちょうど授業始まるチャイムがなったところで、周りに人おらんかったんや。それで目撃者がおらへんねん」

「先生には、勘違いだって言われたそうだ」

「……つとにこの学校って事なかれ主義だよな。むかつく」

空は海が先ほどまで寝ていたベットに腰かけた。傍らに三人分の

鞆を置く。

「でも、勘違いって事はないんだよな」

「なんや、お前まで疑うんか」

「疑うわけじゃないけどさあ」

軽く睨まれて、空は人差し指で頬を掻きながら言葉濁す。

「紫藤のポケットにコレが入っていたんだ」

そう言っただけで春名が差し出したのは、ノートを手で半分にちぎったものようだった。それがさらに半分に折られている。空は差し出された紙を受け取って、開いた。

わざと崩したように文字が書かれていた。酷く読み辛い。空はそれを声に出して読んだ。

「この事件から手を引け……。この事件ってどの事件だよ」

空は紙に落としていた目を上げ、二人の顔を交互に見る。

「さあ、ウサギの事件か……」

「教室の事件。もしくはその両方か。どちらにしろ、調べられたら困る奴がいるってことだろうな」

そう結論付けた春名に、海は頷いて肯定を示している。だが、空は少し引つかりを覚えた。

「でも、何で紫藤を突き落とした犯人は、紫藤が事件を調べてること知ってたんだろ。……つうかまだ何もやってねえし」

「あー、アレかも知れへん。昨日の昼さ、久保たちに話し聞きに言った時、結構大きな声で言うてもうたんや。俺らがウサギ殺した犯人を捕まえたるって」

「じゃあその時に、犯人もその場にいたかも知れないってことか」
空がいうと、まあそうだろうなと、春名も頷いた。空は手にしていた紙をとりあえず春名に返した。その時、空の頭にふと疑問が過ぎた。

「でも、犯人はどうやってこれ、紫藤のポケットに入れたんだろう」
海の顔を見ると、海は情けなさそうに口を開く。

「さあ、分からへんわ。俺、落ちてすぐに気絶してもうたみたいや

し。この紙がポケットに入っとったことやって、春名が気づいたぐらいやし」

「春名が？ どうして」

空が春名を見ると、春名はベッド脇の棚の上に置いてあった、海のブレザーを顎で示した。

「そのブレザーのポケットから落ちかけてたんだよ。この紙」

「ふーん。……そういえば、紫藤はどうやってここに運ばれてきたんだ」

今更ながらにそこに思い至って、空は海に尋ねる。海に顔を向け、聞いたのだが、答えを返したのは春名だった。

「先生と坂木先輩が見つけて運んだらしい」

「なんで、知ってるんだよ」

訝って空が問うと、春名は何でもないことのように言う。

「保険医に聞いたんだよ。気になったから」

「へえ。でもさっき紫藤は近くに人はいなかったと言わなかったか」「それはアレや。俺の背後っていうか、落ちる前に近くに人の姿が見えへんかったってだけで……」

「落ちてきた一階には、ちょうど職員室から出てきた先生と、坂木先輩がいたんだ。職員室と階段は近いだろ」

「ああそうか。なるほどな」

「でも、……あてが外れたな」

納得した空の耳に、春名の呟く声が聞こえた。良く聞き取れなかった空はもう一度聞き返す。

「え？ なんて言った今」

「いや、別に」

顎に手を当てて何かを考えているような春名は、そっけない返事を返す。だが、海が春名の思考を遮るように言った。

「あてが外れた、って言うたよな。今」

「……」

「何だよそれ、どういう意味だよ」

空は座っていたベッドから身を乗り出して、春名に尋ねる。春名は少し言い辛そうな顔をしたが、二人の視線を受けて、口を開くことにしたようだ。

「……犯人は同じなんじゃないかと思ってたんだよ。教室の事件とウサギの事件」

「まあ、ありえることではあるわな。でも、なんでそれが、あてが外れたっていう言葉になるんや」

海の疑問はもっともだと空は思った。春名の言い分では、まるで今回の件で二つの事件が、別の犯人のせいかもしれないといっているようではないか。

「はつきりとは分からないけど。今回の事件の犯人は坂木先輩じゃないかと思っていたんだ」

いきなり核心を突いた春名の言葉に、空は声をあげる。

「……なんでさ。生徒会長だろ。ありえないし」

海も空に同意するように頷く。

「そうや。あの人めっちゃ人望あるやん。そんな人が、教室あらしたり、ウサギ殺したりせえへんやろ。もし見つかったら今の地位全てパアやん」

「ああ、それはそうなんだけど。あの人は明らかにおかしい態度を取っていたんだ」

「おかしい態度ってなんだよ」

空が尋ねると、春名は少し疲れたように溜息を吐いた。先程、発作を起こした春名を思い出し、空は少し心配になる。まだ、本調子ではないはずだ。余り話をさせすぎるのも、良くないかもしれない。だが、春名は顔を上げて、また話し始めた。

「……まず、最初の、教室にペンキを撒かれた方だけど。あの時、先輩が現れたのを覚えているよな」

「ああ、誰も入ろうとしなかった教室に一人でズカズカ踏み込んで行ったよな。でもそれがそんなおかしい行動って言えるのか」

空はその時の生徒会長の行動を思い起こしながら口を開く。あの

時生徒会長は、臆することなく、床や机が真っ赤に汚れた教室に足を踏み入れた。

「違う。その後だよ。あの人が見つけたのが何か覚えているか」

春名は空と海を交互に見比べて問う。空は春名に頷いた。

「鍵だろう。確か教室の真ん中辺りで、拾ってた」

「そう。問題は鍵なんだ。あの時何であんな場所に鍵が落ちていたか、疑問に思わなかったか」

「確かに思ってたわ。その前の日。春名がなくなっちゃったって言うってたから、何となく教室の床やら隅やらに目え光らしとったけど、あんなところに鍵なんて落ちてへんかったもんな」

「でも、あれは犯人が置いていったんだろう」

空が言くと、春名は空を見た。

「何でそう思った」

春名が空にそう尋ねた。

空はだんだんイライラしてきた。もっとこうズバツと確信に迫った喋り方をしてくれないだろうか。春名は空や海に考えを出させようとしているのかもしれないが、空にはそれがとてももどかしい。

だが、海は春名のもったいぶった話し方を余り気にした様子はない。考えるような顔をしながら、空より先に口を開いた。

「あ、生徒会長が言い出したんや。鍵は犯人が落としたか置いていたかしたんやないかって」

空は覚えていなかったが、春名が肯定したので、黙っておくことにする。

「そう、でももしそうだとすると、犯人はどうやって教室の鍵をかけたんだと思う？」

そう問われて、空は思いついたことを口にする。

「予備の鍵を使ったとか？」

「ああ、それしかないやろうな」

空の言葉に海も同意するが、春名は首を横に振った。

「いや、それは無理だ。予備の鍵は僕がその日用務員さんに返して

から、用務員さんがずっと肌身離さず持っていたんだ。事件は用務員さんが教室の鍵を閉めてから後のことで、予備の鍵を犯人は使う事が出来なかった」

空と海は顔を見合わせる。空は覚えていた。春名が教室にペンキが撒かれた日に、鍵をやけに気にしていたことを。きっと春名はあの時すでに、何かに気づいていたに違いない。

「教室に鍵をかけるには、教室の外に出て鍵をかけなければならぬ。でもその鍵は教室に落ちていた。犯人は、密室状態の部屋からどうやって、教室を抜け出したんだろう？」

「ああ、もうっ。訳わかんねえ」

空が頭を抱えて喚いた。その声に顔を顰めた春名に、海が問う。

「で、結局春名は何が言いたいんや」

「坂木先輩が言った、鍵は犯人が落としたか置いていったかしたという見解には無理がある。なのに、どうして先輩はそんな事を言い出したのか。それはもう一つの可能性から目を逸らしたかったんだと思うんだ。……一度どうやって密室を完成させたかは置いといて、考えてみよう」

「分かった。でももう一つの可能性って何だ？」

空が問うと、海は椅子ごと体を揺らしながら、考え考え答えた。

「じゃあ、例えばやで。犯人は用務員さんが鍵を閉めに来るまで教室の中に隠れとって、鍵を閉められたあと、ペンキを撒いて後ろのドアから鍵を開けて外に出たんや。後ろのドアの鍵は中から開けられるやろ」

「えー、でもそれだったら、鍵閉まってないじゃん。後ろのドアは中からしか閉められないし。朝、鍵は全部閉まってたって朝倉言ってたろ。春名がしつこいくらい朝倉に確認してたから俺憶えてるぜ。それに鍵はどうなるんだよ。あそこに鍵が落ちてた理由」

「えーっと。もともと落ちとったとか。犯人が見つけて、分かりやすいところに置いといてくれたとかー？ 親切な犯人さんやな……なんちゃって」

海はそう言つて舌を出した。空はそんな海に反論する。

「えー。でもさ、鍵が誰にも見つからずに落ちてたとしたら、鍵にペンキがついているだろう。あの鍵にはペンキは全然ついてなかったぜ。それにお前がさっきいったんじゃないか。前日には教室に鍵は落ちていなかったって。俺もそう思うし」

空がそう反論すると、海は顔を顰めて頭を掻いた。

「そつやんなあ。自分でも言つててなんか変やなって思つたもん」
海がそう言つたところで、春名が口を挟んだ。

「でも、高橋が言つた、鍵にペンキがついていないのはおかしいつてこと、坂木先輩が言つてた二つの可能性にも当てはまると思わないか」

「なんで」

空は首を傾げた。ペンキを撒いた後に落としていれば、ついていなくても不思議はないじゃないか。

「教室の床はペンキで真っ赤になっていただろう。足跡一つ無かつた。ということは、犯人はペンキを撒きながら、後退して教室のドアまで戻つたんだ。その証拠に、教室のドアの前あたりにペンキで全く汚れていない箇所があつた。犯人は最後にドアの前に立つて、ペンキを撒いたんだ。自分が汚れないようにしなければならぬから、足元までペンキは撒けなかつた。もし、ペンキを撒いているときに鍵を落としてしまったとしたら、鍵にはペンキがついているはずだ。鍵は教室の真ん中に落ちていたんだから、ペンキを全体に被つていてもおかしくない。いや、むしろそつちの方がしつくりくるな」

言われて見ればその通りである。空はしきりに感心して、春名を見る。眼鏡をかけているのはやはり伊達ではないと、空は感心した。空には眼鏡をかけている人は頭がいいという、妙な偏見がある。

「そつ言われればそつやな。じゃあ、犯人が鍵をわざわざ置いていた場合は？ ……あ、その場合も一緒か」

海は自問自答するように言つた。空は何のことか分からず首を傾

げる。

「そう、その場合も同じだ。犯人はすぐさま現場を立ち去りたいと思うだろう。長く現場にいればいるほど、人に見つかってしまう可能性が高い。僕なら、すぐに逃げ出すだろうな。でも犯人がもし、鍵をわざわざ教室の真ん中に置いていったのだとしたら、ペンキが乾くまでの間ずっと待っていたことになる。そんなリスク、犯人は犯さないだろう」

「ほー、なるほどねー。お前あつたまいいな」

思わず感心して漏れた空の言葉に、嬉しそうな顔一つ見せず、春名は疲れたように溜息を吐いた。

「誰でも、少し考えれば分かる事だろう」

そう言う春名に、空は自信満々で答えた。

「分からないよ。そもそもそんな風に小難しく考えたりしないもんな。俺」

「はは。高橋らしいわ。ところで春名。それは分かったけど、もう一つの可能性ってなんや。坂木先輩が俺たちの目えくらましたかった、もう一つの可能性」

海が空の最も聞きたかった答えを、春名に要求した。春名は一呼吸置いてから話します。

「もう一つの可能性。……鍵は最初から教室には落ちていなかった」

「はあ？ 何言ってるんだよ。あそこに鍵があつたから、坂木先輩が拾えたんだろう」

反論を口にする、春名は首を横に振り、静かに言葉を紡ぐ。

「そもそも、坂木先輩はあの場所で、鍵を拾ったのかな」

「何言つて……」

またも反論しようとした空の言葉を遮るように、椅子ごと揺すっていた体の動きを止めて、海が興奮気味に口を開く。

「そうか。そういうことか。俺たちは教室の入り口から坂木先輩を見とった、坂木先輩は鍵を拾うときドアを背にして鍵を拾ったんや」
「だから、それがどうしたんだよ」

海が興奮している意味が全くもって理解できないでいる空は、ちつとも面白くない。幾分不機嫌な調子で言ったが、海は気づいた様子も無く話し続ける。

「だから、俺たちは見とったけど、ちゃんと見てへんかったってことや」

「だから分かんねーつつうの。俺見てたぞ、坂木先輩がドアを背に鍵を拾うところ……」

空はその時の情景を思い出して、途中で言葉を切った。何となく海の言いたいことが分かったような気がしたのだ。空が見ていたのはドアを背にしゃがみ込んだ坂木先輩であって、鍵ではない。

「坂木先輩が鍵を拾う振りをしていただけって言うことが」

「そう。坂木先輩が鍵を持っていたんだ。そして教室に入って、そこで鍵を拾う振りをする。だから、鍵にはペンキがついていなかった。もともとそこにはなかったものだから……」

「はー。なるほどなー。そういう訳か。坂木先輩がなんでその鍵を持ってたんかっていうのは、分からへんけど」

「そりゃ、犯人だからじゃねえの。どっかで朝倉が落とした鍵を拾って、丁度いいやつて」

「その可能性は高いかもしれないな。それにそう考えると密室の謎も解ける。坂木先輩が犯人と仮定するなら、坂木先輩は拾った鍵を使って教室に入りペンキを撒いたあと、教室に鍵をかけて教室を後にする。そして、何食わぬ顔で翌日教室の中で鍵を拾った風に見せかけた……」

「おお、なるほどねえ。さすが春名。やっぱり頭良いな」

「でも、全部仮定の話しで、証拠は一つもない」

空の言葉に否定的な声を上げた春名に、空はお前が言い出したんだろつと噛み付くように言った。春名は少し苦笑しただけだ。そんな二人を見比べて、海が口を開く。

「じゃあ次。ウサギ小屋の方はどうやねん」

「春名はそれも坂木先輩が犯人だと思ってたんだよな」

二人に頷き、春名は言った。

「ああ。高田先生から預かった生徒手帳が無いことに気づいたのは、委員会が終わったすぐ後だったんだ」

言葉を切った春名に空が先を促すと、春名は脱いでいたブレザーを手に取り広げて見せた。

「生徒手帳は右側のポケットに入れていたんだ。まず落とすはずはないのに、委員会が終わってから無いことに気づいた。教室と廊下を一応見て回ったけど見つけることは出来なかった」

「でもどうしてそこで坂木先輩が出るんだ」

空がそう聞くと、春名は空を手招きする。何だと訝しく思いながらも空は素直にベッドからおり、春名の座るベッドの脇に立つ。

そんな空に春名は普段滅多にしないような行動を取った。春名は空の腕をとって引き寄せると、空の耳に口を寄せたのだ。驚いて固まる空に、春名は囁く。息がかかってこそばゆい。そんな二人を海は面白そうに眺めている。

「左のポケット見てみるよ」

春名はそう言って空を離れた。空は囁かれた右耳を擦りながらも左手で左ポケットを探る。何も入れていなかったはずだが、指に何かが当たった。それを取り出してみる。

それは四つに折られた紙。少し厚くて硬い紙を広げる。その紙には小さな赤ちゃんが三人写っていた。

「何で写真がポケットに入ってるんだよ」

驚いた空に、春名は少し口元を緩めて言った。

「僕のポケットに入ってたんだ。生徒手帳からそれだけ抜け落ちたんだろうな」

「ああ、そうか……って、そうじゃなくてっ。俺が言いたいのはどうやってこの写真がこのポケットに入ってたかってことで……」

「分からへんかったんか。高橋」

海がニヤニヤしながらそう聞いてくるが、空にはいつの間にかこの写真がポケットに入ってたか分からない。

「だから何でだよ」

考えても分からないなら聞くまでだと空は開き直る。春名は海を見て言った。

「お前は気づいただろう」

「ああ。春名が高橋の腕を取って耳に口を寄せた時、左手で高橋のブレザーのポケットにその写真を入れとった。それが写真やつていうのは分からなかったけど」

空は呆然と春名を見やった。春名は珍しくしてやつたりと言うような顔をしている。空は全く気づかなかった。春名に耳元で囁かれたことに気を取られていたのだ。

「今のと同じようなことをされたんだよ。あの日坂木先輩に」

「え？ ポケットに何か入れられたのか」

驚いて尋ねると、すかさず海がつっこみを入れる。

「ちやうやろ。春名の場合は抜かれたんやろ。ポケットから生徒手帳を」

「ああ、なる程な。じゃあ、同じじゃなくて逆って言えよ」

少し恥ずかしくなって空が春名にあたると、春名は肩を竦めてみせた。

「同じってというのは、状況をさして言っただけど……」

ウサギ殺しのあった前日の委員会で、春名は坂木に肩を組まれ、事件を調べているだろうと聞かれたことを話した。その時にポケットから空の生徒手帳は盗まれたのではないかと春名は言うのだ。あの日生徒手帳を手渡され、委員会が終わるまでの間、春名が接触した人間は坂木だけなのだ。

「まあ確かにそれで、高橋の生徒手帳が春名のポケットからウサギ小屋まで移動した理由の説明はつくな」

「でも全て憶測で、証拠はない」

まあ、確かにと空は頷いた。空はまだ手にしていた写真を見て、ふと何か忘れていた事があったような気がした。少し考えてすぐに思い出す。

「ああ、孤児院」

空はつい大声を上げた。保険医がいたら叱られていたところだ。怪訝そうな春名とは違い、空の大声で海は椅子から立ち上がった。

「ほんまや。緑園。忘れてた」

「何時からだっけ」

空と海は今日自分達が少しの間過ごした孤児院を、訪問することになっていた。春名の発作や、海が階段から落ちたことなどが重なって、ついさっきまですっかり頭から抜け落ちていた。

「まだ、大丈夫や。二時半の約束やから……今からすぐ出れば間に合うわ」

海は壁に掛けてある時計を確認して、空に言った。空も頷く。時計の針は一時半を少し回っていた。

「どこか行く予定でもあるのか」

一人話しが見えなかったのだろう。春名がそう聞いてきた。

春名に聞かれて、空と海は顔を見合わせる。大事なことを忘れていたことに愕然として、春名がいるのに思い切り孤児院など大声を出してしまった。なんといい繕うべきか。空と海はどうしようかと、目を見交わす。そんな二人をなと思ったのか、春名は二人を促すように言った。

「緑園ならここから二駅先だから、今からならぎりぎりだろう。すぐに出た方がいい。僕も今から病院へ行かなきゃならないから」

「ああ、ありがとう。行こう。紫藤」

そう言っただけで海を促して空は保健室を走り出た。どうして春名が緑園を知っていたのかという疑問が頭を過ぎったのは、二人が大急ぎで電車で駆け込んだ後だった。

第九章 兄弟

空たちと別れ、春名光は病院へ向かった。学校から病院まで、徒歩で四十分はかかるので、途中でタクシーをひろう。

病院へ着くとさほど待たされることもなく、光は診察室へと入ることができた。

診察室の薬品くさい臭いが鼻をつく。病院の臭いだ。余り好きな臭いではないいつも思う。

くたびれた感じの丸椅子に、細身の医師が座っていた。医師は力ルテに目を落としながら、光に椅子へ座るように促した。

光は医師が座っている椅子と、同じような丸椅子に腰を下した。椅子が抗議の声を上げるように、軋んだ音をたてる。その音が合図の様に、医師は顔を上げ、光と目を合わせた。

「前より少し悪化しているね。ちゃんと杖を使って歩いてる？　だめだよ、杖は使わないと。歩けなくなったら嫌だろう」

こちらに引越してから見てもらっているこの医師は、小さな子どもに言い聞かせるような調子でそう言った。目尻に笑い皺を刻んでいる。

光は優しい容貌をした医師に、感情の伴わない声音で答える。「別に歩けなくなってもいいです。いつそ歩けない方が楽なんじゃないかと思います」

光の答えに、医師は眉を寄せた。だが優しい話し振りは変わらなかった。

「どうして？　足は動いた方がいいだろう。動かせなくなったら今よりずっと大変な思いをすることになるよ」

医師の言葉に光は首を横に振る。

「一緒ですよ。動こうが動くまいが、僕にとってはどっちでも……一緒なんです」

痛みを伴いながら動く足になんの価値があるというのか。光には

それが分からなかった。前の様に動かない足なら、光には必要ないのだ。

医師が何か言っている。だが光の耳にはもう、何もとどいていなかった。

電車に乗って二駅で、目的の駅に着いた。途中で買ったおにぎりを電車の中で食べ終えた空と海は、ゴミを駅構内のゴミ箱に捨て、電話で聞いたとおりの道順を歩く。

目的地に近づくにつれ、二人の口数は減っていった。

ようやく目的地についた。

空の胸元辺りまでしかないフェンスで囲まれた敷地内には、かなり古びた建物が見受けられる。その敷地内の端にはブランコや滑り台などの遊具も設置されていた。子ども達が歓声を上げて、遊んでいる。

フェンスが途切れた所に門があった。石造りの門にはその建物の名を示す物がかけられていた。

「緑園……ここか」

音を立てて鳴り出した心臓をなだめることも出来ずに、空はそう呟いた。

隣で頷く気配に顔を上げてみれば、海も緊張した面持ちでこちらを見返してきた。

「行くか？」

空が問いかけると、海は頷いた。

「ああ、行こう」

その言葉に頷いて、空と海は緑園の敷地へと足を踏み入れた。

受付で用件を告げると、二人は職員室に通された。

職員室の、端には衝立で隔たれた場所があり、そこが応接室変わりになっているようだ。空たちは少し古びた感じのソファに、二

人並んで腰かけた。お茶を出してくれた若い職員は姿を消し、入れ替わりに年配の女性がやって来た。

女性は白髪交じりの髪を後ろで束ねている。穏やかそうな顔には笑顔が浮かんでいた。手にはアルバムを持っている。

「ごめんなさい、お待たせして」

優しい響を持つ声音だった。女性は空たちの前に座ると、二人の顔を交互に見比べた。

「ふふふ。面影があるものね。あんなに小さかったのに、こんなに大きくなっちゃって。あなたが、空くん。で、あなたが海くんね」

中島と名乗った女性は、にこやかに空と海の名前を当てた。

「すごい、良く分かりましたね」

素直に感心した空に、女性は頷いた。

「実はね。さっきアルバムを見ていたのよ。ほら、あなた達の写真もあるでしょう」

そう言って中島は、手元に置いていたアルバムを開いて見せた。幾つか貼ってある写真の一つを指差し、中島は続ける。

「ほら、コレ。あなた達が貰われていく少し前に撮ったのよ。かわいいでしょう。二人とも面影があるし」

「そうですか？ …… あ。俺たちってやっぱり、本当の兄弟なんですよ」

空が問うと、中島は写真に向けていた目を上げ、きょとんとした表情で空を見返した。

「あら、知らずに来たの？」

驚いた様に中島が問うので、二人は頷いた。空と海は持っていた赤ん坊の頃の写真を中島に示して、二人がこの写真を見て兄弟じゃないかと思うようになったこと、ここにきてそれを確かめたかったことなどを話した。

「そう。大丈夫よ、あなた達はちゃんと兄弟だから。…… 大丈夫っていうのもへんよね」

そう言って中島は小さく笑う。空たちもつられて笑った。

「もう一人の兄弟のことなんですけど、中島さん分かりませんか。何処に住んでるとか」

海が中島に訪ねた。それを横で聞いていた空は、敬語の時は関西弁じゃないんだなと、余計なことを考えた。

「今年のはじめ頃かしら。見えたわよ。こちらに」

「ええ？」

「ホンマに」

驚いて同じタイミングで、違うことを言った二人に、中島は鷹揚に頷く。

「ええ。でも……」

そこで、中島は言いよんだ。空と海は顔を見合わせる。何か良くないこともあるのだろうか。

「事故にあわれたらしくて、車椅子に乗っていらしたのよ。とても大きな事故だったみたいね。顔にも大きな絆創膏を貼って……。今は随分良くなっていてるってお手紙貰ったから、二人ともそんな顔しなくても大丈夫よ」

よほど悲壮な顔でもしていたのだろうか。中島は最後に笑顔をつくってみせた。

「良かった……」

ほっと胸を撫で下ろした空の横で、海も安心したように息を吐いた。

「あなた達を捜してらしたのよ。会いに行こうと思っているとおっしゃってたわ」

「え？　でも、誰も尋ねて来なかったよな。紫藤」

「ああ。来えへんかった。俺と兄弟やっていう奴なんか」

「まあ、そうなの。住所と電話番号はお渡ししたのだけれど。身元もちゃんとしてらしたし、大丈夫だと思ったのだけれど、いやだわどうしよう」

口元に手をあて、少し不安そうな表情になった中島に、空は問う。「その、もう一人の兄弟の名前とか、住所とか分かりますか。こっ

ちから尋ねて行きたいんです」

「ええ、分かると思うわ。えっと、名前は……あら、なんだったかしら。えーと、確か、苗字に季節のどれかが入っていたような……いやね、年をとると忘れっぽくなって」

中島は少し待っていてねといい置いて、席を立つと応接スペースを出て行った。

「なあ。今、季節って言ったよな。名前に入ってる文字」

小声で空が言うと、海は頷いた。空は思いついた名前を口にした。「春名じゃないのか。もしかして」

「……できすぎた話しやけど、俺もそう思う。だってなあ。あいつこの場所しつとったみたいやし」

「ああ。写真も意味ありげに見てたし……」

そこまで言った時、中島が戻ってきた。中島はメモ用紙を空に手渡した。

そこに書かれていた名前は、二人が予想していた通りのものだった。

緑園を出て、空と海は駅に向かって歩いていった。どちらも口を開こうとしない。空は腹を立てていた。何故、春名は俺たちに何も言わなかったのだろう。自分は空たちと血の繋がった兄弟だと、どうして言わなかったのだろう。何故、春名は知っていて知らないふりをしていたのだろうと。

考えても分かりはしない。だが自分ならきつと、すぐに話していたと思うのだ。この世でたった三人きりの、血の繋がった兄弟だということ。

「なあ、直接本人に会って聞いてみいひんか。なんで黙ったか」
ぼそりとそう言った海を軽く見上げて、空は立ち止まった。

「今からか？ でもどうやって連絡とるんだよ」

「電話するわ」

そう言って海は背負っていた鞆から、携帯電話を取り出した。す

ぐに耳に当てたところを見ると、番号は短縮にでも入っていたのだろつ。

「あ、春名か。おー、今からお前ん家行っていー？ え、まだ病院？ おお」

しばらく話した後、海はすぐに電話を切った。振り向いた海に、空は聞いた。

「春名なんて言ってた？」

「家に来いって。まだ病院やけど家で待ってろって」

「へえ。そうか。ところでお前、なんで春名の携帯番号知ってたんだ」

「この間聞いたからに決まってるやん。俺はいろんな人の携帯番号持ってるで」

「ふーん、まあ、ちょうど良かったな。春名に色々聞きたい事あるし。とりあえず行ってみようぜ。春名の家に」

携帯電話の通話を切って、春名光は病院の壁に背を預けた。ちょうど病院から出てきたところに海から電話があつたのだ。

きつと電話があるとは思っていた。光はそう考えて、壁から背を離れた。杖を使って歩き出し、光は持っていた携帯電話を、ズボンのポケットに入れた。

歩くたびに走る痛み、少し顔を顰めて、光は歩みを止めた。医者者の言葉が頭を過ぎる。

『足が動かなくなってもいいのかい』

医者はそう言った。だが、何が違うと言つのだ。今だってまともに動かないではないか。いつそ完全に動かなくなった方が、痛みを感じなくてすむ。

いつそあの時、足がなくなっていれば……

今もこんなに、未練を感じなくてすむのに……

第十章 春名の過去

「本当にここだよな」

空は呆氣にとられたように言った。緑園で貰った住所を頼りに春名の家の前に着いたのだが、余りに立派な家で驚いた。家ではなく、屋敷と形容したくなるほどの大きな白い建物が、門の奥にそびえ立っている。

「ここやな。表札出とるし」

門の横についている表札を見ながら、海が言った。言われて見ると確かに表札に春名とある。春名の家は金持ちだと噂されていたが、この家を見る限り、噂が真実だと知れた。

空が海の顔を見ると、海が促すように顎をしゃくった。空は眉を寄せたが意を決し、インターホンを押す。二三回押すと、ほどなくインターホンから女性の声が聞こえてきた。

『はい』

「あの、俺……僕たち光君の……」

『ああ、はい、聞いてますよ。門を開けるから玄関まで来てくださる？』

最後まで聞かず、インターホンから聞える声が告げた。そうかと思つと、門がいきなり動き出した。

「自動だよ」

ついそう呟いて、海を見る。海は空に頷いて、まだ開ききっていない門から、敷地内へと足を踏み入れた。暫く歩くと玄関の前に着く。空がドアをノックするかどうしようか迷っていると、ドアがこちらに向かって勢い良く開いた。

ドアにぶつからないように慌てて避けた空たちに、女性が明るく声をかけた。

「まあ、いらつしゃい。光から話しは聞いているわ。どうぞ上がって」

声の主を軽く見上げると、三十代くらいの女性が華やかな笑顔で立っていた。かなりの美人だ。暫く彼女に見入った程だ。

黙って突っ立っている空たちをどう思ったのか、女性は何かを思いついた様にアツと声を上げた。

「あら、やだ。ごめんなさいね。自己紹介がまだだったわ。私は春名みさき。光の母です」

「母」

空は思わず海と同時に叫んだ。女性、春名光の母親はにっこりと笑って同じ言葉を繰り返した。

「はい、母です」

「すっげーびびった。こんな若くて美人なお母さんなんて、いいない。すっげー羨ましい」

空は思った言葉を、そのまま口に出した。しかも大声で。

春名みさきと名乗った女性は、嬉しげに声をあげた。

「やだ、そんな褒めないで。恥ずかしいわ。さ、上がって」

口ほど恥ずかしそうなそぶりは見せず、みさきは家の中に入っていく。空と海は一度顔を見合わせ、促されるままに空から先に、家の中へ入った。

モデルルームみたいだと、空は思った。入ってすぐの玄関ホールは吹き抜けになっていて、上から明るい光が入ってくる。壁際に置かれた白い大きな花瓶には、ピンクと白い小さな花が活けられていた。埃一つなさそうな玄関ホールを抜け、階段を上り、一つの部屋に案内される。

思ったより小さな部屋だった。正面に大きな窓があり、青いカーテンがかかっている。部屋の真ん中には小さな四足テーブルが置いてあり、その横にはソファーがあった。ソファーの後ろには、ベッドが置かれている。

ソファーと相対する様に置かれた大きなテレビが、その存在感を放っていた。絶対三十インチ以上はある。と、空は思った。実際には三十六インチあるのだが、それは空の知るところではない。

空たちにソファーに座るように言ったみさきは、飲み物を持ってくると言って、一階へ下りていった。

二人して並んで白いソファーに座る。絶対に飲み物をこぼせないと空は思った。

「凄いなー」

空の横で、海が呟いた。空はソファーに向けていた目を上げ、海を見る。

「何が」

そう問うと、海はこちらを見もせずに顎をしゃくった。空は海の視線を追った。

テレビの横に大きな棚がある。ガラス戸がついた棚には数多くの賞状や盾や、トロフィーがあった。

「おお、すっげ。コレみんなアイツが貰ったのかな」

「そうやろうな」

コンコンと、ドアがノックされた。入ってきたのはみさきだった。手に盆を持ちその上には飲み物だけでなく、ケーキも乗っていた。

甘いもの好きの空には思っても見なかった幸運だったが、喜びを表面に出すほど、空は子どもではなかった。

「どうぞ。簡単なケーキだけど。良かったら食べて頂戴」

笑顔でみさきは言った。空は、前に出されたショートケーキとみさきを交互に見て、口を開く。

「コレ、みさきさんが作ったんですか」

尊敬の眼差しで言うと、みさきは頷いた。

春名の母親をみさきさんと呼んだのは、みさき本人にそう呼んでくれと頼まれたからだ。おばさんと呼ばれるのは嫌なのだそうだ。空自身みさきのような美女を、オバサンとは呼べない。

「美味しかった。ご馳走様です」

空と海は無言でケーキを食べ終わった後、声をそろえてそう口にした。無言で食べていたのは気まずかったわけではなく、思いのほかケーキが美味しかったからだ。

空は心底こんな美人で若くて、ケーキ作りの上手い母親がいる春名が羨ましくなった。

「お粗末さまでした。もうすぐ光も帰ってくると思うから、もう少し待っていてね」

そう言って食べ終わった皿を片付けて出て行こうとするみさきを、空は呼び止めた。

「みさきさん、待ってください。教えて欲しいことがあるんです」

空が言うと、海も頷いた。みさきは少し戸惑ったような顔をしたが、皿の乗った盆をテーブルの上に置いて、床に直接座った。

「教えて欲しいことって何かしら」

二人の顔を交互に見て、みさきが問う。空は海を見る。海は促すように頷いた。

「実は俺たち、春、じゃなくて……光君と血の繋がった兄弟なんです」

「知ってるわよ」

結構勇気のいった告白に、みさきはあっさりと頷いた。

「へ？」

「知ってるわよ。光と一緒にあなた達の様子見に行ったこともあるし」

「ええ！」

空と海は同時に叫んだ。動じた風もなく、みさきは笑顔を見せている。

「俺、全然知らなかった」

「俺もや」

空と海の言葉に、みさきは苦笑いを返した。

「ゴメンなさいね、実は、物陰からこっそりと見てただけなの。自分が訪ねて行くことで、あなた達の生活を乱したくないって、光が言ったから」

「……」

思いもしなかったことを言われて、二人は暫く言葉が出なかった。

みさきも、何も言わない。黙って二人が口を開くのを待っている。
「そんなこと、気にしなくても良かったのに。俺、自分がもらわれ
っこだって、知ってたし。訪ねて来てくれたら、多分、いや、絶対
嬉しかったと思う」

「俺も」

空の言葉に海が同意した。みさきは、悲しげな笑みを浮かべた。
「そう。でもあの子は、自分が私達の子ではないと知ったのが最悪
な形だったから、あなた達に、同じ思いをさせたくなかったんじゃない
かしら」

普段の春名からは考えられないような行動だ。いつも自信満々で、
命令口調の嫌な奴だったはずなのに。それでも一緒にいたのはきつ
と……春名が、実は優しい奴だって気づいていたからかもしれない。
空はそう思ってみさきを見た。

「教えて欲しいことってというのは、今聞いた事ともう一つあるん
です」

「何かしら」

「アイツがなんでフィギアスケート辞めたのか。アイツに聞いても
たぶん、答えてくれないと思うんです」

「ここにある盾とかって春名がとったやつですよ。何で辞めたん
ですか。辞めた理由と、アイツが体育サボってる理由は一緒ですか」
空の問いに、海が重ねて問う。みさきは困った顔をした。言うべ
きか言わざるべきか迷っているようだ。

空と海は、春名が体育に出ないことで、クラスメートから反感を
買っていることをみさきに告げた。内心春名には悪いと思ったが、
言わなければ、教えてもらえないと思ったのだ。

「そう、あの子何も言っていないのね。変なところで強情なんだか
ら」

溜息をついて、みさきは居住まいを正した。話す気になったよう
だ。本人のいないところで、こんな話するのはフェアじゃない気
もするが、春名に直接聞いたところで一蹴されて終わる可能性が高

い。何せ春名は頭がいい。

「あの子がフィギアをやっていたのは、誰に聞いたの？ それとも知っていたのかしら」

「いえ、学校で話題になって。雑誌見せてもらったんです。でもあいつ、その雑誌ゴミ箱に捨てたんですよ」

「まあ」

空の言葉に驚いたように、口元に手をやってみさきは俯いた。息子がそんなことするなんてと言いたそうな顔をしている。もしかしたら、春名は家で、良い子ぶっているのかもしれない。

「そう、家では結構普通にしてるのに、やっぱり……」

呟くようにそう言ったみさきの言葉を、最後まで聞き取れなかった。みさきの名を呼んでこちらに注意を引くと、みさきははっとしたようにうつむけていた顔を上げた。

「ごめんなさいね。なんでもないの」

気を取り直したように、みさきは微笑んで話し始めた。

「あの子がフィギアスケートをやめた理由は、事故だったの」

「事故ですか？ 結構大きな事故なんですか」

その問いに頷いたみさきは、思い出すように盾や賞状が並んだ棚に顔を向けた。

「車の衝突事故だったの。あの子とコーチが乗った車に大型トラックが突っ込んだのよ。その時の事故で、追突した大型トラックの運転手と、光を庇ったコーチが亡くなったの」

二人同時に息を飲んだ。それ程大きな事故だったのなら、春名も大きな怪我をしたのだろうか。空は思い出した。春名は折りたたみ式の杖を持っていた。もしかしたら……

「足、怪我したんですか。アイツ」

「……知ってたの？ 普段は何でもない風に歩いてるから、気づく人は少ないのよ」

「ええ、まあ」

空は言葉を濁した。今日、孤児院で車椅子に乗っていたと言うの

を聞いていたし、春名が発作を起こしたあとに春名のロッカーに杖が入っていたのを見ている。

「あの子は重大事故だったにも関わらず、奇跡的に助かったけど、ひしゃげた車の間に足が挟まってしまつて……脚に大きな損傷を受けたの。お医者様は歩行を出来るまでには回復するだろうつておつしやつてくれたけど、あの子には何の慰めにもならなかったでしょうね。あの子はスケートが本当に好きだったから」

みさきが柵からこちらに視線を戻した。空と海は言葉もなくみさきを見つめる。

「お医者様が光にそのことを告げた時。私達もいたの。あの子はもうスケートが出来ないつて知つても、顔色一つ変えなかったわ。私の方が耐えられなくて、泣き出してしまつたけど。あの子はそんな私に謝つたのよ。あの子は何も悪くないのに。嘆くことも、取り乱すことも、悲しむそぶりも見せずに。ただ、申し訳なさそうに謝つたの。私達に、ごめんなさいつて」

その時の春名の気持ちは、どんなものだったのだろう。自分だったらどうだろうと空は考えた。きつと自分なら信じられなかっただろう。いきなり、もう今までやつてきたことが出来なくなるなんてそしてきつと取り乱したに違いない。自分ではどうしようもない事態に困惑して。

「あの子は、それから様子も普段と変わらない様に見えたわ。もちろん、見た目は事故のせいで随分酷いことになっていたけれど。顔にも大きな傷が出来ていたしね。頬に大きな絆創膏をはつたの……。傷が治つて本当によかつたわ。あの子の顔に傷が残つたら最悪よねえ。息子ながらあんなに綺麗な顔してるんだもの……」

話がずれてきた。春名が小さい時からどんなに可愛かつたかを話し始めるにいたつて、二人はようやく止めに入ることが出来た。

「あのー、ちよつと春名の顔のことはもういいんで、足の具合とかの話を聞きたいんですけど」

呆れた声で海がいうと、みさきは照れたように頬に手をあてた。

「あら、いやだ。私ったら、光には内緒ね」

そう言って口元に人差し指を当てる仕草がやけに似合っている。

「お医者様の言ったように、歩ける様にはなったの。でも、運動できるほどには回復できなかった。歩くとな、痛みが走るのよ。走ろうとしても五、六歩でうずくまっちゃうの」

「……だからあいつ、体育の授業でないんだ」

否、出られないのだ。どんなに出席したくても。体育の授業に出ないことを責めた時、春名はどんな気持ちだったのだろうか。出たくても出られないと、言いたかったのだろうか。心の中でそう、反論していたのだろうか。

「先生が何も言わへんのは、それを知つとるからか」

呟くように海が言った。みさきが頷く。しばらく無言の時間が過ぎた。みさきが何かを思いついたように手を打った。

「よかつたら、あの子が滑つてるところ見ない？ 撮つてあるのよ」

思わぬ提案に、空と海は同時に頷いた。

「ぜひ見せてください」

空には暗くなった気分を、少しでも変えることが出来ればという気持ちがあつた。何より、春名がオリンピックに出られるほどのスケーターだったことを聞いていても、いまいちピンと来なかったのだ。それを見られるというなら是非見たい。

空の家にあるテレビの倍以上は大きなテレビに、映像が流れ出す。みさきはDVDをセットした後、今度は冷たい飲み物を持ってくると言つて、階下へ行つてしまった。

『さあ、次は日本の選手、春名光の登場です』

アナウンサーの声だろう。画面から流れ出た声はやけに綺麗な発音でそう言った。

画面には小さな人影が、リンクの中央に滑り出てきた姿を映している。映像が変わつて、春名の顔がアップになった。緊張した顔をしている。今の春名より、少しだけ頬に丸みがあるが、その顔は確かに春名だった。

曲が流れ出した。この曲は空も知っている。題名は覚えていないが、世界的に有名なアニメ映画の主題歌だ。曲に乗って滑り出す春名は、その白い衣装の印象もあってか、まるで妖精のようだ。

『今期のオリンピックでは、日本人選手は二人出場しています。春名は今大会では最年少選手です。加藤さん。春名はどういう選手ですか』

アナウンサーの声に解説の加藤が答えている。

『彼の一番の特徴はジャンプですね。難しいジャンプも軽々とこなしている様に見える。そこが春名の凄いところです。いつもの演技が出来ればメダル圏内にも入ってくるかもしれませんね』

おおすげー。と空は思った。今まさに解説者が褒めたジャンプを、春名がしたのである。本当に軽々といった感じた。背中に羽でも生えているようだ。

「あっ」

思わず声がでた。次のジャンプで、春名は失敗した。完全に尻がついてしまったのだ。痛そうだ。だが春名はすぐに立ち上がって滑り始める。軽やかなステップ、転んだことはまるでなかったような滑りだ。

『尻餅をついてしまいましたね、加藤さん。コレは大きく減点されるでしょう』

『そうですね。一回目のジャンプは綺麗に決まりましたが、二回目のジャンプは踏み切る時に少し軸がぶれていました。やはり、緊張していたのでしょうかね』

などと言っている解説者に、空は少し腹をたてた。

次のジャンプもまた失敗した。それでもめげずに滑り出す春名。みさきさんも、どうせなら失敗していない映像を見せたらよかったのにと空は思った。

演技が終わった。案の定春名の点数は低い。点数の結果が出た後すぐに、画面が切り替わった。また、オリンピックの映像だ。画面の中に五輪のマークがあるのでそれと分かる。

「なんで、二回もオリンピックの映像があるの」

「あれやろ、フィギアスケートって、二回やるやん。えーと、ショートプログラムと、何とかプログラム」

「何とかって、なんだよ」

海に顔を向けると、眉を寄せた海と目が合った。

「覚えてへんもん。しゃあないやん」

答えはすぐに分かった。画面の中で、アナウンサーが言ったのだ。二人は画面に視線を戻す。

『大会二日目。男子フィギアスケート、フリープログラムがまもなく始まるうとしています』

画面はリンクの中で複数の選手が練習している姿を映しだしている。その中に春名もいた。

「こうやって見ると、知らん人見たいやな」

「ああ、なんか雰囲気も違うしさ」

すぐにまた画面が切り替わった。春名の出番があるところだけ、映っているようだ。

さっきの白い衣装と打って変わって、春名が着ているのは黒っぽい、どこか忍者を思わせる衣装だった。曲もアナウンサーの言うところでは、オリジナルの、日本を意識した曲らしい。

先ほどは、画面から伝わるほど緊張の面持ちをして滑っていたが、今度のフリーでは緊張感がさほど伝わっては来ない。もちろん、緊張していないわけではないのだろうが、前回の演技の時より、リラックスして見えるのだ。空の気のせいかも知れないが。もしかしたら、ショートプログラムで失敗したことによって、良い意味で色んな事が吹っ切れたのかもしれない。

春名が滑り出した。太鼓のリズムに合わせて、ステップする春名の顔には笑顔も見える。観客たちがその音にあわせて手拍子を始めた。

「あ、ジャンプする」

春名がジャンプの体勢を取ったとき、思わずそう口走っていた。

ふわりと春名の身体が浮いた。くるくると回り、危なげなく着地したと思った時、またもジャンプした。連続ジャンプだ。三回連続でジャンプした春名の顔に、今まで見たことも無いような笑顔が浮かぶ。

こんな顔で笑えるんだ。空は画面に見入った。解説者が、今のジャンプの種類を言っていたが、もう空の耳には入ってこなかった。春名が、笑顔で滑る。観客達の手拍子が鳴る。空と海は完全に魅せられていた。春名の演技に。

この演技が春名にとって、最後の演技になってしまったことを、二人は知らない。知っていたらきつと、辛くなって見ていられなかっただろう。

演技が終わると、観客達が立ち上がって拍手をしている。リンクに花束や、ぬいぐるみが落とされた。その一つを手にとって、春名はリンクを出た。

映像はまだ続く。上気した春名の頬はうつすらと赤みがかった。息遣いは荒く、その運動量が察せられる。見ている間は今の演技が、それ程激しいようには見えなかったが、やっている方は、それはしんどいのだろうと空は思った。

春名はリンクを降りた後、コーチと思しき男性と抱き合った。男性は春名に良くやったとも言っているのだろう。笑顔で、春名の背を叩いている。

「この人が、亡くなったのかな。……事故で」
言われて、空は思い出した。みさきが言っていた。事故で、運転手とコーチが亡くなったと。

春名と男性が並んで採点が下るのを待っている。アナウンサーが、春名の隣に座る人物を、コーチだと紹介した。

長瀬コーチと紹介された男性は春名に何か言っている。春名は、観客からプレゼントされた小さな白いクマのぬいぐるみの手をとって、ぬいぐるみに手を振らせながら、何か言っている。音声が入っていないようで、何を言っているのかまでは解らない。

「なんとかチャンって言ってるで、春名のやつ」

「えっなんで分かったのさ、そんなこと」

驚いた空に、海は画面を指差して言った。

「唇を見れば分るやん。ほらまた」

そんなことを言っている間に、点数が出たようだ。会場が沸いた。かなりの高得点だったらしいが、良く分らない。画面の中で、春名とコーチが立ち上がった。そこで、画像が止まった。空はテーブルに置かれていたリモコンで、電源を切った。

「どうだった」

聞かれて驚いた。その声は海からではなく、部屋の入り口の方から聞えてきたのだ。

ドアにもたれるようにして春名が立っていた。手にはコップが三つ、コップを持っている。コップの中身はオレンジジュースだろうか。いつの間に部屋に入ったのだろう。空は全く気づかなかった。

「いつの間に……」

「お前らが、バカみたいに口あけてテレビ見てる時」

そう言っただけで春名は少し足を引きずるようにして歩き、コップを二人の前に置いた。そして自分の分のコップをもったまま、ソファの背後にあるベッドに腰掛けた。

いつもなら春名の物言いに腹を立てる空だが、今はそんな気にはなれなかった。

「あのさ、俺たち、実は……」

春名は空の言葉を最後まで聞かず、手をあげて制した。

「母親から聞いている。全部聞いたんだろ？ 僕がお前らのこと知ってたことも、事故で足を怪我したことも」

「ああ。ごめんな」

すると、謝罪の言葉が出た。自分でも驚くほどに。

「別に、謝る事はないよ。こっちだって、お前らのこと勝手に見に行ったり、ストーリーじみたことをしてるからな」

「ストーリーって。お前……」

「隠れて見られてるなんて、いい気はしないだろう」

春名がそう言って、コップに口をつける。つられて、空と海もオレンジジュースを飲んだ。味が濃い。絶対果汁百パーセントだ。

「そんなんは別にいいねん。なあ、さっきの映像で、おまえ誰かの名前呼んどったよな。なんとかちゃんって。彼女の名前か」

それこそどうでも良いような海の問いに、少しの間考えるような顔をした春名は、思い出したように答えた。

「ああ。コーチの娘さんの名前だよ。のんちゃんって言うてるんだ、あれは。コーチに頼まれたんだよ。娘の名前を呼んでくれって」

そう言う春名の顔に嘘はなかった。本当のことなんだろう。空は、気になったことを聞いていた。

「あのコーチってさ。もしかして、事故で亡くなったって……」
そこまで空が言った時、春名は持っていたコップを強く握り締め

た。酷い事故だったという。思い出したくはないのだろう。コップを見つめている春名の表情は分かり辛い。

「あの、言いたくなかったら、別に言わなくても」
空がそう言うのと、春名は顔を上げた。

「いや、別に。……そうだよ。亡くなったのはあの人だ」

「そうか。……なあ、春名。何でお前、足が悪いこと皆に言わんかったんや。知とったら皆、お前のこと悪う言わんかったと思うで」

ソファアの背もたれに腕を置いて海が聞いた。春名は淡々と口を開いた。

「言ったところで、そう変わらなかったと思うけど。足に怪我してなかったって、陰口は言われてたからな。今も昔も」

「……それはお前の態度の問題だろ」

ついそう言っていた。春名はまだ固い表情だが、口元が笑うように動いた。

「悪かったな、態度悪くて」

「ほんまやで。態度の悪いお前と短気な高橋の間に入って、俺はもう苦勞ばっかりや」

大げさに海がそう嘆いて見せた。暗い気分だった筈なのだが、なぜか笑いが込み上げて、三人して笑った。

「あーあ、なんかさ、俺たちが兄弟だって分かって、気になってたお前の過去も分かってさ、お前には悪いけどちよつとすつきりした」
一頻り笑ったあと、空はベッドに座る春名を軽く見上げて言った。
「でも、まだ何も解決してないんだぞ。教室の件もウサギ小屋の件も」

「まあそれは、そうだけど」

「はい。ここで提案」

突然海が手をあげた。

「せっかく俺達がほんまの兄弟やって分かってんし、今日は暴露大会しようや」

「暴露大会？」

春名が訝しげな表情で問う。

「つまりや、俺らだけお前の過去知ってもうたやんか。それって何か不公平やろ？ だから、今度は俺達の話したろうっちゅうこと」

「ああ、それいいかも」

空は海の提案に大きく頷いて賛同した。そして海を真似て手をあげる。

「ついでに俺からも提案。兄弟だって分かったんだしさ、名前で呼ばねー？ 苗字で呼ぶのって変な気がする」

空の提案に、二人は嬉しげに頷いた。

第十一章 事件捜査

彼は理科室の扉を開けた。中は薄暗い。電気はついておらず、室内に入ってくる夕焼けの明かりだけが頼りだ。

彼は中にいた男に声をかけた。彼に背を向けていた男が、こちらを振り向く。

「遅かったな。待ちくたびれたよ」

「……僕は色々忙しいので。先生は知っていますよね」

彼が言つと男、一年二組の担任教師である黒田が笑った。

「ああ。今日も委員会があつたっけな。それより、例のものは持ってきたか？」

彼は無言で、カバンから封筒を取り出した。それを黒田に差し出す。黒田は封筒を奪うように受け取った。早速封筒の中身を取り出し数え始める。封筒の中には一万円札が十枚入っていた。黒田は満足そうに笑んだあと、もう一度札を数えながら言う。

「払えないなんて言つといて、ちゃんと持ってくるとはね。本当についてたよ。あの日残業してなければ、お前がウサギ小屋を荒らすところに出くわすこともなかったんだからな」

黒田の言葉に、彼は苦い顔をする。あの時、うさぎ小屋にいる所を見られたために、彼は黒田に強請られていた。

「次は十五万用意しろ。お前の家は金持ちなんだし、用意するのは簡単だろう？」

「そんな、話が違います。十万払えば、誰にも言わないって……」

「いいのか？ 学校中に知られても。お前がウサギを殺した犯人だつて」

「……」

黒田は嫌な笑みを浮かべ、彼の肩を叩く。

「一週間以内に頼むぞ」

そう言つと黒田は彼を残し、理科室を出て行った。一人理科室に

残された彼は、唇を噛みしめる。自分への疑いをそらすことが出来たと思っていたのに。何故こんなことになったのか。彼は失態を犯した自分を激しく呪った。

「あー、ムカつく。あいつらマジムカつく」

日曜日明けの月曜日。空は移動教室からの帰り、二階の渡り廊下で、傍らに並んで歩く紫藤海に憤然と言い放った。海は苦笑いだけしてコメントは控えますと言うように、渡り廊下の窓に顔を向けた。昼休みに入っただけのせい、廊下には生徒の姿が多く見られる。空が腹を立てている理由。それは、先ほどの授業での出来事が原因だった。先ほどの授業は調理実習だった。その調理実習の最中、久保が光の腕に熱湯をこぼしたのだ。アレは絶対わざとだと空は思う。幸いすぐに水をかけ、家庭科の教師が応急処置を施した為、軽い火傷ですんだ。だが、もしかかった場所が顔であったり、熱湯をこぼす量が多かったりすれば、もっと大事になっていたはずだ。久保はあの時平謝りしていたが、真意はどうか分からない。

「久保の奴、文句を言っただろうと思ったのにさっさと教室から出て行きやがって……っておい、何やってんだよ。海」

隣を歩く気配がなくなったことに気づき、空は歩みを止め、後方にいた海に声をかけた。海はいつの間にか立ち止まり、窓の外を眺めていたようだ。空は海の側まで歩み寄った。海は窓の外に気を取られている。

「何見てんだ。海」

海は空を見もせずに、窓の外を指差した。

「ほら、こつから保健室見えるやろ、光が出て来^けえへんかなあと思っただけでっけ。あそこ、一階の廊下見てみ、飯田が男としゃべってる」

「あ、本当だ」

空は海の横に並んで、海の指差す方向を見た。そこには確かに飯田倫子が、廊下で男子生徒と立ち話しをしている姿が見えた。

「彼氏かな」

少し複雑な気分になりながら、空は呟いた。そのすぐ背後から、誰かが声をかけてきた。

「はっるなくん」

「わあ、何や、朝倉。俺光とちゃうで」

海の叫び声に我に返った空は、背後に立っていた朝倉を見た。朝倉は海の顔を見た途端、可愛い顔に仏頂面を作った。

「ちよつと、何で紫藤なのよ。春名君だと思ったのに……春名君と紫藤って、後姿そっくりね」

「そうか？」

そりゃ、兄弟だからな。と、空は思う。

朝倉はそんな空にはお構いなしに、何見てたのよと言いながら空を軽く押しのけて、窓の外を見やる。そして絶叫した。

「あー、リンコちゃんと坂木先輩じゃない」

「どわっ、びびった。何だよ、朝倉。うるせーよ」

「何だよって何よ。二人して何見てるかと思えば、リンコちゃんだったのね。はっはーん。二人の関係が気になるって訳か。いいわ教えてあげる。坂木先輩はリンコちゃんの幼馴染よ。まだ付き合っていないけど、時間の問題って気がするわね。高橋もリンコちゃんに気があるなら、今のうちにアプローチしときなさいよ」

言うだけ言つと、朝倉は空の背中を思い切り叩く。結構いい音がした。

「痛って、馬鹿力だな、朝倉。光に言つてやる」

「な、何よ。やめてよね。春名君に変な事言わないでよ。私の恋路邪魔したら呪ってやるからっ。分かったわね」

指を突きつけられて、空はたじたと壁に背を押し付けた。横で見ていた海が、笑いを堪えているのが視界の端に映る。笑ってないで助けるよバカ。

「なあ、朝倉。坂木先輩のこと何か知ってるか。あの二人って生物部なんやろ」

「へ？ うん。そうだけど。……何よ。紫藤までリンコちゃんに気があるわけ？ リンコちゃんってばモテモテね。あっそうか。敵の情報収集をしようって訳ね。いいわ、知ってる事は教えてあげる、教室に戻るまでね」

勝手に解釈して、朝倉はにっこり笑った。空は海を見たが、海は別段否定する気もないようだ。ただ呆れて言葉が出ないだけかも知れないが。

三人は教室に戻るべく階段を上る。朝倉が話し始めた。

「坂木先輩は学年一の秀才で、スポーツ万能。生徒会長と生物部の部長もやってて、しかもルックスは抜群。コレでモテないわけないよね。それなのに彼女はいないのよ。私、密かに坂木先輩はリンコちゃんのこと好きなんだと思ってるのよね。リンコちゃんのお父さんが亡くなったときも随分慰めていたし」

「え、飯田のお父さん亡くなってるのか」

驚いて聞いた空に、朝倉は頷いた。

「そうなの。リンコちゃん随分落ち込んで。リンコちゃんお父さん好きだったから。あの頃はホントに、リンコちゃんまで死んじゃうんじゃないかって心配したくらい。でも、坂木先輩がずっとリンコちゃんに付き添ってくれて、お父さんはリンコちゃんに笑っていてもらいたいはずだよ、なんて言って慰めてた。そのおかげか、リンコちゃんも次第に笑うようになって、一安心したもんよ。リンコちゃんが笑うようになったのは、先輩のおかげね」

「へー、いい人なんやな。先輩……」

「そう、いい男だしね。だからあんだ達、リンコちゃんをモノにしたいなら、先輩よりいい男にならなくちゃね。じゃ、そう言うことで」

教室が見えると、朝倉はパタパタと走って教室のドアの向こうへ消えていった。海は教科書を持った手で、頭を掻きながら言った。

「なんや、こつちが話す隙をあたえへんやつちな朝倉は。……俺すっかり飯田に惚れてることにされとる。空やあるまいし」

「おい、俺だつて別に飯田に惚れてるわけじゃねえつつうの」

「そりゃ、かわいいなとは思っけど。と、心の中で付け加えた。

「優等生で、やさしくて、人望もあつてつて、火の打ち所がないつてこのことやな」

不意に口調を改めて海が言つのを聞き、空も気持ちを変えた。

「うん、でも、そう言う奴に限つて、悪い事するじゃん。あとは光みたいに性格悪いとかさ」

「悪かつたな、性格悪くて」

不意に曲がり角の向こうから声が聞えて、空はゆっくりと振り向いた。

「あ、あはは、聞えてた？」

角から姿を現した光は、いつものポーカーフェイスだ。

「ああ。空は地声が大きいんだよ」

「悪かつたな」

「それより、大丈夫なんか？ 腕」

「ああ、たいしたことない。すぐ治るよ」

光がそう言つて軽く腕を振る。そうするとシャツの裾から白い包帯が見え隠れした。

「そつえば、お前、昼飯食いそなつたんじゃねー？ 今から購買行くか」

空がそう尋ねたのは、先ほどの調理実習で作った料理が、昼食を兼ねていたことを思い出したからだ。火傷を負ったせいで、光は食べ損ねているはずだ。

「ああ、それは平気。保健室に久保が持つて来てくれたから、さつき食べたよ」

「久保が？ マジかよ」

「ああ、僕が火傷したとき、久保がわざと熱湯かけたと思つたんだろつ？ でもあれはわざとじゃなかつたよ。たまたまぶつたただ

け。それなのに、久保は自分が悪かったって頭下げに来た」

「あいつも、根は悪い奴とちゃうからな。それにしても、光。久保が出て行ってから随分経つけど、そんなゆっくり食事しとったんか」

「いや、ちよつと職員室に寄って来たんだ」

「何しに行ったんだよ」

「ちよつと聞きたい事があつて。ここじゃなんだから、教室へ入ろう。座つて話したい」

光に促されるまま、空たちは昼休み中で、人気の少ない教室に足を踏み入れた。教室の入り口に一番近い海の席の周りに集る。海は自分の席に座り、空はその前の席。そして光は左隣の席に椅子を引いて座り、背もたれに肘を寄せた。

普段弁当のにおいが充満する昼休みの教室だが、今日は食べ物のにおいがしない。調理実習のおかげで、いつも弁当を食べ終えた後、机をつけて話しに花を咲かせている女子たちの姿もほとんど無かった。今は教室の隅に数人の女子が集まって会話しているだけだ。その中に朝倉もいる。

「職員室で、須波先生に話を聞いてきた」

「須波センセつて誰や」

空も聞き覚えがなかった名前なので、海と同じように光を見る。

光は白けた表情で、眼鏡を中指で押し上げた。

「あのな。お前を助けてくれた先生の名前だよ。階段落ちたとき、坂木先輩と一緒に前を運んでくれた先生が、須波先生。生活指導の先生だから見たことあるだろう。校門の前によく立ってるじゃないか」

空は言われて思い出した。朝たまにジャージ姿の、頭の禿げた先生が校門前に立っている。

「ああ、あのツルピカ先生か」

「ついそう口に出した。」

「あはは、ツルピカ先生って、ツルピカ先生、あははは、上手い事言つたな。空。最高や。あははははは」

笑い出した海を、光が軽く睨む。

「あのな、笑ってる場合じゃないんだよ」

「あー、へいへい。そうでした。分かりましたよ。で、その須波センセに何を聞きに行ったんや。階段落ちたときの事か」

「そう。先生と坂木先輩が海を見つけたときの状況を、出来るだけ詳しく聞きたかったんだ」

「へー、で、どうだった。何か分かったか」

空が聞くと光は軽く頷いた。空と海を交互に見て口を開く。

「あの日、先生は授業で使う物を忘れて、職員室に坂木先輩を連れて取りに戻ったんだ。そして、荷物を持って坂木先輩が職員室を出た直後……」

そこで一度言葉を切り、光は海を見た。つられて空も海に目を向ける。

「……お前の悲鳴が聞えた。先に職員室の外に出ていた坂木先輩が階段の方へ走っていったのを見て、先生も先輩を追って職員室を飛び出した。職員室から出て、階段のある渡り廊下に行く為に角を曲がった時、しゃがみ込んで階段を見上げている先輩と、先輩にかくれて倒れているお前の足が見えたそうだ」

「じゃあ、やっぱ、先輩は突き落としてないってことか。先輩は今の事件とは無関係ってことかな」

「それは、どうか。少なくとも先輩は、あの脅迫文が書かれた紙を海の制服のポケットに忍ばせることは出来たはずだ」

「んー、確かにそれは可能やろうけど、じゃあ俺を突き落とした奴と、教室を真つ赤にした犯人とは別やっちゅうことか」

海は顎に手をやって、考え込むような仕草をする。その海の顔を覗きこんだ空は、からかう口調で言った。

「おまえ、どつかで恨みでもかったんじゃないの？ 妙なギャグで教室寒くしやがってつかさ」

言葉の後半で背中を突き飛ばすようなジェスチャーをした空に、海は眉を顰めた。

「おいこら。俺がいつ、寒いギャグなんて言った？　俺のギャグはいつも大うけやん」

海の言い分に賛同する者はいなかった。空は思いつきり顔をしかめ、光は静かに首を横に振る。

「おまえら……　真実は時に人を傷つけるんやで、憶えとけよ」

海はどこか悄然と呟いた。そしてふと、何かに気を取られたように視線をずらす。

空はその視線が気になって海の目線を追う。その先には教室の隅でかたまつて談笑している女子達がいた。朝倉達がこちらを見ながらヒソヒソと話をしている。

「また見とるわ。なあ光、朝倉なんかかしいや」

唐突に海が言った。言われた光は意味が分からないというように、首を軽く傾げる。

「どういう意味だ」

「さっきな、朝倉にお前と間違われてん。後姿がそっくりなんやと」
海の言葉に意外そうに目を上げた光に、空はうんうんと頷いた。

「そうそう、朝倉の奴、すっげー可愛い声ではなくなるん、なんて海のこと呼んでたんだぜ。おまえも罪な男だよなあ」

そんな風にかかったのだが、光は空が予想したような反応を示さなかった。空としては恥ずかしがって欲しかったのだが、光は恥ずかしがるそぶりも見せずに考え込むような顔になった。

「僕と海の後姿がそっくり？　まあ、身長は似たようなもんだけど」
何かを考えるように目を伏せた光に、空は声をかける。

「なんだよ、似てるのが嫌なのか」

「いや、そうじゃなくて……」

どこか上の空で何かを考えているような光の反応に、空は海と目を合わせて肩を竦めあった。光がこういう反応を示している時は何を言っても、たいした返事は返ってこない。

話が途切れてちょうどいいタイミングで、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り始めた。空は光を促して、自分の席に戻る為に腰

を上げた。

第十二章 まさかの殺人？！

放課後である。掃除を終えた教室で、空は海と光を待っていた。海はこの間借りた包帯を返しに保健室へ、光は体育教師の高田に呼ばれて職員室へ行っている。

西日が入ってくる教室の自分の席で、二人が来るのをただ待っているだけなのはかなり退屈だ。どちらでもいいから、早く戻って来てくれないだろうか。

そんな事を考えた時、ドアが開く音を耳にした。ドアに背を向ける格好で座っていた空は、その音に海が光が戻ったのかと振り返る。だがそこにいたのは、飯田倫子だった。

「あ、高橋君一人？ めずらしいね」

少し小さな声で、飯田は空に話し掛けてきた。空は頷く。

「ああ、光と海待ってるんだけど、コレがなかなか戻ってこないんだよ」

「……いつの間にか、すっごく仲良くなったみたいね、春名君と。前は仲悪そうだったのに」

飯田が空の方に近づいてきた。飯田の席が空の右斜め前の席だからだろう。空は飯田の言葉に、光のことを何て偉そうで嫌な奴だと思っていた事を、思い出した。

「ああ、ま、色々あってさ。あつ、そうだ飯田。おまえ坂木先輩と仲良いんだって？ この間も廊下で話してたよな。先輩と」

そう言つと、忘れ物をしていたのか、机の中から教科書を取り出していた飯田が、手を止め振り返った。

「……幼馴染なの。だから色々頼っちゃって」

「へー、いいよな。生徒会長が幼馴染か。勉強とか教えてもらえそう」

「あはは、高橋君は春名君に教えてもらえばいいじゃない。頭いいでしょ。春名君」

「あーでも、同い年の奴に教えてもらうつてのも何か嫌だなーみたいなさ」

そう言つて頭を掻くと、飯田は少し目を見張つてから微笑んだ。

「結構プライド高いんだね。高橋君」

「そうでもないけどさ、なあ、坂木先輩つてどんな人？」

「……どうしてそんな事聞くの？」

そう問われて空は返答に窮した。幼馴染の飯田なら坂木先輩の裏の顔を知っているかもと、思いつきで聞いたただだったからだ。そのため返答はしどろもどろになる。

「え、えーとだからさ。あれだよ、ほら、坂木先輩は有名人じゃん。ただたんに好奇心だったんだけど。聞かないほうが良かったか」

「うつん、別に。皆が噂している通りの人だよ。優しくて、頭が良くてスポーツ万能。でも、ちよつと抜けてるところはあるかも。あの人結構天然入ってるから」

「え？ そうなの」

「この間も、ケータイとテレビのリモコン間違えて持つて来てたし」
飯田の言葉に空は噴出した。そんなベタなボケをかますような人だとは思わなかった。空が笑い出したので、飯田もつられるように笑った。二人して軽く笑ったあと、飯田は空に言った。

「今度は私の好奇心なんだけど、ウサギのこととか調べてたよね。犯人はもう分かった？」

空は返事に詰まった。まさか飯田に、君の幼馴染が犯人じゃないかと疑っている、告げる訳にもいかない。空はただ首を横に振るだけにしておく。

「そう。春名君とか、結構ウサギ好きでよく見に来てたでしょ。ウサギ好きの久保くんが、春名君を熱心に部に勧誘してたし。それがあんな事になつて、久保君はまだ春名君のこと疑っているみたいだし、心配だったの。でも、そっか、まだ犯人は分からないのかあ」
残念そうに呟く飯田の言葉に、空は驚いた。光がウサギ好きだった？ 光は一言もそんな事を言っていなかった。

だが待てよ、光は久保がカメ子とト口吉と言うのを聞いてすぐにウサギだと言いついていた。不思議に思ったものだが、よく見に行っていたなら話しは分かる。

「あ、じゃあ、私もういかなきゃ。下で有紀ちゃん待たしているの。またね」

「ああ」

飯田は少し速い歩調で、教室を出て行った。

飯田が教室を出て行ってしばらくすると、海と光が連れ立って教室に戻ってきた。その後少し教室で話しをしてから、空は二人と共に教室を出た。

階段を一階まで、他愛もない話をしながら下りる。一階についた。玄関に向かうため、職員室横を通り過ぎようとした時、空たちは職員室から出てきた理科教師に呼び止められた。

「お、わるい、お前達。第二理科室の鍵閉めてきてくれないか。終わったら鍵は職員室に持って来てくれたらいいから。頼んだぞ」

そう言うて理科教師は笑顔で職員室に戻って行った。鍵を手渡されてしまった空は不満げに頬を膨らませる。

「なんだよ。出てきたんなら自分で閉めにいけよな」

「第二理科室ついていたら、新校舎やんな。逆方向やんか。それに、鍵って用務員さんが閉めてくれるんやろ」

「違う。特別教室の鍵は担当の先生が閉める決まりだよ。ほら、文句言つてないで、さっさと済ませよう」

そう言うつと、光はさっさと歩き始める。さっさとといっても歩調はゆっくりだ。足が痛いのもかもしれない。空と海は光の隣を、並んで歩く。第二理科室は一階だ。階段を上らなくてよかったのがせめてもの救いか。これが第二音楽室だったら四階まで上がらなければならなかった。

渡り廊下を渡って、新校舎に移ると、その先に第二理科室が見えた。空は先行つて閉めてくると言うて第二理科室に向かって走り出す。人気がないせいか廊下に足音が大きく響いた。

理科室の前に着いた。ドアは開いている。空は何となく中を覗いた。中は暗かった。電気がついていないだけでなく、遮光カーテンが引かれているのだ。だがそのカーテンが一箇所だけひらひらと揺れている。風のせいだろう。どうやら、窓が開いているようだ。

「窓開いてるみたいだから、俺ちよつと閉めてくる」

そう言つて、空は理科室に足を踏み入れた。

遮光カーテンのせいで、かなり暗く視界が悪い。空はカーテンが揺れている場所を目指して歩く。動かないように設置された実験用の机に手をおきながら、ゆっくりと足を運ぶ。

揺れるカーテンばかり見ていたせいだろう。何かに足が引っかかつて、空はあつと声を上げてみごとに転んだ。何かを下敷きにしてしまったようだ。空はそろそろと床に手について体を起こす。

何かがこぼれていたのだろうか。手に液体がついて、空は思わずシャツに擦り付けた。その手を下へおろしたとき、手に何かがあたった。堅い感触。コレなんだろう。そう思つて、空は手にあたった物を掴んだ。その時、背後のドアから海が声をかけてきた。

「おい、大丈夫か？ 何こけてんねん」

「電気つけて行けば良かったんだ」

光はそう言つて、ドアの近くにある電気のスイッチを入れた。カチカチと何度か点滅し、蛍光灯が明るい光を教室に振りまいた。

空は明るさに目をつぶり、ゆっくりと瞼を開いた。そして、空は自分が手にしていた物を見て、絶叫した。

「うわぁー」

慌ててそれを放り出して、空は尻を床に着けたまま、手と足を使つて後ずさる。そして、空は見た。いや見てしまった。自分が何に躓いたのかを。もう一度大声で叫んだ空に、二人が近づいてくる気配がする。だが、振り向く事が出来ない。目の前のものから目が離せなかった。

息を飲む音がすぐ近くで聞えて、空はそちらを見上げる。傍らには海が立っていた。青ざめた顔で、空が見ていたものを凝視してい

る。

「黒田や……」

そう呟く声が擦れている。

海が驚くのも無理はない。そこにいたのは紛れもなく人。それもよく見知った顔の。空の前に倒れていたのは、担任教師の黒田、その人だった。

黒田は床に仰向けに倒れていた。腹部には赤黒い染みが広がっている。衣服をぬらしているものがペンキではない事は分かる。横たわる黒田の脇に、服のシミを作った原因である血液が、水溜りのようになっている。

「せ、先生……」

呼びかけて、空は震える手を黒田に伸ばす。手が黒田に触れる前に、その手を掴んだ者があった。

「やめろ、空。死んでる」

空の手を掴み、淡々とした口調で光は言った。

「し、し、死んでるって何で。そんなの、まだ分からないじゃないか」

光を見上げて言うと、光は首を横に振った。

「見たら分かるだろう」

そう言つて、光は空の手を離すと、黒田の脇に立った。黒田の顔を覗きこんで言う。

「瞳孔開いているし、これだけ出血したら、まず助からないよ」

「何で、何でそんな冷静なんだよ。し、死んでるなんて、ど、どうして」

「お前がさっき放り投げたそのナイフで、誰かが先生を刺したんだ」
光が言った通り、先ほど空が手にしていたのは、血の付いたナイフだった。空は先ほど放り捨てたナイフに視線を送る。ナイフは床を滑って、空から一メートル以上離れた位置に落ちていた。

「誰って、誰だよ」

空は光に問う。光は分からないというように首を横に振った。

「と、とりあえず、警察に電話したほうがええんか？ それとも先生呼ばか？ その前に救急車……」

「ああ、どうしよう。俺、思いつきり先生の上にのっかつちやたよ。あ、制服に血がついてる。ああ、もうどうしよう」

空の制服には擦り付けたような赤い後がある。先ほど手についた液体を、シャツで拭ったような気がする。あの液体は黒田の血だったのだ。

「とりあえず、先生に連絡して……」

光の言葉を遮るように、後方から声があがった。

「ひ、人殺し……」

その声に、空は慌てて振り返る。そこには空たちがずっと気にしていた人物がいた。

坂木だ。坂木はドアの縁を掴み、こちらを凝視している。

「先輩……」

光が少し驚いたように呟いた。坂木は、血の気の失せた顔を、廊下に向けた。

「誰か。誰か来てくれ、人が、人が死んでる」

坂木が叫んだ声に答えるかのように、こちらに向けて廊下を駆けてくる複数の足音が大きく校舎に響く。

まもなく教師達が数名、理科室に踏み込んできた。

そして、全員が黒田の死体を前に絶句した。

第十三章 犯人は誰だ？

第二理科室へ向かう途中の廊下に、立入禁止のテープが張り渡され、その前には人垣ができていた。まだ残っていた生徒達が野次馬と化していたのだ。

テープの内側では、警察関係者たちが所狭と立ち働いている。

事件現場となった第二理科室の隣の教室に、空たちはいた。事態を知った校長が慌てて警察を呼び、駆けつけた警察が関係者達をちよつど良いとばかりに理科室の隣で待機させているのだ。

教室の中では、殺人現場に駆けつけた教師数名と、坂木が壁にもたれるようにして立っている。そこから少し距離を置いて、空は椅子に座らされていた。その傍らには光と、海もいる。扉の前には警察官が一人立っていた。

「ああ、俺絶対犯人にされるよ」

頭を抱えた空に、光が声をかけた。

「それはないだろう。警察だってバカじゃないはずだ」

「でも、俺、凶器触っちゃったんだよ。暗かったからわかんなくて、つい。あのナイフ、俺の指紋ついてるし」

「……でも」

海が何か言いかけたとき、教室の扉が勢いよく開いた。

そこに現れたのはまだ若い男性だった。顔立ちが悪くなく、どちらかというと整っている。だが、着ているスーツはよれよれで、染めていない黒髪は中途半端に伸びていた。男は室内を見回して、頭を掻きながら口を開いた。

「あー皆さん。お待たせしました。一人ずつお話を窺いたいんで、呼ばれた方は隣の理科準備室へお願いします」

そして教師の一人が名指しされ、教室を後にする。その後しばらくして教師が戻ってくると、別の教師が呼ばれ教室を出て行く。そうこうしているうちに、いつの間にか呼ばれていないのは空たち三

人だけになった。今は坂木が別室で事情聴取を受けているはずだ。

空はどんどん不安になっていく。制服に着いた血液、自分の指紋が残ったナイフ。これだけあれば、自分が犯人にされてもおかしくはない。空は尋問される自分を思い浮かべ、体を震わせた。脳裏には黒田の空虚に見開かれた目が思い出される。

ガラガラと扉が開いて、坂木を伴った刑事が現れた。

「次、えーとその君」

海に肩を指でつつかれて、空は俯けていた顔を上げた。刑事に指名されたのはどうやら空だったようだ。どうしようかと、傍らに立つ光と海を交互に見る。

「あの、刑事さん」

「ん？ なんだい」

刑事は眠そうに目を細めて、呼びかけた光を見る。

「僕達三人、一緒ではダメでしょうか」

刑事は少し考えるそぶりをしながら、頭を掻いた。何故か視線を空に一度据えてから、頷いた。

「ああ、まあいいよ。三人一緒においで」

あっさりと刑事はそう言って手招いた。空は立ち上がり刑事の後ろについて行く。

少し埃臭い理科準備室には、壁をふさぐように棚が並べられていた。ただでさえ狭い部屋が余計に狭く見える。棚には何かよく分からない標本やホルマリン漬けの瓶が並べられていた。薬品の瓶が置かれた、鍵の付いた棚もある。

狭い部屋にイスを運んだのか、二脚の椅子が部屋の真ん中に対面するように並べられている。その一脚に年配の刑事が座っていた。

少し中年太り気味な男は、眉間に皺を寄せて若い刑事を睨む。

「おい、私市^{きさいち}。一人ずつって言っただろうが、何で三人も連れてくるんだ」

「まあ、まあ、良いじゃないですか。虻^{あぶ}さん。三人一緒にした方が、時間も短縮できますし」

「だがなあ……、ああつ、まあいい。とりあえず、えー、その、一番小さいの。こっち来て座って」

年配の刑事は手招きしながら空に向かってそう言った。空は刑事の物言いに少し腹を立てながらも、言われるままに、年配刑事の前に座った。

その時。ノックの音と共に理科室と準備室を繋ぐドアが開いた。

「あ、蛇さん。ちょっとすみません。寺坂さんが呼んでます」

「ちっまだ終わってないんだぞ。まあ、良いわ。おい、私市。お前やっつけ」

そう言つて、蛇さんと呼ばれた年配刑事は、呼びに来た刑事と一緒に部屋を出て行った。

「あー、じゃあ、事情聴取します」

私市と呼ばれた刑事はそう言つて、年配の刑事が座っていた椅子に腰掛けた。眠そうな顔で、懷から革張りのメモ帳を取り出す。

「えーと、まず、名前と学年教えてくれるかな」

そついいながら、刑事は一人一人に確認する様に顔を向ける。三人はそれぞれに名前と学年を答えた。

「君達が第一発見者だったようだね。ビックリしただろう。被害者は君達の担任の先生だったんだって？」

「はい」

「君達は、そもそもどうして理科室に来たのかな」

「加賀見先生に言われて、理科室の鍵を閉めに……」

空は自分たちに使いを頼んだ、先生の名前を告げる。そもそあの先生が鍵閉めなんて頼まなければ、こんな面倒ごとに巻き込まれずにすんだのに。

「加賀見先生つて？」

「生物の先生です」

答えたのは光だった。私市と呼ばれた刑事はフンフンと頷きながらメモを取っている。

「なるほど、君達はその加賀見先生に頼まれてこの理科室の鍵を閉

めにきたんだね。それで、該者を発見した、と」

「はい……」

空が力なく頷くと、私市はボールペンを振り回しながら尋ねた。

「じゃあ、その時の様子を詳しく話してくれないかな」

空たちは私市にその時の様子を話して聞かせた。時々私市がさむ質問にも素直に答える。もっと厳しく質問されるのかと思っていた空は、あっさりとした私市の反応に少し戸惑う。

「あの、俺、犯人にされませんよね」

恐々聞いた空に、私市は笑みを見せた。その笑みを見た空は安心する所か逆に不安になる。人を不安にさせる笑顔を見せた私市は、口を開いた。

「それは何とも言えないな。でも、それを言ったら君達全員容疑者にはなるしね。でも、心配する事ないよ。きちんと調べて、調べて調べ上げて、結論を出すからね」

「はあ……」

空は分かったような、分からないような気持ちで、頬を掻く。そんな反応を気のせいかもしれないが楽しげに見ていた私市は、視線を光に移した。

「えー、ここからは、刑事の質問とは別で個人的に聞きたいんだけど。君はオリンピックに出てたよね。スケートで」

笑顔で問いかけた私市を、空と海は睨んだ。余計な事を言いやがってと思っただけだが、光は気にした様子を見せなかった。

「そうです」

軽く頷いた光に、私市は持っていた手帳を背広の内ポケットにしまつと、光の前に立った。無理やり光の手をとって握る。

「いやー、嬉しいよ。こんなところでオリンピック選手と会う事が出来るなんてっ」

「……刑事さん。ミイハーですか？」

「ははは、よく言われるよ」

とげのある声で聞いた空に、私市は気を悪くする事もなく頷いた。

私市は光に笑顔を向ける。

「悪いんだけど、後でサインもらえないかな」

ずっずっしくそんなことまで言い出した私市に、空たちは呆れた。この刑事は場所をわきまえるって事を知らないのか。大人のくせに。「……幾つか、僕の質問に答えてくれるなら、書いてもいいですよサイン」

スケートをしていた事を言われるのを嫌っていた光の言葉とは思えず、空と海は光を見た。光はじつと刑事を見詰め、答えを待っている。

「うーん。そうだね。僕が答えられる事なら、構わないよ」

そう言って、私市はやつと握っていた光の手を離した。

「じゃあ、一つ目の質問です」

そう言って、光は眼鏡を中指で押し上げた。私市は何でも聞いてくれと言わんばかりに笑顔で頷く。

「僕たちが理科室に着いたとき、窓が一箇所だけ開いていました。そこに誰かが出入りした痕跡はありましたか」

私市は眠そうにしていた目を見開いた後、口元にニヤリと笑みを乗せた。

「なかったよ。少なくとも見た感じではね。あの窓枠や窓の棧にはかなり埃が溜まっていてね。例えば、そこから出ようとして手や足をかけたとしたら。その部分だけ埃がとれるだろう。それが全くなかった。あの高さにある窓から出ようと思ったら、どうやっても手と足をかけるしかないからね」

黙って聞いていた光は顎に手をやって考えるように床を見ていた。だが、やおら顔をあげると理科室と準備室を繋ぐ扉を指差した。

「では次の質問です。ここ、理科室と準備室を繋ぐ扉の鍵と、あつちの準備室と廊下を繋ぐ扉の鍵は閉まっていましたか」

この準備室は理科室と準備室を繋ぐドアと、準備室から直接廊下に出られる扉と出入り口が二つある。何故光はこんな事を聞いているのだろうか。空はそう思うのだが、今聞いてもうるさいと言われ

るのがおちだろつと、黙つて口をつぐむ事にする。

私市は親指を立てて理科室と準備室を繋ぐドアを示してから口を開いた。

「こつちのドアは鍵が閉まっていたけど、そつちのドアは開いてたよ」

今度も親指を使つて廊下側に通じる扉を指し示す。空たちは私市が指で示すたびに振り子の様に首を動かさなければならなかった。

「じゃあ、これで最後です。坂木先輩は刑事さんたちになんて説明していましたか」

この質問には私市は眉を顰めた。空は突っ込みすぎだろつと思つたが、忠告を口にする前に光が言った。

「言えませんか？」

「……この質問に答えなかったら、君からサインはもらえない？」

私市がそう聞く。空と海は顔を見合わせた。なぜ現役の選手でもない光のサインがそんなに欲しいのか。空と海は解らなかったのだ。

「ええ」

光が私市の質問に頷いたので、私市は仕方がないと言うように肩を竦めた。

「いいよ。教えよう。坂木先輩というのは生徒会長だと言っていた彼のことだよな」

私市は空たちが三人同時に頷いたのを見て、背広の内ポケットからまた黒革の手帳を取り出した。

「彼は生徒会の仕事を終えて、帰宅しようとしていたそうだ。この上の階に生徒会室があるんだろう？ ま、それで。帰ろうと一階に着いたとき、君達のうちの誰かがあげた悲鳴を聞いたらしいんだ」
その悲鳴を上げたのは俺だと思ふ。少し恥ずかしい。

「悲鳴はこの理科室の方から聞えたと思つた坂木君は、走つて理科室にたどり着いた。そして、服に赤い染みのついた高橋君と倒れている人を見て、君が人を殺したんだと思つたらしい」

「それで、ヒトゴロシつて叫んだんだ。先輩」

空は青い顔でそう叫んでいた坂木の姿を思い出す。光はまた顎に手を当てて何か考え込んでいる様子だったが、その手を下して口を開いた。目はまっすぐ私市を捉えている。

「坂木先輩は本当に走って理科室に來たって言ったんですか」

「ああ、確かだよ。彼は走って理科室まで來たと言っていた」
念を押した光に、生真面目に私市は答えてくれた。

「じゃあ今度色紙持って来るから、サインよろしく」

そう私市は言くと、空たちを廊下に通じるドアへと促した。これで質問は終わりだと言っように。

第十四章 犯人である可能性

このまま帰してくれたらいいなと思った空だったが、やはりそう甘くはなかった。空達は私市きさいちに連れられ、理科室の隣の教室へとまた戻る事になった。

私市が教室の扉を開くと、教室にいた人間がいつせいにこちらを見る。空はその視線を避けるように俯いた。

「刑事さん。いつまでここに居ないといけないんですか」

まず口を開いたのは坂木だった。その声に顔を向けると、坂木は眉間に皺をよせていた。

「まあ、そう言わず、もうしばらく待つてくれないかな」

穏やかに言った私市に、坂木はくつてかかる。

「僕はこの事件には関係ありません。そこの彼が犯人でしょう？制服に血がついているじゃないですか」

坂木はそう言うのと、空を指差した。空は身体を竦める。私市はそんな空の反応に苦笑いを浮かべ、坂木を見た。

「まあ、まあ。まだ調べは終わってないからね」

「でも、僕らは彼らより後から来たんですよ。僕達が先生を殺せるわけがないじゃないですか」

「だから、今それも含めて調べているんだよ、少し大人しくしてくれなにかい」

私市がくいさがる坂木に、面倒くさそうに答えた。だが、私市の言葉は坂木に余り通じていなかったようだ。

坂木は私市が取り合ってくれないと見ると、今度は空達に詰め寄った。

「おかしいじゃないか。君達の周りではかり妙なことが起きる。赤いペンキが撒かれたのも君達の教室。殺されたウサギ小屋には君の生徒手帳が落ちていた。それに今度は制服に血までつけて。もう犯人じゃないとは言い逃れできないぞ」

そう言つて空を睨む坂木に、空は言葉を返せない。そこに、私市が割つて入った。

「おい、ちよつと待つてくれ。赤いペンキに、ウサギ殺し？ 一体何の事だい」

この言葉に、教室にいた教師達が慌てたような顔をしたが、もう遅い。私市の言葉を受け、教室で起きた事件と、ウサギ小屋の事件を私市に話すことになった。

立つたままではなんだからと、教室にいた全員がイスに座る。

坂木はその後、我が意を得たとばかりに、二つの事件について語つた。私市はそれに頷いたり質問を挟んだりしながら、坂木の言葉を最後まで聞いた。

坂木が私市に話している間、空はどんどん自分達がふりになつていくような気がした。

教室の事件では光が犯人ではないかと噂になつているし、ウサギ小屋の事件では空の生徒手帳が落ちていた。空は体育教師の証言と、アレルギーの話をすれば、犯人から除外されそうだが、そうになると光が疑われてしまう。

それに今回の事件では、空の指紋のついた凶器のナイフがある。それを証拠として押し通されたら、どうすればよいのか。空には分からなかった。

「これだけ、彼らの周りで事件が起こっているんです。今回も彼らが犯人でしょう。大方、二つの事件の犯人であると先生に見破られ、先生を殺した。浅はかな行動ですが、そんなところでしょう」

「ふーむ。なるほどねえ」

納得するように私市は呟いた。空の不安がよりいっそう増す。

「ですから刑事さん。僕を調べても無駄ですよ。僕は急いでいるんです。もう帰ります」

言うだけいうと、坂木は立ち上がる。扉へ向かつて歩き始めた。「待つてください」

その背を呼び止めたのは、私市でも教師でもなく、光だった。

光は立ち上がった、口を開く。

「坂木先輩。僕は、今回の一連の事件。一番犯人である可能性が高いのは先輩、あなただと思います」

光は坂木の目を見つめながら、教室にいる全員が良く聞き取れる声で言った。坂木は黙って光を見返した。

「おい春名。勝手な憶測でものを言うんじゃない。坂木が犯人な訳がないだろう。坂木は生徒会長だぞ」

顔を真っ赤にして教師の一人が怒鳴った。空はそんな教師を見て、勝手な憶測を喋っていたのは、坂木じゃないかと思う。どうして坂木には言わないのだ。

「まあ、まあ。先生。坂木君の意見も聞いたんだ。彼の意見も聞いてあげましょうよ」

今にも立ち上がらんばかりの教師をなだめるように、私市が教師に声をかける。先ほどの眠そうな顔とは打って変わり、どこか楽しそうな表情だ。そんな私市に見つめられ、教師は居心地悪そうに、怒鳴った時に浮かした腰をおろした。

「さ、春名君。続きをどうぞ」

言われて、光は頷いた。教師から坂木へと視線を移す。

「では、教室の事件から。……僕がまず疑問に思ったのは、なくしたはずの鍵が何故教室に落ちていたかということです」

「それは、お前がなくしたとウソをついて隠し持っていたんだろう。みんなそう言ってる」

坂木が反論するように声を上げた。そんな坂木に、光は首を横に振って見せた。

「それはありえません。何故なら、鍵は教室の中で見つかったからです。それは先輩も知っていますよね。何せ、その鍵を見つけたのは先輩、あなたですから」

「どういう意味だ。僕は鍵を拾っただけだ。鍵を拾ったからといって何故僕が犯人になるというんだ。お前が教室にペンキをばら撒いた後、鍵を教室に捨てたんだろう」

「先輩の話しは矛盾しています。仮に僕が犯人で、教室にペンキをばら撒いた後、鍵を捨てて出て行ったなら。どうやって教室の鍵を閉めたんですか？先輩は知っていますよね。あの朝、事件が発覚するまで、教室の鍵が閉まっていたのを。そして、予備の鍵は用務員さんが持つていて使えなかったのを。僕が直接先輩にお話したんですから」

「……」

坂木は黙って、光を睨んだ。光は中指で眼鏡を押し上げると、また口を開いた。

「そこで僕は考えました。犯人はどうやって密室を作り上げたのか。でも、難しく考える必要はなかったんです。一番簡単にそれが出来るのは、鍵を拾った人物なんですから」

「……」

「犯人は教室にペンキを撒いた後、教室を出て、持っていた鍵で教室のドアを閉める。そして、翌日何食わぬ顔で、教室に鍵が落ちていたと見せかければいい……」

「確かに、そう言われれば僕が犯人のように聞えるな。だが、全て推論ばかりだ」

坂木が光の言葉の途中で口を出した。それを咎めるでもなく、光は頷いた。

「ええ。確かにそうです。でもそれは、先輩も同じでしょう？」

「……」

「次に、ウサギ小屋で、ウサギが殺された事件ですが。先輩は空を犯人のように言いました。でも、彼には犯行は不可能です。彼はアレルギーを持っていて、ウサギに近づく事さえ出来ないのですからそれに、彼の生徒手帳はウサギが殺される前日まで、僕が持っていたんです」

「なら、お前が犯人じゃないのか？」

坂木は光を指差した。その顔は心なしに青白い。

光はただ静かに首を横に振った。

「……僕は事件のあった後、一度ウサギ小屋を見に行きました。その時思っただけです。どうしてウサギ小屋の鍵は壊されているのに、飼育小屋のあるスペースへ入る入り口の鍵は壊されていないのだろうと……」

言われて、初めて空は気づいた。そうか。確かにそうだ。飯田に頼んでウサギ小屋を見に行った時、確か飯田は飼育スペースを囲むフェンスの扉の鍵を開けていた。そして、ウサギ小屋に入れるかと言う問いに、飯田はこう言った。ウサギ小屋の鍵は壊れているから入ろうと思えば入れると。

あの時はちつとも疑問に思わなかった。と、言うより、それがどうして疑問になるのか、空には分からなかった。聞きたいが、口を挟める雰囲気でもない。

「フェンスをよじ登って入ったんだろう」

投げやりな口調で、坂木が声を上げた。

「でも、そんな目立つようなこと犯人がするとは思えません。それに、ウサギ小屋の鍵を壊す道具があったなら、何故、フェンスの鍵も壊さなかったんでしょう」

「それは……」

「鍵を壊す必要がなかったから。そう考えれば、謎は解けます。犯人は少なくともフェンスの鍵を持っていた人物。それは三人に絞られます。生物部の部長をしていた先輩か、久保、そして……」

そこまで光が言った時だった。いきなり坂木が笑い出した。坂木を除く全員が呆気にとられた。教室中の視線が坂木に向けられる。

「ふ、はははは。……その通りだよ。春名。僕の負けだ。お前の言う通り、僕だよ。教室にペンキをばら撒いたのも、ウサギ殺しも。そして……黒田先生を殺したのも」

誰かの息を飲む音が聞えた。坂木の突然の告白に、教室中が静まり返った。

空はそっと光を見る。光は珍しく渋面を作っていた。

「おい、嘘だろう坂木。何だってお前が」

教師の一人が、その声をかけた。優秀な生徒として名が通っている坂木の告白が、信じられないのだろう。

「黒田先生が僕を脅したからですよ」

「何だつて？」

「黒田は僕を脅したんです。見つかったんですよ。ウサギを殺したところを。黒田を殺した理科室の窓から、飼育小屋へ行くフェンスが見えるんです。黒田は、僕がそのフェンスの入り口から飼育小屋の方へ入っていくの見て、早く帰るように注意しに来たんですよ。そして、見られてしまった。僕がウサギを殺している姿を」

「……そんな」

「黒田は言いました。学校にばらされたくなければ、金を持って来いって。一度は金を払ったけど、黒田はそれだけじゃ満足しなかった。また金をせびられて、思ったんですよ。このまま、一生コイツに金を払うことになるなんてまっぴらだつてね。だから、殺したんです」

「何てことだ」

教師は、そう呟くと顔を手で覆ってしまった。余程ショックだったのだろう。坂木はそんな教師から、光に視線を戻した。

「春名。お前は気づいていたんだろう。僕が黒田を殺したってことも。……どうして分かった？」

「……」

「答えるよ」

坂木に催促されて、光は一度目を閉じてから、口を開いた。

「先輩の、登場の仕方です」

「何だそれ？」

光の言葉に、それまで黙って聞いていた空は思わず口を挟んだ。しまったっと思って口を押さえたが、もう遅い。空は周囲の視線を一身に浴びるはめになった。

「空はおかしいと思わなかったか？ 先輩が叫ぶまで、坂木先輩が入り口にいた事に気づかなかったのを」

「え？ ぜんぜん」

空が正直に答えると、光の眉が一瞬上がった。あ、ちょっと怒ったかも。そう空が思ったとき、光は海に質問を移した。

「海は？」

「ああ、確かに。あれ？ って思ったような気はするわ。でも、何でやる」

海は首を捻る。空も同じように首を捻ってみるが、さっぱり分らない。

「足音」

光がそう呟いた。空が、えっと問い返す間も無く、海が声を上げた。

「そうか、足音。そうや。先輩に気づかんかったんわ、先輩の足音が聞えなかったからや。先生達が来るのは分かったもんな、足音で」
そう言われてみれば、そうかもしれない。空は思い出した。坂木の叫び声に答えるように、教師たちの足音が静かな校舎に響き渡るのを。

「……先輩は刑事さんにこう言っただそうですね。空の悲鳴を聞きつけて、走って理科室に向かったと。それを聞いて、やっぱりおかしいと思ったんですよ。走って来たなら、確実に僕達のうちの誰かの耳には入ってきますからね。それに、先輩は刑事さんにこうも言いました。黒田先生の死体と、空の服についている血を見て、空が犯人じゃないかと思ったと。でも僕らの背後にいた先輩には、黒田先生が倒れているところは見えなかったかも知れませんが、空の服についた血は見えなかったはずですよ。僕らは先輩の叫びに驚いて振り向いたんですから。先輩の証言は矛盾しています」

「……なるほどな。じゃあ、僕がどうやって、お前らに気づかれずに、教室の前まで来れたのか。それも分かるか？」

坂木がなお問う。光はよどみなく答えた。

「先輩が、僕達が行く直前まで理科室にいたからです」

「え？ でも、俺たち先輩見てないぞ」

空が疑問の声を上げた。それに、海も同意する。

「そうや。先輩が廊下に出てきたら、鉢合わせするやん」

「空、理科室の隣にあるのは？」

唐突に質問されて、空は良く考えもしないで、答えた。

「この教室？」

「ちやうちやう。理科室の隣は理科準備室や。さつき事情聴取受けたとこやんか……って、そうか。先輩は、理科準備室に隠れとったんや」

空につつこみを入れている途中で思いついたのだろう。言葉の後半はやけに興奮気味だ。そんな海に、光は頷いてみせる。

「あの時、空は走って理科室に向かった。さつきも行った通り、走ってくる足音はよく響くから、先輩は気づいたんでしょうね」

そう言いながら、光は坂木を見る。坂木は口元に笑みを乗せた。

「ああ。そうだ。誰かが走ってくる足音が聞えてきて焦ったよ。慌てて、鍵の開いていた理科準備室に隠れたんだ。そしたら、理科室に来たのが君達だと分かった。丁度いいからこれの罪も君達に被ってもらおうと思ったのに。上手くいかなかったな」

「先輩……」

光が何か言いかけた。だがそれを遮るように、坂木が口を開いた。「さつきも言っただけど、僕の負けだよ、春名。うまく騙せたと思っただけだな。結局、お前にばれたのは、全てボクの詰めのがんが原因だったってわけだ」

坂木が光から私市へと、顔を向けた。

「刑事さん。僕が犯人です。自首します」

そう言っただけで坂木は、私市の前に両手を差し出した。そんな坂木の肩に手を置いて、私市は扉の前に立っていた警官に声をかけた。

「おい、時間は？」

警官は慌てたように腕時計を見る。

「午後五時五十六分であります」

「よし、午後五時五十六分。自首。憶えといってくれよ」

私市は警官にそう言いおいて、坂木の背に手を添えると、教室の外へ向かうように促した。教室にいる全員が二人の背を見送るように視線を向ける。

その背に、光が声をかけた。

「先輩」

坂木はその声に足を止めた。ゆっくりと振り向く。

「海を突き落としたのは、誰ですか？」

その問いに、坂木は口元だけで笑んだ。

「さあな。足でも滑らせたんだろう？」

そう言ったあと、坂木は私市に断りをいれ、光のもとへ寄って来た。

光の耳に口を近づけて、何か囁く。すぐに光のもとから離れると、坂木は私市と一緒に教室を出て行った。

空はそつと光を見る。

光は何かを考え込むように、口元に手をあてて俯いていた。

第十五章 光の疑問

坂木が捕まった日の夜から、マスコミ関係者がこぞって学校の周りに集まってきた。その光景は全国ネットで配信され、空も家のテレビで見ることになった。

坂木の名前は未成年という事で伏せられていたが、学校名は公表されている。午後八時過ぎに学校から電話があつて、明日は休校になることが分かった。

結局三日間休校になり、四日目。空は久しぶりに教室に入った。教室はいつもよりどこかざわついており、話しの内容は事件についての憶測がおもだった。

「おつす、空。久しぶり」

海が空に話しかけた。空も挨拶を返す。

「おはよう、外すごいな。マスコミ？ すっごい取り囲まれたよ」

「おう、でも、下手に担任の死体見つけたなんて言うたらあかんで面倒なことになるからな」

「そんなの分かってるよ」

空は海に小声で囁かれ、同じように返した。

そのあと、教室内をぐるりと見回す。この三日間気にかかっていた事があつたからだ。

「飯田、来てないな」

「ぼそりと空が呟いた。海は頷く。」

「ああ。まだ見てへんな」

飯田は坂木先輩と仲が良かった。きっと今回の一連の事件全て、坂木先輩が起こしたと知らされて、ショックを受けているに違いない。

「あ、朝倉」

朝倉はちょうど今来たのだろう。鞆を手に提げて、空の横を通り

過ぎようとしていた。

「何？」

どこか暗い表情で朝倉は足を止めて、こちらを振り向いた。

「飯田、来てないみたいだけど、何か知らない」

「……リンコちゃんのお母さんから電話があつて、リンコちゃん具合悪いって部屋から出てこないんだって。……先輩が犯人だって、知らされてかなりショックだったみたいよ」

そう言つて朝倉は一つ溜息を吐いたあと、自分の席に向かった。

「朝倉もまいつとるみたいやな」

「うん」

空は海に頷くと、あいたままの飯田の机を見つめた。

「そつえば、光の姿も見てへんな」

「鞆があるから学校には来てると思うけど」

空が、海に答えて春名の机を見る。その時視界に、教室に入ってくる光の姿が映った。

「ほら、いた」

光を指差して、海に教える。海は空が指差した方を見ると、光に向かつて歩き出した。海は無言で光に近寄ると、いきなり光に抱きついた。

教室にいた女子達が、小さく声を上げる。

「光くん。会いたかったわー」

海お得意の女言葉が教室に響いた。近くにいた男子生徒からは、熱いねーなどと野次が飛ぶ。抱きつかれた光は相変わらずの無表情で、動きを止めていた。

「いやー。何やってるのー」

空の近くにいた女子の一人が、友達に向かつて囁く声が聞こえる。嫌とか言うわりに、嬉しそうじゃん。と、空は思う。男が男に抱きついてるだけなのに、何がそんなに楽しいのか。女子のそういう心理は、空には分からない。と、いうか分かりたくない。

「……海」

「ん？ 何や」

光の呼びかけに、海は笑顔で答えた。

「いい加減離れるよ。キモイから」

「んー。確かにな」

そう言つて、ようやく海は光を解放した。

海の奴、一体何がしたかつたんだろう。光が自分の席につくのを見計らつて、空は光と海のもとへ行く。光に朝の挨拶をしてから、海を見る。

「海、お前バカだろ」

「なんやと、誰がバカやねん。せめてアホって言えや」

「え？ バカよりアホの方がいいわけ？」

「おう。当たり前やん」

「つて、そんな話しに来たんじゃないんだよ」

「じゃ、何や？」

「お前、何がしたかつたの？」

空に聞かれて、海は一度ポカンとした顔をした。そして思いついたように、口を開く。

「ああ、光大丈夫かなあ思うて」

「思つて？」

「確かめたんや」

「……本当にバカだな」

光は海のことを聞いて、溜息交じりにそう言つた。それに対して、海はまた、バカいうなど、文句を言っている。

空はしばらく考えて、理解した。成る程、海は光が心配だったのだ。元気がどうか確かめるために光に抱きついた。抱きついた時、光がどんな反応を示すかで、光の今の状態を見極めようとしたのだらう。

しかし、他にも方法はあつたと思うのだが。

「あの、春名……」

躊躇いがちな声が空の耳を打った。声の方を振り返ると、クラス

メートの男子数名が集まっていた。いつも、光を無視していたはずの久保達だ。一体光に何のようだというのだろう。そう思って、空は思わずファイティングポーズをとる。

「なんだよ。久保。また光に嫌がらせしようっていうのか」

幾分強い調子で言った空を、少し見ただけで、久保は空から目を逸らした。久保は神妙な顔つきで、光を見る。

「あの、春名。俺たち、お前に謝りたくて」

「……」

光は無言で、久保達を見詰めている。久保は唾を飲み込んだ。

「今まで、ずっとお前がウサギ殺したと思ってたから、俺、お前のこと無視したり、嫌がらせしたり……。本当、後悔してるんだ」

「俺も」

久保の横にいた三宅が言った。久保達はそろって、光に向かって頭を下げる。

「ごめん」

「ごめん、ごめんと、それぞれがそれぞれのタイミングで謝る。頭は下げたまままだ。謝罪の声が大きかったせいで、教室中の視線がこちらを向いていた。」

さて、光は何と答えるのだろうか。空はファイティングポーズをとり、黙って事の成り行きを見守る事にした。

「……別にいいよ。気にしてないから」

その声に久保達は恐る恐るという感じで、下げていた頭を上げた。「本当に？」

「ああ」

肯定を聞いて、久保達の顔に安堵が浮かぶ。だが、その中で一人、三宅が冴えない表情のまま久保を肘で突いた。

「おい、あれも謝るんじゃないのか」

「あ、そうか。あの、春名。俺たちもう一つ謝る事があるんだけど」「分かった、アレだろう。黒板の落書き」

空は大きな声でそう言った。久保達の顔を見れば凶星だった事が

解る。

「あの、そうなんだ。あれも俺たちだったんだ。本当にゴメン」

「またも謝罪の言葉を口にした久保達を見つめて、光は口を開いた。
「知ってたよ」

「へ？」

「僕は、記憶力がいいんだよね」

「はあ……」

突然自慢しだした光に、久保達は呆氣にとられたように頷いた。

「何度か一緒に勉強しただろう？ その時お前らの筆跡憶えたんだよ」

「え？」

「筆跡、憶えてたんだよ。だから黒板に誰が何を書いたのかも憶えてるよ」

そう言つて光は口元だけで笑んだ。近くで見ていた空はもちろん、聞き耳を立てていたクラスメート達も思っただろう。

こいつ恐いと。

久保達を見ると、皆、心なしか顔色が悪い。きつと光を敵に回した事を後悔しているに違いない。久保がしばらくして口を開いた。

「あの、冗談……だよな」

「言おうか？ 誰が何書いたか」

光の言葉に、慌てて久保達は辞退した。空は、そんな久保達に、ずつと疑問に思っていたことを聞く。

「あのさ、黒板のイタズラ書きの中に、人殺してあったけど、あれってウサギのこと書いてたのか？」

空の言葉に、久保達は顔を見合わせた。お前書いた？ などと言いつ合っていたが、結局誰も書いていないという結論に至る。

「あ、思い出した。アレだよ。アレはもともと書いてあったんだよ」
「どういうことやねん」

海が聞くと、三宅が答えた。

「高橋が言ってるのって、名前の下に書いてあったやつだろ？ あ

れ、俺たちが教室に来た時にはもう書いてあつて、それ見て俺たち
いたずら書きすること思いついたんだよな」

三宅の言葉に、久保も頷く。

「そうそう。確かになんで人殺し？ とか思つたけど、その時はそ
んな気にしなかったな……あの、本当にごめんな、春名」

光が見ている事に気づいた久保は、また謝つた。光はそれに頷い
た。

「じゃあ、誰が書いたんやろうな」

海の独白に、全員が首を傾げた。

放課後。空は光と海と並んで教室を出た。外にはまだカメラマン
や、リポーターが待ち構えていて、教師からはくれぐれも彼らの相
手をしないようにと嚴重に注意された。

階段を下りながら、空は口を開く。

「それにしても、久保達の顔。あれ本気で恐がつてたよな」

「ああ、ホンマに。俺もちよつと怖かったもん」

「なあ、光。あれ本気で、憶えてんの？ 誰が何書いたか」

「……」

空の問いに、光はいくら待っても答えなかった。光は心ここにあ
らずといった表情である。

「おい、光つてば」

大きな声で呼びかけると、光はようやく空の声に気づいたように、
俯けていた顔を上げた。

「え？ 何。何か言つた？」

「何か言つたつて……」

「何か気になることでもあるんか？」

海の問いに、光は少し渋い顔をする。

「本当に、先輩が犯人だったのかなつて考えてた」

「へ？　だつてそう言い出したのお前だろう」

驚いて問う空に、光は心なし苦い表情で答える。

「動機が解らない」

「へ？　先輩言つてたじゃないか。黒田に脅されたから殺したつて」
「そつちじゃないよ。教室の事件とウサギの事件の方。それに、どうして僕らの周りばかり事件が起きたのかも氣になつてて」

「もしかして、光。お前自分が狙われてたなんていうんじゃないだろうな。それは自意識過剰つてもんだぞ」

「そうかな……」

空の言葉に光はまた考え込むような顔をする。その横で、海が急に声を上げた。

「あ。そういえば、光に聞こうと思つとつたことがあるんやつた」
「何？」

「坂木先輩が刑事さんに連れて行かれる前、光に何か言つてつたやろ。氣になつててん。あれ先輩、何を言つとつたんや？」

海の言葉に、光はすぐに答えを返した。

「氣をつけるつて言われただけだよ」

「何を氣をつけんの？」

「さあ……」

「分からなかつたら氣をつけようがないじゃん」

そう言う空に、光は頷きをかえした。そのあと、海を見る。

「そつちいえば、海を突き落としたのが誰だつたのかも、結局聞けなかつたな」

「ああ。そういえばそうやけど。アレは俺の勘違いかも知れへんし。なんかそんな氣がしてきたわ」

「でも、あの時はお前絶対に突き落とされたつて喚いてたじゃん」
空がつつこむと海は口を突き出した。

「うるさいな。時間が経つとあやふやになるんや。しゃあないやん」
階段を下りきつて、空たちは下駄箱へと向う。空はさつさと靴を履き替えた。ふと光を見ると、光が外履きを手にしたまま動きを止

めている。

「どうした」

尋ねると、今気づいたように、光は靴を一度下に置くと、もう一度下駄箱に手を伸ばした。

そして何かを取り出す。それは白い封筒のように見えた。

「あ、それって、もしかしてラブレター」

空は光が持っているものを目にして声を上げた。

「うるさい」

光はそれだけ言うと、興味深げに覗こうとする二人の視線を避け、手紙を開くと読み始めた。

しばらくして光は折り目通りに便箋を折ると、封筒に戻してそれを空に向かって放った。

空は慌てて封筒を受け取る。

「何すんだよ」

「やる」

「はあ？ 何がやるだよ」

訝る空を無視して、光は海に視線を向けた。

「悪いけど、用を思い出したんだ。先に帰ってもいいし、待っていても構わないけど、どうする」

「え？ まあ、待つとってもええけど。用って何や」

「っていうかコレ、俺にどうしろつつうんだよ」

空が口を挟む。光は白い封筒に視線を向けた。

「十分たつて僕が戻らなかつたら見ていいよ。見たくなかつたら捨ててくれ。じゃあ、行って来る」

そう言うとき光は一度出した靴をまた靴箱に仕舞う。そして空と海に軽く手を振ると、さっき下りてきた階段をまた上っていった。

二人は光の背が見えなくなるまで見送った。

「とりあえず十分は待つとくか？」

「ああ、そうするか」

「じゃあ食堂行こうや。何か飲みながら待つところ」

そう言つて二人は食堂へと足を向けた。

空たちと別れた光は、屋上へと向かつていた。ゆっくりと階段を上る。普段滅多に足を運ばない屋上へと続く階段は、掃除が余りされていないのだらう。うつすらと埃が積もっている。光は手すりに掴まり、一度足を止めた。

息を吐くと身体を屈めて痛む足をさする。たったコレだけ階段を上っただけで、酷く疲れた気がするのも、全てこの足に怪我を負つたせいだ。

そう何もかもこの怪我のせい、否、あの事故のせいだったのだ。それがあの手紙でやっと解つた。今度の事件の真相が知りたければ屋上に来るように。手紙にはそんな簡単な内容しか書かれていなかった。だが差出人の名が重要だったのだ。

そしてその名を見たとき、光はあの一連の事件全て、坂木がやったのではない事を確信したのだった。

屋上へと続く扉が見えている。光はまた足を動かしてゆっくりと階段を上りきつた。

屋上へと続く扉は、うつすらと開いている。そこから明るい日の光が、廊下に細い線を作っていた。

光はドアノブに手を伸ばした。ノブを掴み外側に開く。薄暗い階段を上ってきたせいだらう。明るさに反射的に目を眇め、ゆっくりと瞼を開いた。

その目に入ってきたのは光を呼び出した者の姿だった。

光が呼び出しに応じて屋上へと向かった、そのちょうど一時間前。私市は刑事課に向う途中で、少女と同僚の若い刑事が言い争っている姿を見つけた。

可愛らしい少女だ。どこか見覚えのある制服を着ている。

「ああ、清秀高校の生徒さんだね」

声をかけると、少女と若い刑事がこちらを向いた。若い刑事はどこか安心したような顔をして口を開く。

「そうなんですよ。あの例の事件で捕まった生徒に逢わせろって聞かないんですよ、この子。私市さん、変わってもらえませんか。俺急いでるんですよ」

私市は鷹揚に頷いて、嬉しそうな顔で踵を返した後輩の背を見つめた。

「あの、どうしても逢えませんか？ 先輩に」

恐々と呟かれた声にはっとして、私市は目線を下ろした。背の低い少女のつむじが見える。そのつむじを見ながら私市は答えた。

「うん。ゴメンね。まだ取調べ中だし、家族とも面会は出来ない。規則でね」

出来るだけ優しく聞えるように告げると、少女の溜息が聞えた。

少女は顔を上げて、大きな目で私市を見上げた。

「じゃあ、コレだけ先輩に伝えてもらいたいです。今日で終わりにするから、安心してと」

「今日で終わりにするから安心して？ どういう意味だい」

内心首を傾げながら問うが、少女は必死で私市を見つめてくる。

今度は私市が溜息を吐く番だった。

「いいよ、それだけで良いんだね」

少女は頷いた。頷いた拍子に長く伸ばした髪が揺れる。

「はい。よろしく願います」

そう言っただけで踵を返しかけた少女に、私市は慌てて声をかけた。

「あ、君名前は？ 彼に誰からと伝えれば良い」

「ノリコからと伝えてください。じゃあ」

そう言っただけで少女は私市に背を向け歩き出した。私市はそんな少女の背を、見えなくなるまで見送った。

どこか寂しげに見えるな。何となくそう思った。

第十六章 告白

屋上の扉を開け、辺りを見渡す。そして、そこにいた人物に目をとめた。

光はその人物に声をかける。

「やっぱり君だったんだね。飯田さん」

少女は薄く笑った。長い髪が風で揺れる。

「いや、長瀬倫子さんながせのりこと言ったほうがいいのかな」

光はドアの外へ出た。日に日に暑くなつて来る気候だが、屋上の風は思いのほか冷たかった。飯田は光が近づいて来るのを待つ様にじっとしている。そして光が立ち止まると飯田は口を開いた。

「最初から私だって気づいてた口ぶりね。春名君」

「いや。……君がコーチの娘だつて気づいたのは、さっき靴箱の中にあつた手紙を見てからだよ。倫子のりこという名は他に知り合いがいな

い」

手紙にあつた差出人の名は、長瀬倫子だった。

長瀬……それは光の忘れる事の出来ない人物の苗字。

死んだコーチの苗字だった。そしてその娘の名はノリコ。あだ名はノンちゃん。

どうして気づかなかつたのだろう。

どうして、気づけなかつたのだろう。

一度、たつた一度だけ、彼女と会つたことがあるのに。

彼女は黒板にメッセージを残していた。

自分を人殺しと呼ぶ人物は一人しかない。

自分が殺したも同然の、コーチの娘である彼女しか……。

それなのに……。

「何だ。やっぱり気づいてなかつたんだ。あなた、お葬式の時も私の顔見なかつたものね。憶えてるわけがないわよね。私との約束だつて、忘れていたくらいなもの。あなたは」

非難の声を上げて、飯田は一度唇を咬んだ。

「約束したのに、もう一度オリンピックピックへ行くって約束したのに。お父さんの最後の願いだったのに。……あなたは、スケートが嫌いだってだけでお父さんとの約束を破ったのよ。あなたはただの我がまま、お父さんの最後の願いを裏切ったのよ！」

後半は叫びに近かった。

光は飯田を眼鏡奥から見つめて、静かに口を開く。

「僕が憎かった？ 僕を困らせたかった？ だから教室にペンキを撒いたり、ウサギを殺したりしたの？」

「そうよ、先輩じゃない。私がやったのよ。先輩は私を庇っただけ、私はあなたが許せなかった」

「……」

「だから、有紀ちゃんが失くした鍵を見つけた時。教室にペンキを撒く事を思いついたの。あなたが有紀ちゃんを庇っていたのを知っていたから、教室に悪戯すれば、あなたの責任になると思ったのよ」

「鍵は？ どうして先輩が持ってたんだ」

「私が鍵を捨てるところを先輩に見られていたの。先輩はそれ拾って、翌日学校で私に返そうとした。でも……」

「教室にペンキが撒かれているのを見た」

「そう。それで先輩は、鍵を自分が今教室で拾った様に見せかけた。先輩には解ったのよ。犯人が誰か」

そう言っただけ飯田は一度言葉を切った。一際強い風が二人の間を吹きぬけていく。飯田は髪とスカートを手で押さえ、それをやり過ぎた。

「でも先輩は誰にもそのことを言わなかった。私があなたを恨んでいる事を知っていたから、私に同情してくれた。私は先輩の優しさに感謝したけど、先輩のやめろって言葉は聞けなかった。あなたは事件のあった後も平然として、先生の追及もあっさりかわしてた。あの事件であなたを苦しめる事は出来なかったって、分かったから」

「だからウサギを殺したの？」

溜息混じりの光の問いかけに、飯田は素直に頷いた。しつかりと光を目に捉え、睨みつけるようにして話す。

「そうよ。あなたがよくウサギを見に来ていたこと知ってたから、このウサギを殺せば、きつとあなたを苦しめる事が出来るって、そう思ったの」

「……先輩が僕のポケットから生徒手帳を盗んだのは、君が頼んだから？」

飯田はその問いに首を横に振る。次々と明かされる真実は、手紙を見たときに気づいた光の考えを全て裏づけていく。

「いいえ。先輩は私がまた何かした時に、あなたに犯人になつてもらおうとしたの。そうすれば、私の復讐が終わると思ったのよ、先輩は。でもあの人、頭良いくせにどこか抜けていて。間違つてあなたのじゃなく、高橋君の生徒手帳を盗んでいたの」

そのせいで、空は疑われる事になったのだ。高橋君には悪い事をしたわと、飯田は淡々と告げた。

「先輩は君の犯行をいつ知ったんだ」

「……お母さんが、私が家に帰らないって先輩に連絡を取ったらしいの。それで、先輩は学校に捜しに来て……」

「ウサギ小屋で君を見つけたのか」

「そうよ。先輩は自分にいい考えがあるからって、私を先に帰らせた。その後、高橋君の生徒手帳をウサギ小屋に置いて、小屋を出たの。そしてその時、黒田に見つかった」

飯田は憎々しげに黒田の名を吐き捨てた。顔を怒りに染めて言葉を続ける。

「黒田は、アイツは教師のくせに先輩を強請つたのよ。最低よあんな奴。先輩が金持ちじゃなかったら、さっさと学校にばらしていたに違いないわ。そう言う奴だったのよ、アイツは」

「君はどうして先輩が強請られていると知ったんだ」

「先輩の様子がおかしかったから。調理実習のあった日に問い詰めたのよ。そしたら、黒田に強請られてるって言うじゃない。私は頭

にきた。先輩があの日も黒田に呼び出されていると知って、先輩が黒田に会う前に、黒田が待っている理科室に足を運んだの」

そこで息をついて、飯田は少し笑みを口に乗せた。その笑みは陰惨なひかりをはらんでいた。

「あいつ、最初は何故私が来たのか分からなかったみたいだったわ。好都合だった。私はウサギを殺したナイフで、今度はアイツを刺した。先輩を苦しめたあいつを、殺してやったのよ。優しい先輩を苦しめたんだもの。あいつは死んで当然だったのよ」

「……先輩は君を庇って自首したんだよ。それは知ってるだろう」
光は思い出していた。先輩が、自分が犯人だと告白したあのタイミング。ずっとおかしいと思っていたのだ。あの時、光はウサギ小屋の鍵を持っている人物が犯人である可能性が高いと言った。そして、先輩は光が飯田の名を上げようとしたときに、それを遮って自分が犯人だと告白したのだ。

その時からずっとおかしいと思っていた。少なくとも、ウサギを殺したのは飯田なのではないかと、あの時から疑っていた。

光は少し目を閉じた。そして瞼を開くと、また飯田に視線を向けた。

「先輩が私を庇って自首したのは知ってるわ。私を理科室から逃がしてくれたのは先輩だもの。先輩が私を庇ってくれるのは解っていたのよ。本当はそんな事してもらいたくなかったけど。でも、私にはまだ、やる事があるから」

そう言つて飯田は一度言葉を切った。スカートのポケットにゆつくりと手を入れる。

「なんだか解る？」

先ほどまで怒りに歪んでいた飯田の顔が、どこか緊張したものへと変わった。緊張しているのに無理に笑っているような歪な表情。

「解らないの？」

語尾を上げて尋ねた飯田の声は、冷たく乾いている。

「こうすれば、解ってもらえる？」

そう言つて飯田はゆつくりとポケットに突っ込んでいた手を引き抜いた。手にした物を胸の辺りまでかかげ、折りたたみ式のそれを開いた。開く時にきらりとひかりが反射する。

飯田は手にした、折りたたみ式ナイフの切っ先を、光に向けた。

「……」

「私許せないのよ、あなたが。私のお父さんを奪つたくせに。最後の最後まで、目の前の私よりあなたを心配したお父さんを裏切ったあなたが。心底許せないのよ」

「……飯田」

「どうしてよ！ どうしてなの？ どうしてあなたが生きて、お父さんが死ななきゃならなかったの？ あなたが死ねばよかったのよ。お父さんは何も悪くないのに。私のお父さんなのに。あなたは私からお父さんも、お父さんの夢も……何もかも全部奪つたのよ」

「……」

「死んでよ。スケートをしないあなたに、何の価値があるっていうのよ」

飯田はそう叫んだ。泣き出したいのを堪えている表情で。手にしたナイフが揺れている。飯田が震えているのだ。怒りか、悲しみか、それともそのどちらもなのか。感情が抑えきれずに腕が振るえている。

光にはそう見えた。

「ねえ知ってる？ 人間って、簡単に死ぬのよ」

光はその問いに自然と強張っていた体をほぐすように動いた。無意識にシャツを掴んでいた手をゆつくりと開く。

「知ってるよ」

答えた光の声は細く、飯田の耳には届かなかった。

光を待つために食堂へ行った空と海は、既に飲みきって中身の無

くなった紙コップを片手に、暇を持て余していた。

「そろそろ十分経つし、いつかい玄関戻ろうや」

海が空にそう話し掛けて立ち上がったのに、空も倣う。空は紙コップを食堂の出入り口近くにあるゴミ箱に捨てた。

「光、いるかな」

「どうやら。長引くかもみたいな話し振りやったからな」

海の言葉に頷いて、空は先ほど光から渡された封筒を、ポケットから取り出した。それを海に示しながら口を開く。

「なあ、コレどうしようか。見てもいいって言ってたけど」

「うーん。でもなあ」

そんな会話を交わしながら、廊下の角を曲がった時、空は誰かとおもいきりよくぶつかった。

「うわっ」

「きゃ」

空は尻餅をつかなかったが、ぶつかった相手は尻餅をついていた。大丈夫かと声をかけながら、海がその相手に手を差し出す。

「痛ったい。でも、大丈夫。あーあ。教科書ばら撒いちゃった」

そう声を上げたのはクラスメートの朝倉だった。海に助け起こしてもらった朝倉は、ぶつかった勢いで鞆から飛び出した教科書やノートを拾い始めた。

我に返った空も、一緒に拾い始める。空は近くにあった教科書をあらかた拾い終わると、他に落ちてないかと目線を上げた。少し離れたところにノートが一冊落ちていた。空はそれを拾い上げた。

緑色の表紙には要点ノートと記されており、その表紙の右下にはイニシャルが書かれていた。

「N・I？」

空は朝倉のもとへ戻ると、拾った教科書やノートを数冊朝倉へ渡した。そして最後に拾ったノートを見せて口を開く。

「なあ、朝倉。コレもお前の？」

「え？」

「イニシャルが書いてあるけど、お前のイニシャルじゃないよな」
そう言って朝倉に手渡したノートを、海は覗き込む。

「N・I? 朝倉やったら、ユキ・アサクラで、Y・Aやんな」

海が言うのに、空もそうだろうと頷く。朝倉は一人笑顔で、声を発した。

「やだ、コレはリンコちゃんに借りたのよ」

「え? リンコちゃんて飯田やろ? 飯田リンコやったら、R・Iやろ」

海の言葉に、朝倉は顔を顰めた。

「ちよつと、紫藤。リンコはあだ名よ、あだ名。本名はイイダ、ノリコ。倫子の字がリンコって読めるからそう呼ばれてるの」

そう言って朝倉はパタパタとノートを叩くと鞆にしまった。

「へー。知らなかった」

「アンタまで。高橋はリンコちゃんに惚れてるんじゃないの」

「な、違うつつの」

そりや可愛いとは思ってるけど、好きとかそう言うことじゃなくてと、空は心の中で一人焦っている。

その様子に感心が無いのか、何かを考えている風に押し黙っていた海が口を開く。

「なあ、飯田の親父さん。死んだって言っとったよな。何年前や」

「去年よ」

何でそんな事聞くのだといわんばかりに、不審気な顔をした朝倉が答える。だが、海は気づいていないのか、なおも問いを重ねた。

「じゃあ朝倉。飯田つてもしかして、親にノンちゃんって呼ばれてへんかったか」

この問いに、朝倉は軽く目を見張った。

「どうして知ってるのよ」

空も普段の様子と違う海に、戸惑いの視線を向ける。

「朝倉、あと一つだけ。飯田の両親って離婚してる? 飯田の前は長瀬って苗字やったんちゃうか」

「……そうよ。どうやって調べたの？」

一層不審気に海を見る朝倉に、空は言った。

「おい、朝倉。急いでたんじゃなかったのか」

そう言つと、朝倉はあつと声を上げた。

「そうよ。大変。行かないと。悪いわね、紫藤。もう行くわ」

そう言つて朝倉は廊下を走つて行つた。また、誰かとぶつからなければ良いのだが。

「空、俺大変な事に気づいてもうたかもしれん」

「はあ？」

深刻な表情で言う海を、空は軽く見上げる。海は硬い表情のまま口を開いた。

「長瀬つて、光がスケートやつてた時の、コーチの名前や。あの死んだ……」

「ああ、聞いた事ある名前だと……つて、じゃあ、飯田つてもしかしてそのコーチの娘？ あだ名ものんちゃんで合つてるし」

目を見開いて大声を上げた空の耳に、携帯電話の着信音が聞えてきた。空は携帯電話を持つていない。この付近には空たち二人しかないなので、おのずとその携帯電話の持ち主は分かる。海は鞆からストラップを引っ張つて携帯電話を取りだすと、耳に当てた。

「はい？ ああ、こんにちは」

空は聞き耳を立てるのも不味いかと、海から距離をとろうと動き出した。だが海は、その手を掴んで引き止めた。

「本当ですか？ それ。いえ、今は俺らと一緒にはいりません。はい、捜します。じゃあ」

そう言つて通話を切ると、海は空に言った。

「なあ、さっきの手紙持つてるよな、見せ」

鬼気迫る様に言われ、空は頷く。封の開いていた封筒から、手紙を取り出した。

「何だよコレ」

空は手紙の内容を眼にして、少なからず驚いた。

『今度の事件の真相を知りたければ屋上へ来て。長瀬倫子』

「長瀬つて、え？ 飯田の事だよな。名前倫子だし、さっきそう言っただし」

動転している空の肩に手を置いて、海は言った。

「とりあえず屋上や、空。今の電話の内容も含めて走りながら話す」
「解った」

空は頷くとこんがらがっている頭を静めようと一度大きく息を吐いた。

そして、海に続いて屋上へと続く階段を目指して走り出した。

第十七章 大事なモノ

「あなたが死ねばよかったのよ」

扉の外から、少女の叫びに似た声が聞こえた。ドアノブに手をかけて、今まさにドアを開こうとしていた空は、動きを止めた。

「コレ飯田の声か？」

傍らの海を軽く見上げると、海は頷いた。

「多分な。私市刑事の話しによるとそうやろうな。坂木先輩が、飯田が光を殺そうとしてるって言ったそうやから」

「まだ信じられねえよ」

空は呟いた。先ほど海にかかってきた電話は、私市刑事からの物だった。いつの間にかこの二人がアドレスを交換していたのか知らないが、この電話が無ければ、こうしてこの場に駆けつける事もできなかったのだ。

私市は海にこう言った。飯田倫子と言う少女が光を殺そうとしている。気をつけろと。私市は今こちらへ向かっているのだという。

「良かった。まだ生きとる見たいやな。光は」

海はそつとドアの隙間から外を覗いていた。その肩に手をかけ空もその上から背伸びして外を覗く。飯田が確かにいた。何かを身体の前で構えている。それが反射してひかりを発した時、空はそれがナイフだと知った。その切っ先は惑うことなく光に向いている。

「早く止めなきゃ」

そう言つて、動こうとした空を海が止めた。見下ろした空に、海は首を振ってみせる。

「今下手に動いてみい、飯田を刺激する事になる」

「でも……」

「とりあえず、ここで見とこう。飯田が隙を見せたら飛び出したらええねん」

「……分かった」

本当は今にも飛び出したかったが、空は海が言うことももつと
だと思い、言葉を飲み込んだ。

二人が会話している間にも、飯田と光は緊迫した雰囲気をもし
出している。

光に向かって怒鳴る飯田の言葉を、光はじつと聞いているようだ
った。

「ねえ知ってる？ 人間って簡単に死ぬのよ」

そう言っただけ飯田は動いた。光に向かって一目散に走り出す。

「あいつ、何やってんだよ」

空はそう呟いて、ドアを思い切りよく開けた。ドアは勢いよく開
いて壁に当たる。大きな音が屋上に響いた。

その音に驚いたように、飯田は動きを止めて振り返る。光もち
らに顔を向けた。

空は飯田ではなく、光を睨んだ。

「おい、光。お前なんで逃げないんだ」

空は怒り任せに怒鳴った。光は恐れた風も無く、腕を組んで聞き
返した。

「どうして逃げなきゃならないんだ」

どうして逃げなきゃならないだつて？ 空はその返事に驚くと同
時に、またも怒りがつのるのを感じる。

「どうしてだつて？ そのまま突っ立ってたらお前飯田に刺されて
たぞ。それでもいいのかよ」

光を睨みつけて空は言った。

光は淡々と返した。

「いいんだよ。それで」

「なんで……」

そう聞いたのは空でも海でもなく、飯田だった。飯田は光から五
歩分ほどの距離を置いて立ち止まっていた。手にはまだナイフが握
られている。

空から飯田に顔を向けて、光は口を開く。

「君が言ったんじゃないか。僕には生きている価値が無いって。その通りだよ。僕もずっとそう思ってた」

「……」

その言葉に、誰も返す言葉が無い様に押し黙った。飯田でさえ動く事を忘れたように、つつ立ったままだ。

「……どうして、生き残ったのが僕だったんだろう。君の言う通りだよ、飯田。あの事故の時、死ななければならなかったのは僕の方だったんだ。コーチは僕をかばって、死んではいけなかった」

目を伏せて、光は言葉を切った。少しずつ西に傾いていく太陽が、一度雲に隠れてすぐに現れた。また影が出来る。

「今更何？ 私を懐柔でもしようって言うの。そんな事言ったって、私はほだされないんだから」

「懐柔する気も命乞いする気もないよ。コーチが死んだのも、君に罪を犯させてしまったのも、全て僕が原因なんだ」

「……」

「言い訳する気はないけど。僕は君に言わなかった事がある」

「……何」

空たちを警戒しつつ、飯田は光に問う。光は風で乱れた髪を軽く押さえた。

「僕がスケートを辞めたのは嫌いになったからじゃない。事故で、怪我を負ったからだ」

「怪我？ そんなの誰も言っていなかったわ。お母さんも、あなたはまたスケートを始めたって……」

「君のお母さんにそう言ってもらうように頼んだんだよ。もうスケートができないって分かったのは、君との約束の後で。まだ、君に言うべきではないって……」

「嘘よ」

飯田は光の言葉を、途中で遮った。また腕が振るえている。光の言葉を信じたくない気持ちのあらわれか。

普段おとなしい飯田の叫びに気おされたのか、空も海も立ち止ま

りじつと飯田を見つめている。

「嘘よ、嘘。だって、お父さんはあなたにスケートを続けて欲しくて、だから、あなたを庇って死んだのに。じゃあ、何でお父さんは死んだの？ 何でなのよ」

何度も繰り返される問い。飯田は父親が死んでからずっと、この問いを繰り返してきたのだろう。だがこの問いに答えなどないのだ。誰も答えなど持つてはいないのだ。事故に遭った光でさえ、ずっと分からないままなのに。

「ごめん、ノンちゃん。約束したのに」

光の言葉に飯田が目を見開いた。その目にうつすらと涙が浮かぶ。「ノンちゃんなんて呼ばないで。そう呼んでいいのはお父さんだけなんだから」

「飯田、もういいだろ。解っただろう。光だって本当はスケート続けたかったんだよ。飯田のお父さんが死んだのだって、事故じゃないか。不幸な事故だったんだよ。もういいだろう。ナイフ寄せよ、危ないから」

空がようやくここで口を挟んだ。飯田に手を差し出して、ナイフを渡すように促す。そんな空から、飯田は一步後退る。ナイフを手に握り締めたまま。

「飯田」

もう一度、空は先ほどより強い調子で飯田の名を呼ぶ。飯田はただ首を横に振った。まるで駄々をこねている子どものように何度も「ダメだ。空」

飯田に近づこうと前進していた空は、足を止め、光を見た。

「いいんだよ、飯田。君の気の済む様にすればいい。そのナイフで僕を刺したければそうすればいいんだ」

「おい、光」

「何言い出すんや」

驚いて、空と海は光に言うが、光はそんな二人を睨んだ。

「お前らは黙ってる。……飯田、僕を殺してもコーチは生き返った

りしない。それでも僕を殺したければ、いいよ殺して」

そう言って、光は目を閉じた。無防備なその姿を、飯田は呆然と見つめていた。動こうか動くまいか迷っているようだ。

空はじつと飯田に視線を注ぐ。飯田が動こうとしたら、何が何でも止めるつもりだった。たとえそのせいで、自分が怪我をしたとしても。

どれ位時間がたったのだろう。

沈黙が落ちる中、光が静かに目を開けた。

「どうした？ 飯田。僕が殺せない？ 僕を殺したいほど憎んでいたんだろう」

「……」

「僕に死んで欲しいって言っただろう」

静かな光の問いに、飯田は答えなかった。じつとナイフを構えたまま、視線を下へと落とす。

光は疲れたように溜息を吐くと、飯田から視線を外した。そして、屋上を囲む柵の方へゆっくりと向かう。

空と海、そして飯田も光の突然の動きに、呆然と見入っていた。光が柵を掴む。柵は光の腰の位置までしかない。光は柵から少し身を持ち出して下を見た。眼下に広がるのは校庭のはずだ。今なら運動部の生徒が列を作って走っている姿が目に入るだろう。光はゆっくりと空達を振り返った。

光は、空と海、そして飯田の顔を見回してから、普段滅多に見せる事のない笑顔を作った。

「飯田ができないなら、僕がここから飛び降りるよ」

穏やかな声だった。じつさい光の心は穏やかだった。やっと自分のすべきことが分かったと、そう思っていた。

「ふ、ふざけるな馬鹿野郎。なんでお前が飛び降りなきゃなんねーんだよ。お前は何も悪い事なんてやってねえじゃねーか」

「そうや、光。少し冷静になれや。いつものお前らしくないで」

そう言って間合いを詰めてくる空と海を見やり、光は口を開く。

「ずっと、おかしいと思ってたんだ。どうして生き残ったのが僕だったんだろうって。生きる事を望まれてもいない人間が生き残ってどうして愛されてる人間が死んでしまったんだろうって。コーチはとてもいい人だった。飯田がこれだけ慕うんだから分かるだろう」

「……」

「でも僕は何の価値も無い人間なんだ。生きている事自体、間違いだっただよ」

淡々とそう言った光は、また眼下を見下ろすように柵に手をかけた。その背に向かって、空と海は走り出す。

そして。

光が柵を越えた。

「光」

空と海の声が重なった。空は光に向かって手を伸ばした。

音がするほどに柵に身体を強くぶつけた。息がつまる。痛い。だが、指は掴んでいる。光の手首を。

「空、離すなや」

空は光の重みで引き摺られそうになる体を、光を掴んでいる方とは逆の手で、柵を掴んで堪えた。その空を海が後ろから支えて、光に手を伸ばす。

「おい、つかまわって、光」

空の腕に掴まるうともせず、光は空と海を見上げている。伸ばしてきた海の手を取ろうともしない。

「何してんねん。ホンマに落ちるって。光」

「離せ、空。お前まで落ちる」

光の声が空の耳に入る。空は怒りに火がつくのを感じた。

「馬鹿野郎。離せるわけ、ないだろうが。俺にお前を見殺しにしろって言うのかよ。出来るわけねえだろう。できねえよ」

本当は怒鳴りつけてやりたかった。だが怒鳴ると光の腕を掴んでいる力が弱まりそうで、自然と声がかすれたようになる。

「なあ、光。頼むから手え伸ばせ、このままやったら空まで落ちてまう」

海が言うが、光は手を伸ばさない。

「そっだよ、空。早く手を離してくれ」

「そっじゃねえだろ、馬鹿野郎。お前を落としてたまるか。俺はもう二度と、人が死ぬのなんて見たくねえ」

「空……」

「おい、飯田。聞えてるんだろう。お前がこんな事やったのは、光を恨んでの事だって分かってる。でもな、お前が父親を大事に思っていた様に、俺だって光が大事なんだ」

光に何を言っても無駄だと空は思ったのだろう。後ろにいるはずの飯田に聞えるように、声を張り上げた。先ほどよりもしっかりと、光の腕を掴む手に力を込めて。

「そっや、飯田。手伝ってくれ。光が落ちてまう」

海は空を支えながら、出来る限り振り返って飯田に訴えた。飯田は身体を震わせて首をただ横に振る。

「頼むよ。お前の父親がたった一人のように、俺にだってコイツは血の繋がった、兄弟なんだ」

「え？」

「飯田。俺たち三人、血の繋がった兄弟なんだ。コイツは俺たちにとって、大事な大事な兄弟なんだよ」

空が吠える様に言った。光の手首を掴んでいる手が震えている。限界が近かった。ずるずると、光の体が少しずつ滑り落ちていく。

「飯田、頼むから。俺らの目の前で光を死なせんといってくれ」

海の大声に、飯田は肩を揺らした。大きな叫び声を上げると、持っていたナイフを捨て、空たちのもとへ走った。

空の横から身を乗り出して、光に手を伸ばす。

「春名君、手を伸ばして」

泣きながら飯田が言った。それでも光は首を横に振る。

「ダメだよ、飯田。もう、疲れたんだ」

「光！」

「疲れたんだよ」

囁く様にいわれた光の言葉は、不思議と三人に良く聞えた。

「くっ」

腕がしびれてきた。空は柵を掴んでいた手も離して、光の手を掴む。その空を海が必死で支える。飯田は光の手を掴もうと手を伸ばす。引き上げるのは無理だ。このまま光を死なせてしまうのか。

空の頭にそんな言葉が過ぎった。

その時。

「何やってるんだ」

背後から切迫した声が聞こえてきた。この声は知っている。そう思ったとき飯田を押しつけた男の姿が、空の視界に入った。

男は空の掴んでいた光の手を取ると、空に行くぞと声をかけて、光を引っ張り上げた。

どっと空は勢い余って尻餅をつく。男は光の腰に腕を巻きつけて柵の中に引き込んだ。

「一体何があったんだ」

「私市さん、どうして」

呆然と光が男を見上げた。男は先ほど海に電話をしてきた私市刑事、その人だった。

「おい、大丈夫か？ 顔色が真っ青だぞ」

光の顔を覗きこんで私市が問い返す。その光の足から力が抜けた。私市は咄嗟に光の腕を掴んでその身体を引き寄せた。

光が口元を抑えた。その手の中から咳が漏れる。
発作だ。

「光」

尻餅をついたまま呆然としていた空は、海と共に光の元へ走り寄る。

私市は救急車を呼ぶために、胸ポケットから携帯電話を取り出す。
光の咳は止まらない。

「うっ、わああああ」

焦っている空たちの背後で、飯田が泣き崩れる。

その泣き声があらわすものは後悔か。

それとも、光を殺せなかった事への無念の涙か。

それは飯田にしか分からない。

飯田にしか、分からないのだ。

第十八章 失くしたモノ

光が病院の個室で目を覚ましたのは、気を失ってから二日目のことだった。

ゆっくりと目を開けた光に、見舞いに來ていた空と海が声をかける。

「あ、目を覚ました」

「大丈夫か？ 光」

突然二人の顔が視界に入って驚いたのだろう。光はゆっくりと瞬きをして、一呼吸おくと口を開いた。

「ここは？」

「病院だよ」

光の問いに答えたのは空だ。光はゆっくり起き上がると、静かに室内を見回した。淡い色調の簡素な部屋。光の寝ているベッドの横には点滴の袋が吊るしてある。点滴の管の先は光の腕につながっていた。

「お前が屋上で喘息の発作起こして、氣い失ってから二日もたったんやで」

「二日……」

「そう、二日や。心配したんやぞ」

「そうだよ。病院の先生は大丈夫っていったけどさ。もうこのまま目を覚まさないんじゃないかって、不安で」

空が泣きそうな顔で光を見る。海も少し疲れたような顔をしていた。

「あの後、どうなった？」

光は顔を俯けて、誰にともなくそう聞いた。

「飯田は自首したよ。全て自分がやったことですから、私市刑事に頭を下げて」

「……そうか」

「あいつ、なんであんな事しちゃったんだろうな。お前を困らせようとか、そんな事せずに直接お前に言えばよかったんだ。最初からさ。そしたら、こんな事にならずにすんだのに」

「……」

光は空の言葉を黙って聞いていた。

「あ、あと俺を階段から突き落とした犯人やけど……」

海の言葉の途中で、光は言った。

「ああ、飯田だろ」

「……なんで分かったんだよ」

驚かしてやろうと思ったのにと、空が唇をとがらせる。

「それは、考えなくても分かるじゃないか。飯田が犯人で坂木先輩が共犯者なら、海が突き落とされた時の状況が見えてくる。どうしても海が突き落とされなければならなかったのかもな」

「当たってるかどうか聞いてやるよ。言ってみな」

空はどこか偉そうにそう言った。光は溜息を吐くと口を開く。

「飯田は間違えたんだ。僕と海を……」

「……どうして？」

「朝倉が言ってたんだろう？ 僕と海の後姿が似ているって。飯田は階段を下りる海の後姿を見て、僕だと思ったんだ。飯田は教室の事件でもウサギの事件でも、僕を困らせることに失敗していると思っただけだし、今度は直接、僕を狙った」

「うん、それで？」

「飯田は僕を突き落とすつもりで、間違えて海を突き落としてしまった。海が落ちて倒れた後、気づいたんだろうな。先輩が駆けつけた時、たぶん飯田は階段の上にいたんだろう。先生の話じゃ、先輩は海の傍らに膝をついて、階段を見上げていたって言うていたから先輩は飯田が突き落とした事がばれないように海の制服に警告の紙を入れたんだと思う」

「おお、当たったよ」

「さっきまで寝とったのに、よう頭まわるなあ」

海は感心したような、呆れたような声を出した。

その時、光が何度か咳を繰り返した。

「……大丈夫か？ 光」

光は咳をおさめると、頷いて口を開こうとした。だが、光が答える前にドアがノックされる。

「はい」

なぜか空がノックに答えた。三人の耳に、ドアが開く音が聞える。開いたドアの向こうに、四十代くらいの男性の姿があった。

背が高くしつかりとした体つきで、高そうなスーツを身につけている。そのスーツがやけに良く似合っていた。

誰だろう。

空と海が同時に疑問を持った時、光がその人物を見て口を開いた。
「お父さん」

光に父と呼ばれて、光が目覚ましていたことに驚いていたようだった男性が、我に返った様に瞬きをした。

光の父は、その顔に怒りを滲ませると、足早に光のもとへやって来る。

空と海が見ている事に気づいていなかったのか、気づいていてそうしたのか、光の頬を平手で打った。

「あ」

「げっ」

空と海が思わずそう声を漏らすほど、打たれた頬は痛そうだった。打たれたとうの本人は、呆然と打たれた頬に手をやって、父を見上げた。

「光、お前はもう高校生だ。手すりを乗り越えたらどうなるか、分かる年だろう。飛ばされた紙を取る為に屋上の柵を乗り越えるなんて、何て馬鹿なことをしたんだ」

言われて光は空たちを驚いたように見る。二人は顔を見合わせて苦笑いした。

光の父が言ったのは、二人が光の両親にした作り話だ。光は大切

な書類を風で飛ばしてしまい、屋上の端に引つかかったそれを取ろうとして落ちそうになった。それを見つけた二人が引き上げた。公にはそう言うことになっていたのだ。

「聞いているのか、光」

言われて光は空と海から父親の方に視線を戻す。普段滅多に怒ることのない父が怒っている。光は聞いていると答えて、静かに次の言葉を待った。

「お父さんとお母さんが、どれだけ心配したと思ってる？ 目を覚まさないお前を見て、どれだけ心配したと」

父の声が震えていた。それだけで、どれだけ心配をかけたのか分かる。光は静かに謝った。

「ごめんなさい」

「もう二度とこんな事しないでくれ」

そう言うと、父は光を抱きしめた。突然の抱擁に、光はどうしていいか分からなくなる。視線をさまよわせると、空と目が合った。空はにんまりと笑っている。

光は急に恥ずかしくなった。頬が熱くなる。頬の痛みは既に感じなくなっていた。

どうしたらいいのか分からない。だが、光は父親を突き放す事はせず、ただじっと、父親が離れるまで動かなかった。

空と海は病室を後にした。光が目を覚ましてくれてほっとしたと同時に、力が抜けた。あの後すぐに光の母親も現れた。その母親に父親と同じように抱きつかれて、光はまた赤面していた。

それを思い出して、空はふっと口元に笑みを乗せる。

信号が赤に変わった。

空は横断歩道の前で立ち止まると、傍らに同じように立ち止まっ

た海を軽く見上げた。

「なあ。俺、光のあんな赤面した顔見られるとは思わなかった」

「ああ、思いつきり照れとったな、あれは」

「しばらくネタにできるな」

「そうやな、思いつきりからかってやろうや。心配掛けさせられた分も」

空と海は共犯者の笑みで互いを見やった。

信号が青に変わった。動き出す人々と共に空と海も横断歩道を渡る。

しっかりと先を見据えて。

テレビではひっきりなしに、空たちが巻き込まれた事件が、報道されていた。未成年という事で顔と名前は公表されなかったが、飯田の家の前には多くの報道陣が集まった。

最初犯人とされていた少年が、少女を庇っていたと言うことでマスコミは色めきたった。今までかなり坂木を批判していた人の中には、坂木に同情的なコメントをするものも現れた。

空はテレビのリモコンを取ると、電源のボタンを押してテレビを消した。

まだ見ていたのという、母の声を背に二階に上がる。事件の犯人が名乗りを上げたことで、また学校は休みになっていた。

事件は終わったと、皆言っている。

だが、全て解決したわけではないと、空は思っている。

まだ、本当の意味で解決したわけではないのだと。

そしてコレを解決できるのは、自分と海しかないのだ。

エピソード

墓と墓の間の、小さな歩道の先に、陽炎が見える。

暑い。

細い道の先を見つめていた空と海は、同時に腕で額の汗を拭う。

「遅い」

「遅いな。ちょっと見に戻るか」

空の呟きに返事をして、海は眺めていた道の先を示した。

空と海と光は、自分達の本当の両親の墓参りに来ていた。夏休みを利用して一度行こうと計画を立てていたのだ。場所は緑園で確認できた。

水を汲んでから行くと光が言うので先に来ていたが、墓の掃除が終わってもまだ光は来ない。二人は持ってきた掃除道具とゴミの入った袋を手に、来た道を戻った。

水汲みが出来る場所まで来ると、木の桶を傍らに置いて、道の端に座り込んでいる光の姿を発見した。

「おい。何やってんだよ」

「気分でも悪いんか」

光の前に二人が立つと、光は顔を上げる。眼鏡の奥の瞳が二人の顔を映す。

「わるい。足痛くて……」

その言葉に、空は心配する声をかける代わりに怒鳴った。

「おいお前な、痛かったら痛い、しんどかったらしんどい、無理なら無理ってちゃんとええ」

両の拳を握り締めて怒鳴った空の肩に手を置いて、海が空をなだめる。

「まあまあ、落ち着けや。光、立てるか？ 杖持って来てるんやろ。それ出せや。水は俺が運ぶから」

「いいよ、自分で……」

海の申しでを光が断ろうとしたようだったが、空がその言葉を途中で止めた。

「自分で出来なかったからこんなところでうずくまっていたんだろう。好意は素直に受ける」

「……」

「ほら立って。早く墓参りして、飯食うぞ」

空は光の肘を掴み、立ち上がらせる。光はされるがままに立ち上がった後、右肩にかけていたリュックから、折りたたみ式の杖を取り出した。その光の耳に、海が口を近づけて囁く。

「空が不機嫌なのは、腹が減つとるからやな。間違いないで」

その断定的な言葉に、光は微かに笑みを浮かべた。

墓参りを終えた空たち三人は、墓場を後にすると、駅近くの大衆食堂で昼食をとった。

その後すぐに家に帰るのはもったいないと、食堂でおばさんに教えてもらった近くにある滝を見に行った。光に合わせてゆっくりと歩いていたので、思ったよりも時間がかかった。

帰るために向かった駅へ着く頃には、日が傾き始めていた。

この駅は無人駅だ。空は改札機のない駅の構内に入ると、設けてあるベンチに座った。

それにならうように空の隣に光が腰掛ける。海はベンチの横にある時刻表を眺めると、顔を顰めて声を上げた。

「げっ、あと五十分も待たなあかで、コレ」

「うそ！」

「ほんまやって、今六時半過ぎやろ。最終の七時二十分までないもん」

そう言いながら、海は光の隣に腰掛けた。

彼らの正面には、反対方面へ向かう電車の停まるホームがあった。その先に、数件の民家と田畑。そしてその奥には夕焼け色に染まっ

た山並みが見える。夕日はその山に向かって下りてきているように見えた。

「綺麗やなあ」

海が感嘆の声を上げ、光が頷いた。だが空は海に頷く事はせず、じつと夕日を見つめていた。

「どうしたんだ？ 空」

いつも何かと騒がしい空がおとなしいと、気になるのだろう。光が空に声をかけた。その声に反応するように、空が光を見る。空はいつになく真面目な表情をしていた。

「どうしたんだよ、空」

もう一度光が聞いた。

空は言った。

聞きたかった事があるんだと。

光は首を傾げた。

「僕に？」

「ああ。……光。お前まだ、自殺したいと思ってるのか」

唐突な質問に、光は眼鏡の奥の目を見開く。海がその横で息を飲んだ。

「何だよ、いきなり」

光はそれだけ言つて、空から目を逸らした。

「俺は聞いているんだよ。お前、まだ死にたいと思ってるのか」

「……いや、思っていないよ」

小さな声で光が答えた。

空はずっと気にかかっていたのだ。あの時、あの屋上で、光は自ら死のうとした。でも結局、空たちのせいで光は死ぬ事が出来なかった。

死ねなかった事に後悔をしているのではないかと、空は思っていたのだ。

だが光は否定してくれた。空は光の答えに、安堵の息を吐こうとした。だがその前に、光の呟きが耳に入った。

「……父さんたちに、迷惑がかかるし」

その言葉を聞いた瞬間、空はきれた。立ち上がり、光を見下ろして怒鳴った。

「何だよそれ。じゃあお前は、親父さんたちに迷惑かからなければ死ぬっていうのかよ。生きたいとは思わないのかよ」

「……」

光は何も言わず、立ち上がった空を見上げている。そんな光に、海が声をかけた。

「なあ、光。お前あの時言うてたよな。自分には生きてる価値がないって、アレどういう意味や。俺にはお前に生きる価値がないなんて思えへん」

「どうしてそんな事聞くんだよ」

光が呟く。珍しく動揺したように視線をさまよわせながら。

「どうして？ そんなの決まってるじゃん。お前が心配だからだよ。俺たちはお前に目の前で死なれそうになったんだ。心配なんだよお前が。お前、あの事件以来、ずっと塞ぎがちじゃないか。俺たちはお前に死なれたくない」

また大声を上げた空を見もせずに、光は踵をベンチの端に寄せ、膝を抱えた。顔を隠すようにたてた膝に顔をうずめる。

「光？」

その突然の動きに驚いて、空と海が同時に声をかける。

「もう疲れたんだよ。生きること」

膝に顔をうずめているせいか、少しくぐもった光の声が聞こえてくる。

「何言ってるんだよ」

空は立ったまま光を見下ろす。光の声がまた空の耳を打った。

「……僕が、春名の家の人間じゃないと知ったのは五歳の時で、初めて親族の集まりに顔を出した時だった」

「へ？」

空は呆気にとられた。いきなり光が昔話を始めたからだ。空が海

を見ると海は頷いた。黙って話を聞けと言われたような気がして、空も頷き返す。

「その時言われたんだ。お前は病気持ちで、なんの利用価値もないって。どうしてお前みたいな人間を、父さん達は引き取ったんだって。どうせすぐ、飽きて捨てられるって、笑われた」

「何だそれ？ そんなわけないじゃん」

「そうやで、光。そんな気にする事ないって」

空と海が口々に言う。だが光は顔を上げなかった。光の声が空の耳を打つ。

「ああ。お前達なら気にしなかったかもな。殴られても蹴られても、お前達なら、向かって行けただろうな」

「そんな事までされたのか」

驚いて叫んだ空に、海がしーっと、唇に人差し指を当てた。せつかく光が話す気になったのに、水を差すなど言いたいのだろう。

「ああ。でも、昔の事だ」

そう言って、光は顔を上げて空を見た。いつもと変わらぬポーカ―フェイスがそこにあった。赤い夕日を反射して、眼鏡がひかる。

その表情を見て、空は息を飲んだ。何故息を飲んだのかは、分からなかった。

光は一つ溜息を吐くと、顔を俯けてまた話し始めた。

「親族の集まりがあった後、僕は親にどう接すればいいか分からなくなかった。ただ捨てられたくないって、そんなことばかり考えてた。でも、捨てられずにいるにはどうしたらいいか分からなくて。ずっと部屋に引きこもって、三日三晩考えて出た答えが、僕が親にとって価値のある子どもでいることだった」

「……」

「そんな事ばかり考えて、家に引きこもっていた僕を心配した両親が、スケートに連れて行ってくれたんだ。その時、フィギアスケートに出会った。綺麗な女の人が、まるで妖精のように滑ってた。僕はそれに魅了されたよ。その時、父にフィギアスケートをする事を

進められたんだ」

「それでスケートを始めることになったのか」

空が問うと、光は小さく頷いた。

その時、がたがたと大きな音を立てて、近くの踏切を軽トラックが通り過ぎた。それをなんとなく全員で見送ってから、また話が再開された。

「スケートを始めて気づいたんだ。両親は僕が試合に出るたびに、必ず仕事を休んで見に来てくれる。試合に勝てば喜んでくれる。周りの評価も変わってくる。だから、スケートさえしていれば、僕は両親にとって価値のある人間になれるって」

そこで光は一度言葉を切った。疲れたように息を吐く音が、空の耳を打った。

空はじつと、光を見つめる。

ずつと、強い人間だと思っていた。

何があっても動じない、光は強い奴だと。

実際。光は色々な事件が起こったときも、一人動揺を見せなかった。

飯田に呼び出されて、屋上に行くまでは……。

だがその考えは間違っていた。光は強かったんじゃない。光は強く見せようとしていただけなのだ。

意識していたにしろ、無意識にしろ、光はずつと、強い人間に見えるように振舞ってきた。

周りの色々な攻撃から身を守るために、強さという名の鎧をつけて。光はずつと、自分を偽ってきたのだろうか。鎧の下にたくさんの傷をおいながら。

そしてその傷は、今もまだ癒えてはいないのだ。

「僕がスケートの大会で優勝して、名が挙がるに連れて、僕に冷たい態度を取っていた親戚達の態度も、少しずつ和らいでいった。父さんたちが僕のせいで、陰口を言われる事もなくなっていたんだ。あの日までは……」

光の言うあの日は、事故にあった日のことだろう。一度思い出したように、苦い顔をした光は、膝を抱く手に力を込めたようだった。

「事故に遭った後。医者にもうスケートをする事は出来ないと言われて、僕は愕然としたよ。僕が人に誇れるのはスケートだけだった。普段仕事が忙しくて、殆ど家にいなかった両親が、僕を顧みてくれるのはスケートをしている時だけだった。だから、愕然とした……」

「光……」

海が光の名を呟いた。海が目が少し潤んでいるように、空には見えた。夕日の加減でそう見えるのかもしれないが、きつと違う。

「母さんが叫んだんだ。この子にはスケートしかないのにつて。その時思った。ああ、僕はもう価値のない人間に成り下がったんだつて。誰に誇る事も出来ない、両親のただのお荷物になってしまったつて」

「……そうか、それでお前は謝ったんやな。お母さんに、ゴメンつて」

海が静かに光に聞いた。光が小さく頷く。

空は意味が掴めず、えつと声を上げた。その声を聞きつけた海が、立ったままの空を見上げて口を開いた。

「言うつたやろ、みさきさんが。光にスケートが出来ないつて言うた時、光は泣きもせず謝ったつて」

空も思い出した。みさきは言っていた。あの子はただ申し訳なさそうに謝ったと。

光はスケートが出来ない事を悲しんだんじゃない。スケートの出来ない自分が、両親の重荷になることを恐れたのだ。

空はやつと理解できたような気がした。ずつと思っていたのだ。自分ならきつと泣くのに、どうして光は泣かなかったのだろうと。

「……涙はでなかったよ。僕はただ怖かったんだ。ケガをして、人並み以下に成り下がった僕は、両親が自慢できるようなことを何一つ出来ない。このままじゃ捨てられてしまつて。そう思うと、怖

「かつたんだ」

「お前の親がお前を捨てるわけじゃないか。みさきさんが叫んだのだって、お前がスケート好きな事知ってたからそう言ったんだ。お前の事を思ってたんだよ。それは光だって分かるだろう」

空は光の隣にゆっくりと腰掛けた。光は黙ってその動きを目で追っていた。しかし光は、空の問いに答えようとはしなかった。

「なあ、光。お前の親はお前が大好きや。価値があるとかないとか、そんな関係ない。ずっと一緒に過ごしてきたんやろう。お前にだつて分かるはずや。お前の親はお前を捨てたりせえへん。絶対や」
「……捨てはしないだろうな。世間体もあるし、父さんたちは優しいから」

小さくそう漏らした光の言葉を、空は聞き咎めた。
どうして分からないのだ。

どうしてそんな風に思うのだと。

「何で？ 何で解んねえんだよ。優しくだけで、どうでもいいと思ってる子どもを育てられるかよ。屋上から落ちそうになったって連絡受けて、海外の出張先から慌てて戻ってきたりするかよ。お前のこと、殴って叱ったりしやしねえよ」

空が言ったのは光の父親のことだ。光の父親は光が入院したと言う知らせを受けて、仕事そっちのけで、文字通り出張先から飛んで帰ってきたのだ。

視界が不意に歪んで見えて、空は慌てた。

そんな空を見ていた光が、眉を寄せる。

「空、何で泣くんだよ」

「泣いてねえよ。泣いてねえけど、お前が余りにも分からずやなこと言うから……」

泣いていないと言った先から、空の頬に涙がつたう。

悔しかった。

光はあんなに両親に愛されているのに、愛を注がれているはずの光に、その愛は届いていないのだ。

光は気づいてくれないのだ。

スケートが出来るからとか、そんな事ではない。光の両親にとって、いや、空たちにとっても。光が生きている。その事にどれだけの価値があるのか。

光にはそれが分からないのだ。

空の涙は、一度溢れると止まらなかった。もう泣いていないと言うことは出来なかった。

光はどうしたらいいのかわからないように、膝を抱いていた手を片方離して、空の肩に触れようとした。だがその手は途中で止まり、ベンチへと下された。

海が静かに光を呼んだ。光が振り向く。海は普段滅多に見せることのない真摯な顔で光を見た。

「光。空はお前の代わりに泣いてくれてるんや。お前、自分が悲しい目に遭うても、全然泣かへんやんか。お前は辛い目に遭うて来たんや。いっぱい泣く資格はあるのに、いっこも泣かへんから、涙が溜まって、重くなって、支えられなくなったんや。そりゃ疲れもするわ。お前はもっと、吐き出さんとあかんのや」

海の言葉に、光は表情を動かした。眉をよせ、珍しく海にくっついてかかる。

「……泣いてなんになる？ 泣いたらこの足が元にもどるとでも言うのかよ。泣いたらもう一度、スケートが出来るようになるって言うのか」

光の言葉に海は首を横に振る。

そんな海に向かって、光が口を開きかけた時、空は光を横から抱きしめた。

驚いた様に、光は動きを止める。

「空？」

困惑気味に、光が空の名を呼んだ。空は震える声で言った。

「スケート、……好きだったんだな」

そう言った瞬間、光が肩を震わせた。空はもう一度言葉を繰り返

した。

「光。おまえ、スケート好きだったんだよ」

「っ……………」

光が声を詰まらせたのが解った。

空は光が身動きするのに合わせて、光を抱いていた手を離す。

また零れ落ちそうになる涙を拭った。

光は立てていた膝に突っ伏する。

くぐもった声が、空と海の耳を打った。

「そう、だな…………好き…………だったんだ。そうだよ。僕は、スケートが好きだった。…………ひんやりとしたリンクの上に立つと、いつも心があらわれる気がしてた。嫌な事全て忘れられた。本当は、ずっとあそこにいたかったんだ……………」

「光」

空と海が同時に呼びかけた。

光の肩が震えていた。

細かく震えていた。

空はもう一度光の名を呼んだ。

「光……………」

「…………なのに、足が痛いんだよ。足が、痛いんだ。もう…………リンクに立つことも出来ない」

光の口から嗚咽が漏れ始めた。

光はゆっくりと身を起こし、震える手で眼鏡を取った。

眼鏡を持った手とは逆の手で目元を覆う。

「辛いよ……………」

涙で滲んだ声がそう訴えた。

光は本格的に泣きだした。ずっと流れる事のなかった涙が、とめどなくあふれだす。

空と海はそんな光から視線を外して、夕日に目を向ける。日が沈む前の大きな太陽は、辺りを赤く染めていた。自分達を包む夕日は、暖かくせつなかった。

二人は示し合わせたかのように、背を丸めて泣いている光の背に、腕をまわした。

やがて夕日が山に隠れて見えなくなる頃。光の涙がようやく止まった。涙でぐしゃぐしゃになったハンカチをポケットにしまい、光は眼鏡をかけなおした。

いつの間にか辺りは暗くなり、駅の蛍光灯には、あかりがともっていた。

もうすぐ電車が来る。

三人は立ち上がって線路の先を見る。電車が駅に近づいてくる姿が目映った。

電車が駅に停まり、ドアが開く。

車内は妙に明るく見えた。

そして……

三人は明るい世界へと、足を踏み入れた。

エピローグ（後書き）

（後書きです）

ここまで読んでいただき、本当に、本当にありがとうございました。

誤字脱字、変換ミス等ひじょうに多く、申し訳ありませんでした。少しずつ修正しています。

今回でこのお話は最終回となります。いかがでしたでしょうか？ 作者的には大団円だったんですけど……。へたくそなりに思いはこもっていますので、少しでもお気に召していただければ幸いです。それでは、この長いお話を最後まで読んでくださりありがとうございますございました。ネット小説ランキングに投票くださった皆様。本当にありがとうございました。まさか、自分の作品に投票してくださる方がこんなにいるとは思っておりませんでした。本当に嬉しかったです。評価、感想を下さった方。メッセージを送ってくださいました方。ありがとうございます。本当に読んでいただけていると実感できました。嬉しかったです。

もしよければ、ちょこつと感想や評価など、していただけると嬉しいです。このキャラが好き、とかでもよいので。今後の執筆活動のためにも気になるところなんです。（ずうずうしいですよ。すみません）皆様のご意見やご感想は本当に参考になります。

それでは、またお会いできる事を願って。

愛田美月でした。

追記

2009年7月 アルファポリスさまのミステリー小説大賞にエントリーしました。

応援よろしくお願いいたします。投票していただけると励みになります^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044d/>

三兄弟の事件簿

2010年10月8日13時03分発行